## 上大利北土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

# 牛頸本堂遺跡群Ⅱ

~ 第5次調査(第1冊)~

大野城市文化財調查報告書第64集

2 0 0 4

大野城市教育委員会

### 上大利北土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

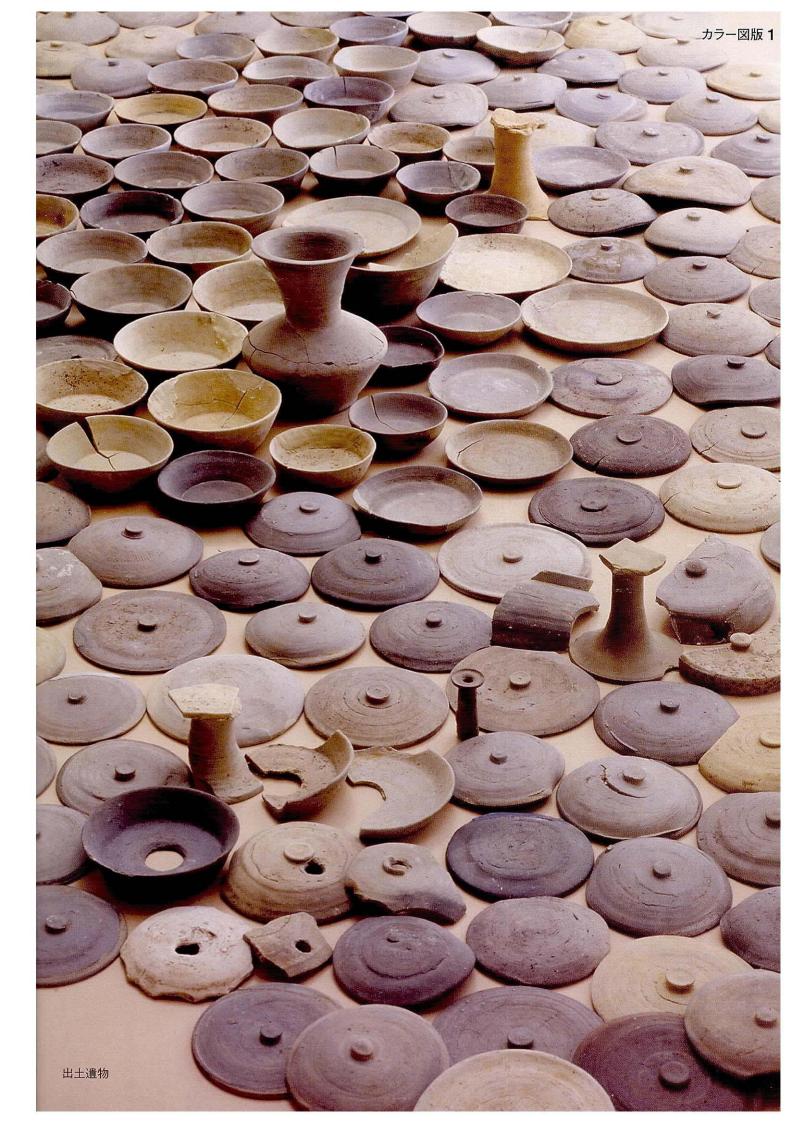
# 牛頸本堂遺跡群Ⅱ

~ 第5次調査(第1冊)~

大野城市文化財調查報告書第64集

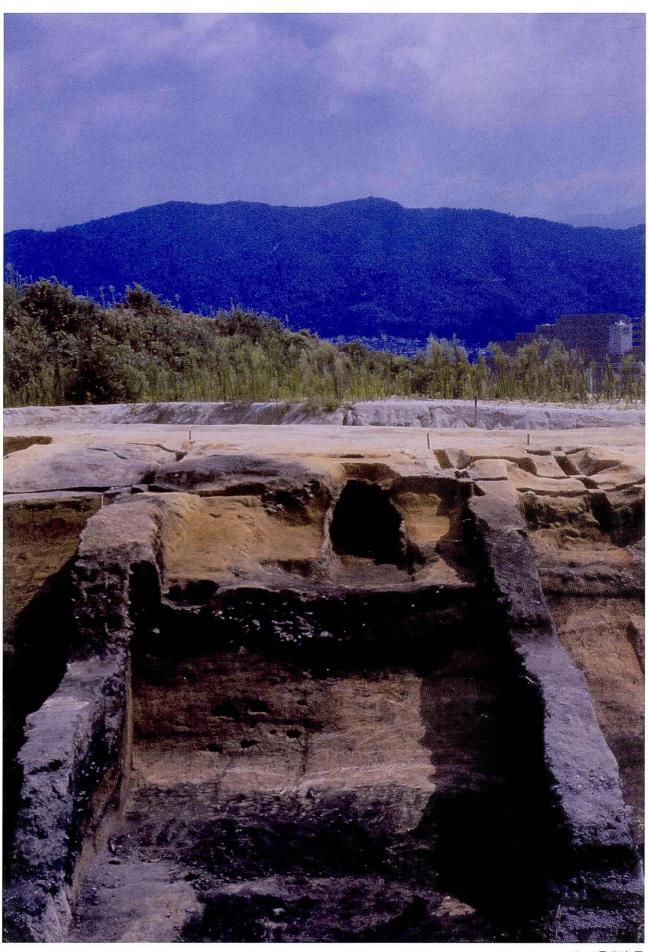
2 0 0 4

大野城市教育委員会





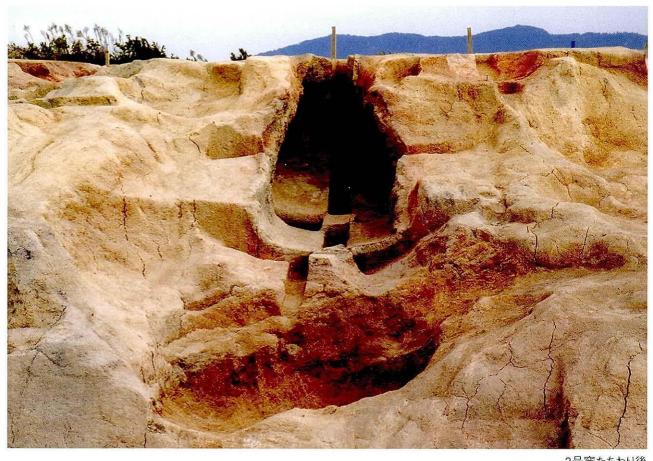
出土瓦塔



2~5号窯全景



2~5- [[ 号窯全景



3号窯たちわり後



2号窯全景



4号窯全景



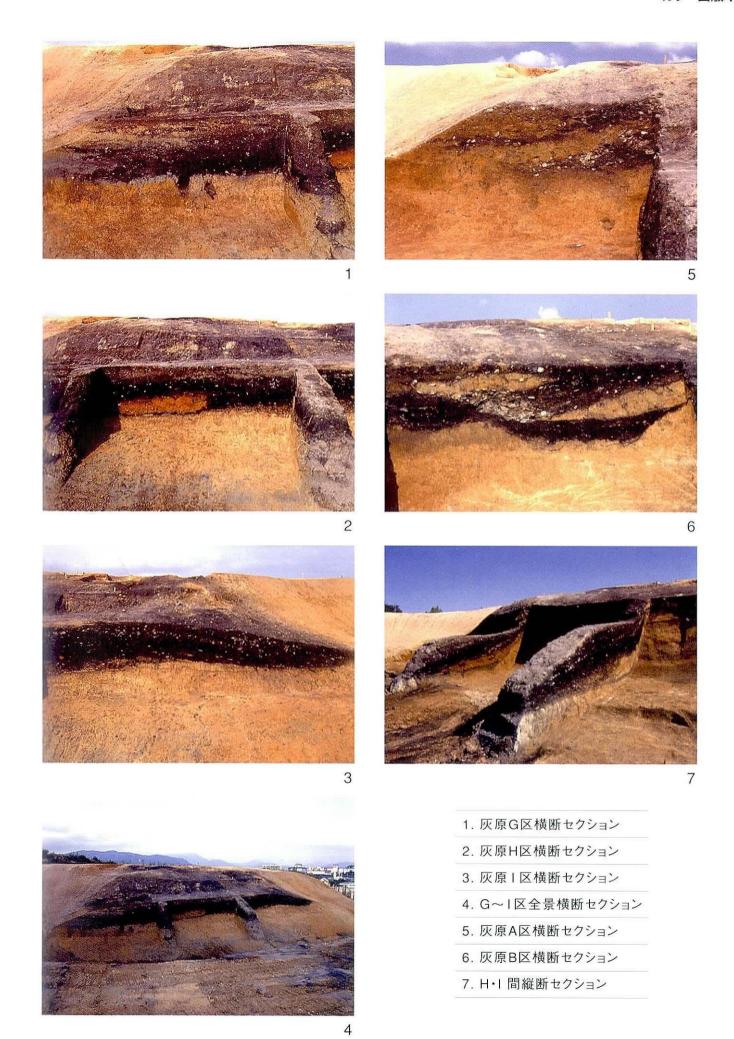
5号窯全景

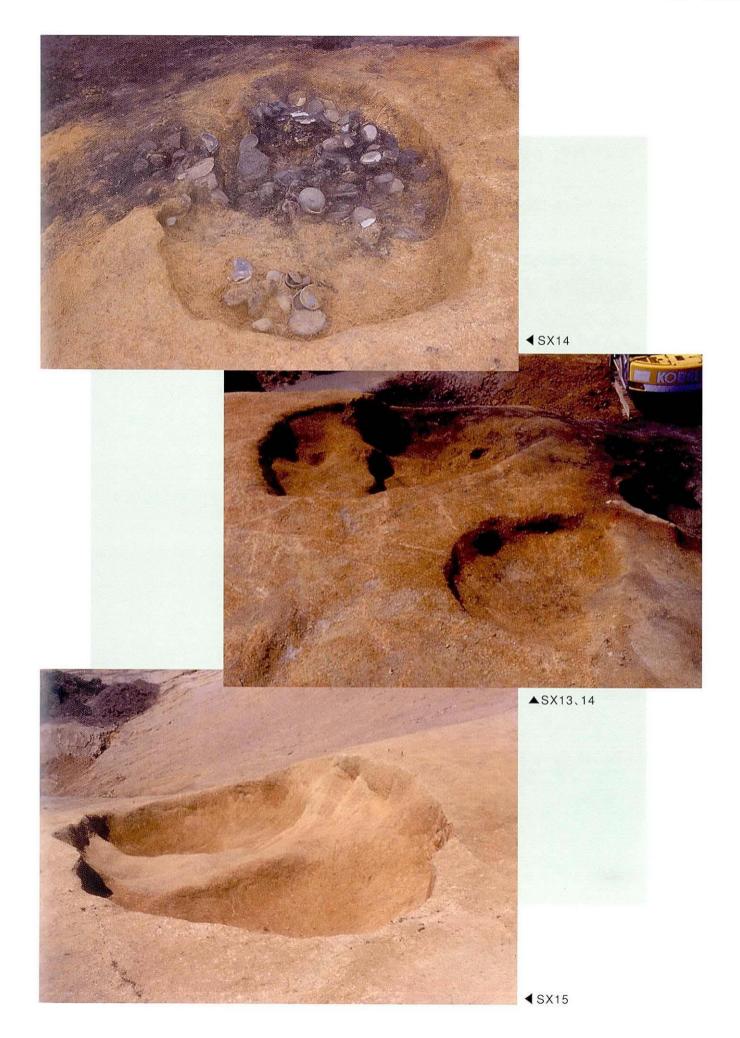






5-|| 号窯たちわり後





上大利地区では事業面積が48haにおよぶ大規模な区画整理事業が計画され、平成13年度より本格的な発掘調査を実施しております。

今回報告する牛頸本堂遺跡第5次調査では、たくさんの窯跡が見つかり灰原からはパンケースにして400箱もの須恵器が出土しました。須恵器のほとんどは奈良時代のもので、その中には瓦塔という九州では極めて珍しい遺物も含まれていました。これは牛頸窯跡群の新たな一面を見せてくれる遺物で、今後本書の成果が教育や研究の面におきまして、広く活用していただければ幸いに存じます。

今回の調査は、大谷女子大学の全面的なご協力をいただきました。調査を指導されました 中村浩教授をはじめ、学生諸姉には酷暑のなか発掘作業をしていただき厚く御礼申し上げま す。また、上大利北土地区画整理組合をはじめ㈱大成建設などの関係者ならびに発掘調査作 業員や地元の方々にご理解とご協力をいただきましたことに厚く御礼申し上げます。

平成16年3月5日

大野城市教育委員会 教育長 古 賀 宮 太

- 1、本書は、平成15年7月10日より平成16年3月31日まで実施した大野城市大字上大利666-1外に所在する本堂遺跡5次調査の報告書の第1冊である。なお、本書の内容は、平成15年8月18日~9月17日にかけて、大谷女子大学により調査された2~5-II号窯跡および周辺遺構の記録であり、調査区内のその他の遺構については、今後報告する予定である。また、調査地区は牛頸窯跡群の範囲内に含まれており、こうした歴史事象を踏まえ、本書の表題を『牛頸本堂遺跡群』とした。
- 2、調査は大野城市教育委員会主催のもと、大谷女子大学教授中村浩の指導を得て実施した。 なお、調査組織は後述する。この間、大谷女子大学文学部文化財学科学生(後出)、お よび地元の方々の参加協力を得た。
- 3、調査期間中、自然科学試料の採取のため岡山理科大学鳥居雅之教授および同大学学生の 来訪があった。なお、当該報告は後に刊行する報告書に掲載する予定である。
- 4、遺物整理は、大谷女子大学考古学研究室(代表中村浩)が担当し、同博物館で行った。
- 5、本書で使用した写真のうち、調査中のものは大野城市教育委員会技師石木秀啓および中村が撮影し、焼き付け等は大谷女子大学博物館学芸員下村恭子が担当した。さらに遺物写真については阿南写真工房が担当した。また校正他の編集補助を大谷女子大学博物館学芸員池田千尋が行なった。
- 6、本書の記述のうち、窯跡については窯、土坑についてはSXと表記している。

# 本 文 目 次

第1章 調査経過	
1、調査に至る経過	
2、調査体制	
3、調査の経過	
4、遺物整理の経過	
5、日誌抄	
第2章 窯跡の調査	18
1、概観	
2、遺構各説	
(1)窯跡	
• 2 号窯跡	
• 3 号窯跡	
• 4 号窯跡	
• 5 号窯跡	
• 5 — Ⅱ 号窯路	<b>*</b>
(2)土坑遺構	
• S X 13	
• S X14	
• S X 15	
• S X 16	
• S X17	
第3章 出土 <b>遺物</b>	30
1、概観	
2、遺物各説	
• 須恵器	
• 瓦	
• 土師器	
3、小結	
須恵器 <b>観察</b> 表	
	65
1、遺跡	
2 、遺物	

#### 巻頭カラー図版

カラー図版 1 出土遺物

カラー図版 2 出土遺物(瓦塔)

カラー図版3 遺構写真(2~5号窯全景)

カラー図版4 遺構写真(2~5-Ⅱ号窯全景・3号窯たちわり後)

カラー図版 5 遺構写真(2号窯全景・4号窯全景)

カラー図版 6 遺構写真(5号窯全景・5-II号窯全景・同たちわり後)

カラー図版7 遺構写真(灰原G・H・I・G~I・A・B区横断セクション、

H・I間縦断セクション)

カラー図版 8 遺構写真 (S X 14 · S X 13、14 · S X 15)

#### 図版目次

図版第1 位置図

図版第2 地形測量図

図版第3 遺構実測図(2号窯·SX16)

図版第4 遺構実測図(3号窯)

図版第5 遺構実測図(4号窯・SX15)

図版第6 遺構実測図(5号窯)

図版第7 遺構実測図(5-Ⅱ号窯)

図版第8 遺構実測図(SX14)

図版第9 遺構実測図(灰原セクション A区横断、AB間縦断、B・F・H区縦断)

図版第10 遺構実測図(灰原セクション B区横断、BC間縦断(DI区縦断))

図版第11 遺構実測図(灰原セクション C区横断、BC間縦断(C区縦断)G区横断)

図版第12 遺構実測図(灰原セクション Ι区横断、ΒC間縦断(Ι区縦断)Η区横断)

図版第13 遺物実測図(3号窯窯体内埋土中)

図版第14 遺物実測図(3号窯前庭部)

図版第15 遺物実測図(3号窯窯体内埋土中)

図版第16 遺物実測図(SX14)

図版第17 遺物実測図(SX14·SX15)

図版第18 遺物実測図(灰原A区)

図版第19 遺物実測図(灰原A-B間縦断セクション)

図版第20 遺物実測図(灰原A-B間縦断セクション)

図版第21 遺物実測図(2号窯・4号窯)

- 図版第22 遺物実測図(灰原B区)
- 図版第23 遺物実測図(灰原B-C間縦断セクション)
- 図版第24 遺物実測図(灰原C区)
- 図版第25 遺物実測図(灰原C区)
- 図版第26 遺物実測図(灰原C区)
- 図版第27 遺物実測図(灰原D区)
- 図版第28 遺物実測図(灰原D区)
- 図版第29 遺物実測図(灰原D区)
- 図版第30 遺物実測図(灰原D区)
- 図版第31 遺物実測図(灰原D区)
- 図版第32 遺物実測図(灰原D区)
- 図版第33 遺物実測図(灰原E区)
- 図版第34 遺物実測図(灰原E区)
- 図版第35 遺物実測図(灰原E区)
- 図版第36 遺物実測図(灰原E区)
- 図版第37 遺物実測図(灰原F区)
- 図版第38 遺物実測図(灰原F区)
- 図版第39 遺物実測図(灰原F区)
- 図版第40 遺物実測図(灰原F区)
- 図版第41 遺物実測図(灰原F・G区)
- 図版第42 遺物実測図(灰原G区)
- 図版第43 遺物実測図(灰原G区)
- 図版第44 遺物実測図(灰原G区)
- 図版第45 遺物実測図(灰原G区)
- 図版第46 遺物実測図(灰原H区)
- 図版第47 遺物実測図(灰原H区)
- 図版第48 遺物実測図(灰原H・I区)
- 図版第49 遺物実測図(灰原 I 区)
- 図版第50 遺物実測図(灰原 I 区)
- 図版第51 遺物実測図(灰原 I 区)
- 図版第52 遺物実測図(灰原G区他)
- 図版第53 遺構写真(2号窯着手後まもなく・同窯体検出状況(東から))
- 図版第54 遺構写真(2号窯たちわり設定後・同近景)
- 図版第55 遺構写真(3号窯全景(北から)・(西から))
- 図版第56 遺構写真(3号窯前庭部ピット(南から)・(南東から))
- 図版第57 遺構写真(3・4・5・5-Ⅱ号窯全景・5-Ⅱ号窯全景(北から))

図版第58 遺構写真(3・4・5号窯の状況・同近景)

図版第59 遺構写真(4号窯全景・5号窯全景)

図版第60 遺構写真 (S X13・5・4号窯たちわり後・5号窯たちわり後)

図版第61 遺構写真(本堂5次2~5-Ⅱ号窯全景・同灰原全景)

図版第62 遺構写真(灰原G区横断セクション・H区・I区縦断セクション)

図版第63 遺構写真(灰原H・I・D・E区・灰原H区横断セクション)

図版第64 遺構写真(灰原 I 区縦断セクション・灰原 I 区横断セクション)

図版第65 遺構写真(SX14全景(南から)・(西から))

図版第66 遺構写真(SX14全景(南東から)・同細部)

図版第67 遺構写真(S X 14遺物除去後)

図版第68 遺構写真(SX15(南から)・(西から))

図版第69 遺構写真(SX15(遺物除去後)・3号窯の煙道部とSX16)

図版第70 遺物写真

図版第71 遺物写真

図版第72 遺物写真

図版第73 遺物写真

図版第74 遺物写真

図版第75 遺物写真

図版第76 遺物写真 図版第77 遺物写真

\_\_\_\_\_\_

図版第78 遺物写真

図版第79 遺物写真

図版第80 遺物写真

図版第81 遺物写真

図版第82 遺物写真

図版第83 遺物写真

図版第84 遺物写真

図版第85 遺物写真

※ 図版70~85の番号は、図版13~52の番号と一致する。 (例) 13-1は図版13-1の遺物写真である。

### 図表目次

- 図1 測量作業風景
- 図2 調査作業風景
- 図3 調査作業風景
- 図4 調査開始当初の作業風景
- 図5 4号窯全景
- 図6 実測作業風景
- 図7 灰原遺物採集作業
- 図8 作業風景
- 図9 S X 15調査段階
- 図10 作業風景
- 図11 調査風景
- 図12 たちわり作業風景
- 図13 灰原調査風景
- 図14 前庭部土坑調査風景
- 図15 窯跡たちわり作業風景
- 図16 作業風景
- 図17 5-Ⅱ号窯全景
- 図18 調査地遠望
- 図19 測量他作業風景
- 図20 調査風景近景
- 図21 調査風景遠望
- 図22 灰原調査風景
- 図23 灰原全景
- 図24 S X 14遺物出土状況
- 図25 清掃調査
- 図26 清掃調査
- 図27 調査完了時全景
- 図28 各遺構と灰原の地区
- 図29 2号窯出土遺物実測図
- 図30 2号窯調査状況
- 図31 2号窯前庭部ピットの全景(西から)
- 図32 2号窯前庭部ピットの全景(北から)
- 図33 3号窯出土遺物実測図
- 図34 4号窯出土遺物実測図

- 図35 4号窯体内セクション設定状況(南東から)
- 図36 4号窯体内セクション設定状況(南から)
- 図37 5、5-Ⅱ号窯出土遺物実測図
- 図38 5号窯体内セクション設定状況
- 図39 5号窯体内セクション設定状況
- 図40 S X 13埋土中出土遺物実測図
- 図41 S X 14出土遺物実測図
- 図42 蓋の類型
- 図43 高台付杯の類型
- 図44 杯の類型
- 図45 高杯、蓋の類型
- 図46 皿の類型
- 図47 短頸壺の類型
- 図48 長頸壺・瓶の類型
- 図49 鉢、椀の類型
- 図50 置台
- 表1 重ね焼き遺物出土遺構一覧

# 第1章 調査経過

#### 1、調査に至る経過

上大利北土地区事業地内における埋蔵文化財の調査は、平成12年度から試掘調査を開始し、平成13年4月より発掘調査を実施しており、平成16年2月現在なお調査を続行中である。本事業に係る「調査にいたる経緯」については『牛頸梅頭遺跡群 I 大野城市文化財調査報告書第60集』に掲載されるため、ここでは本堂遺跡5次調査にいたる経緯について記述する。

本堂遺跡 5 次調査地は、大野城市大字上大利666-1番地他にあたり調査面積は15000㎡である。 当地は北区画整理事業地の南東部にあたり、現況では南東側に向かって下がる3 段の段々畑となっていた。しかし昭和23年の地形図でみると、当地は南東側に向かって下がる丘陵が2 つのびており、丘陵の間は細長い谷が入り込んでいる。このため丘陵項部を削平し、埋められた谷が存在するものと想定し、2 段目の畑に上大利区画整理地内8次試掘調査としてトレンチを配置し掘削を開始したのは平成13年11月16日のことであった。そしてその試堀を開始した日に2 つの谷部と削平されているが3 つの丘陵尾根線、そして窯跡の煙出口を検出し、窯跡の存在が明らかとなった。

遺構の存在が明らかになったことで、当地を全面表土剥ぎすることとなり、北側から着手していった。まず北側は内山緑地に通じる道路際から始め、道路北側に残存する丘陵の続きが検出された。丘陵は南へ向かって下がっており、東側へ開口する小さな谷へと続いていた。斜面からはおびただしい数の遺物が表土剥ぎ時に出土し、ほとんどが須恵器であった。表土剥ぎは北から順次南へ移っていったものの、搬出する土の量が尋常ではなかったためこれに苦慮した。また当地は土取り揚として利用される予定であり、窯跡の調査の完了が相当かかることが想定されたことから8次試掘調査は一旦中断し、上の段に移動してここを10次試掘調査として平成14年1月7日より表土剥ぎを開始した。10次試掘調査は中断を挟みながら北西側より実施したが、他の試掘調査との関係上から重機がフルに稼動できず、断続的に掘り下げを行なったため期間がのびてしまうこととなった。また3段目の段に関しては14次試掘調査として平成14年3月6日に実施し、南東側に谷を検出した。

8・10次試掘調査は結果的に一つの大きな調査区として一緒に掘り下げを行ない、実際に試掘調査が終了したのは平成16年1月6日であり、着手した日から約2年3ヶ月にわたる調査であった。

以上の試掘調査の結果、東側に開口する谷が2つ検出され、北側は小さな谷、南側は大きく細長い谷であった。昭和23年の地図に見える細長い谷は、この南側の谷のことと思われる。北側の谷には灰原1ヶ所、住居や土坑が多数確認され、南側の谷では一番上の段で窯跡4基、2番目の段で窯跡2基・灰原1ヶ所が確認できた。

発掘調査は他の調査の終了を待って平成15年7月10日に器材を搬入し、本格的に調査を開始した。 しかし調査面積が広大であり、また他に急ぐ調査を実施する必要から本市教育委員会では対応できない状況にあったため、大谷女子大学中村浩教授に協力を打診したところ快諾いただいた。大学側の発掘調査は南側の谷で検出された窯跡のうち一番上の段で検出された4基とその下方の灰原を依頼することとなったが、この時点で灰原は表土掘り下げ中であり、同じ灰原ではあるが大学調査分と市教委調査分とに分かれる結果となってしまった。大学側の調査は9月17日まで実施し、その後 10月30日から11月1日に補足調査を実施した。なお市教委の調査は、平成16年2月18日現在で継続 調査中である。

調査の間、中村先生をはじめ大谷女子大学・琉球大学の学生諸氏には多大なる協力を頂いた。また、岡山理科大学鳥居雅之教授には学生諸兄とともに考古地磁気測定のサンプリングを実施して頂いた。心から感謝申し上げたい。最後に調査費用や工事等の関係で極めて多大な協力を頂いている北組合と㈱大成建設の関係者をはじめ、区画整理課、地元上大利区の皆様にも感謝申し上げたい。

#### 2、調査体制

発掘調査ならびに整理作業における調査体制は以下のとおりである。

#### 平成15年度発掘調査

大野城市教育委員会

教育長

堀内貞夫(~15年5月)

古賀宮太(15年6月~)

教育部長

鬼塚春光

社会教育課長

秋吉正一

文化財担当係長

舟山良一

主杳

徳本洋一

主任技師

石木秀啓

丸尾博恵

林 潤也

主事

大道和貴

嘱託

上田 恵(~15年4月)

島田 拓(~15年5月)

平島義孝(~16年2月)

岸見泰宏

西堂将夫

一瀬 智(15年12月~)

大野城市文化財発掘調査作業員のみなさん

大谷女子大学

教授

中村 浩

大谷女子大学 文学部学生

蛯谷文絵、田淵智子、森重香織、大野愛、河野恭子、武田早香、西村俊美、廣瀬佑美、 本田昌代、宮本真理子、杉山嘉奈美、千田佐知子、西谷千恵子、西脇由華、三橋愛子、 西野まなみ、細川由起子、村田智美、山崎祐子、井上みさ、岩浅由華

岡山理科大学

教授

鳥居雅之

琉球大学法文学部学生

主税英徳

#### 平成16年度整理作業

大谷女子大学文学部文化財学科 考古学研究室 教授 中村 浩

助教授 犬木 努

大谷女子大学博物館 学芸員 池田千尋

下村恭子

大谷女子大学文学部学生

山田直子、新井晶子、谷徳子、中川夏奈、石川優貴、氏原由里、森川憲子、片岡磨美、鈴木智子、小橋絵里、坂口智郷、田原さやか、寺下裕子、中村友香、井上みさ、小川愛美、深川拓実、桃原沙恵、岩浅由華、蛯谷文絵、大野愛、尾張友子、久保良子、河野恭子、杉山嘉奈美、田嵜麻美、田淵智子、中筋敦子、中田葉子、西野まなみ、服部恵子、人見美香、細川由起子、牧野幸子、水江公美、山下まどか、横山朋美、米原真希、庄地畠真紀、武田早香、千田佐知子、西村俊美、西脇由華、廣瀬佑美、宮本真理子、村田智美、森重香織、山崎祐子、井上友恵、木下愛子、坂口佳世、阪口優美、瀧井早紀、西村真由美、長谷川裕美、SON JUNGHYUN、向井亜希、武井千世、福田紗矢佳、吉田薫、池端安都沙、中村祥子

非常勤整理補助員

志波敏光、西岡健、平川蔦雄

#### 3、調査の経過

平成15年(2003) 8月18日に調査を開始した。まず現地にて市教育委員会担当者石木技師と中村および参加学生を交えて、調査対象となる各遺構の確認を行なう。現地は、既に表土除去が完了してから相当日時が経過しており、表面上明確に見えていた遺構(窯跡)の焼土の輪郭はかなり薄くなっていた。

表面の簡単な清掃作業の後、輪郭が確認された窯跡について、北側から2・3・4・5号窯とする。このうち3号窯については、煙突部分が見えるが、窯本体は相当下層になる模様である。このため調査方法について協議の結果、他の窯を破壊しないで調査を進めるために、当初の調査はこの窯を除いて実施することにした。しかし今回の調査対象から外すという意味ではなく、最終的には調査期間内で行なうものである。

なお南側地域の窯跡(7・8・9号窯跡)については、当該地域の状況が、かなり近接して窯が 所在していることもあって、欲張って着手せずに、今回の調査予定からは除外することにする。

これらの協議打ち合わせが完了した段階から、本格的に調査作業を開始した。まず調査対象地域の清掃作業に着手し、表土の除去を行なう。まもなく窯に附属する形で、楕円形の土坑が5号窯南側部分で確認された。これらは複数の存在が明らかとなり、東側からSX13、SX14として調査を行なうことにした。

各窯跡周辺については、午後には清掃が完了し、写真撮影を行なう。また並行して平板測量を開始する。写真撮影の後、2・3・5号窯について各々窯体内の横断、縦断セクションの設定を行ない、併せて窯の遺構検出作業を開始する。

2・4号窯については、翌日には窯体内セクション設定を完了した。いずれも写真撮影、実測作

業 (1/20) に着手する。これにより横断セクションは完了したが、縦断セクションのみ作業を翌日に継続する。5号窯については、セクション設定作業を継続する。

灰原部分についての割り付け作業を行なう。 2 号窯から 5 号窯側にA・B・Cと上部側に区画を設定し、その下方の中間に、 5 号側からD・E・F区とした。さらにF区の下方をG区とし、H・I区と続けた。これによって灰原は、A区からI区までの9区画となる。

まず灰原 I 区検出作業を開始する。灰層内部に含まれている遺物がかなり多く、全体では相当な量になる可能性が濃い。

窯に近い部分の灰原上位での灰層堆積状況から、3号窯が最も古く、4号窯が最も新しいと推定される。4号窯と5号窯では同様に焚口前に堆積している灰層の堆積の上下関係から見て4号窯が新しいと判断される。しかし2号窯と4号窯では、両者に距離があり、さらに両者の位置が丘陵部分でも近似していることから、明確に比較検討できる部分が見当たらず、結果的に前後関係を明らかにできない。なお4・5号窯は主軸方向が、ほぼ同じであることを考えると、両者が並行関係にある可能性も考慮されなければならないだろう。

S X13については遺物の包含量が少なく、 逆にS X14については、内部に遺物が充満し ている状態である。これらの遺物について可 能な範囲で残しながら、実測を経て取りあげ る予定である。

20日には、3・4号窯の窯体内縦断セクションなどについて、実測完了後除去し、窯体の検出作業を完了した。なお窯体内セクションは設定したものの、あまりに設定部分の残存部分が少なく、窯の廃棄または放棄の確認はできない状態であった。

5号窯窯体内セクションの設定が完了した ので写真撮影を行ない、実測作業の後セクショ ンを除去する。窯体検出作業を継続して行な う。なお窯体の右下方で、異なる窯らしい痕 跡を確認した。側壁部分の確認のみではある



図1 測量作業風景



図2 調査作業風景



図3 調査作業風景

が、今後調査を進めていく過程で、5 号窯との比較検討を実施する。なお当該窯内部には5 号窯から排出された灰層が堆積しており、この関係から明らかに5 号窯より当該窯のほうが先行することは疑えない。当該窯については5 号窯跡の枝番号として $5-\Pi$  号窯と命名する。

実測図作成用の割り付け作業を開始する。 灰原 I・H区の各遺物検出作業を行なう。全 体の地形を確認するための平板測量は継続し て実施する。

新たにS X 15を 2 号窯北側で確認し、その 遺構検出作業を開始する。さらに 2 号窯と 3 号窯の間でS X 16を確認した。この土坑の内 部には窯壁が充満しており、他の土坑とは性 格的には異なるものである。しかし窯の床面 とは異なり、外周あるいは下層に焼土の痕跡 が見られなかった。すなわち、ここで見た窯 壁片は、周囲に変化を及ぼすような高温では なくなった段階に、当該部分にもたらされた ものと考えられた。これらの状況からは、当 該土坑および内部の焼土などの用途及び遺構 の性格については、明らかにし得なかった。

灰原 I・H区の遺物検出作業を行なっているが、それらの灰層からは尋常な量でない遺物が確認されている。いずれの灰原についても、層別に遺物を採取して検討を行なったが、明確な分層による遺物の分類は困難であり、 黒色灰層ないしは灰層一括で採取することにする。なお灰原の細かな分層検討及び遺物採取については可能な限り試してみることにする。遺物には、相当量の小型蓋杯などを含んでいる模様。ただし大型製品については、全体的に見て少ない状況が観察できる。



図 4 調査関始当初の作業 国書



図 5 4号窯全景



図6 実測作業風景



図7 灰原遺物採集作業

(プラン図)を作成する。地形測量(平板測量)作業を実施する。

S X 13の検出作業を完了した。S X 14・15については遺構検出作業を継続する。いずれも遺物の 量が多く、やや手間取る。熊本大学渋谷秀敏教授、福間浩司講師が来訪し、考古地磁気関係の試料 採取を行なう。

23日には、2・4号窯のレベル実測作業、後に清掃作業を行なう。5号窯実測作業を並行して継 続する。平板作業を継続する。なお平板測量のうち、北部地域の遺構が見られない自然地形部分に

ついては25cmコンタで測量するように指示す る。

灰原 I ・ H区の遺物検出作業を継続する。 なお灰原遺物については、機械によって広い 場所に移動させてから採集する方法をとるこ とを現場で協議する。すなわち人力は丁寧で あるようにも見えるが、遺物を割ってしまう ことが多く、遺物の保全から見ると逆によく ないように見える。しかし反面、細かな分層 を行なう場合には機械では不可能であるとい うことなど、長所と短所を比較し検討する。 なお一部をまず試験的に実施したところ、予 想以上に破損が少ないことが判り、この手法 を灰原検出全体に及ぼすことにする。

25日には、2・4・5号窯のレベル実測お よび、その補強作業を行なう。

S X 14についての遺構検出作業を継続する。 これら遺物の堆積状況から3度分の遺構の重 複状況を確認した。しかし正確には2度の重 複とするべきなのかもしれないが、この点留 保する。

灰原G・H・I区遺物検出作業継続する。 なお上位の灰原D・E区については、可能な 範囲で分層して遺物を採集することにする。 平板測量は降雨のため作業が行なえず、平板 作業グループは灰原の遺物検出作業に合流す る。

灰原 I 区について、26日から重機によって 灰層の除去作業を行なう。なお遺物そのもの の採集は、人力にて採集作業を実施する。こ



図8 作業風景





図10 作業風景

れにより、大幅に遺物採取が効率的になる。 灰原 I 区調査および遺物の採集完了。G・H・ F 区灰原遺物検出作業を継続する。ただしF 区については、第1層の灰層のみの作業とする。

S X 14検出作業が完了、写真撮影、実測図は半分が完了した。S X 15検出作業は継続する。

29日には灰原G・H・I 区横断セクション 写真撮影、実測に伴う割付作業を行なう。灰 原G・H・I 区については、灰層部分の除去 完了した。窯床面上遺物除去後の写真撮影を 実施する。S X14について、レベル実測作業 を行なう。S X15内部に設定した横断セクショ ンについて写真撮影及び実測図作成を行なう。

9月1日には、灰原日・I区横断セクション実測作業を行なう。その作業完了後、セクション内部の遺物検出作業、さらにD・F区 灰原遺物検出作業を行なう。本日の遺物出土量は、従来の作業部分の中でも最も多く、全体で土嚢袋60袋を数えた。

灰原D・E・F区横断セクション設定。灰原D・E・F区遺物採集作業を行なう。SX14・15・16の全体遺構写真撮影後、実測作業を行なう。平板測量は継続する。

3号窯は地下に埋もれている部分が多いことから、上部側からの掘り下げは困難と判断し、焚口及び灰原部分から窯体検出を行なうことにする。

5-Ⅱ号窯の窯体内セクションを設定する。 2号窯について、床面の重複状況など検討の ため、たちわり作業を開始する。SX15の検 出作業が完了し写真撮影、実測作業の準備を 行なう。4日には、2・4・5号窯について もたちわり作業を実施する。たちわり作業完 了部分から写真撮影及び実測作業を行なう。



図11 調査風景



図12 たちわり作業風景



図13 灰原調査風景



図14 前庭部土坑調査風景

5-Ⅱ号窯窯体内セクション実測が完了後に除去し窯本体の検出作業を開始する。

3号窯検出作業を継続する。3号窯はほぼプランにて確認できた。窯体内セクションの設定を行なう。

灰原A・B区検出作業。なおA区については、5号窯の上部に堆積していたこともあり、ほかに 比較してかなり少ない遺物量となっている。

5-Ⅱ号窯の検出が完了し写真撮影、実測、レベル実測まで完了する。たちわりの準備を行なう。

6日には3号窯プラン、レベル実測完了したちわりを開始する。床面が固く遅々として進まず、やや焦りを感じる。 $5- \Pi$ 号窯のたちわり作業を継続する。

灰原A区2号窯前庭部ピット内の灰層除去 を開始。B区灰原遺物採集作業(2号窯に伴 う遺物)。A・B・C区縦断セクション実測 作業。

8日には灰原縦断セクションの実測を完了 し、セクション除去作業を実施し、2・3・ 4・5号窯前庭部ピットの検出作業が完了し た部分については実測を行なう。A・B・C・ E・F区灰原遺物採集作業。各窯たちわり内 部に残存した遺物の採集作業を実施する。

2 · 3 · 4 · 5 · 5 - II 号窯について、考 古地磁気試料採取(岡山理科大学鳥居教授) を行なった。

11日には、B一C間縦断セクション除去が 完了した。A一B間縦断セクション上部を残 すのみとなる。A区遺物採取作業を行なう。 3号窯C区縦断セクション写真撮影および4 号窯、5号窯の下層床面遺構検出、遺物確認 作業を行なう。

翌日には3号窯たちわり実測図の補強(土色の確認作業)、上部床面の検出作業を行なう(たちわりの検討作業)。5-II号窯たちわりの実測図の検討及び補強(土色の確認作業)を完了した。さらに継続して3号窯天井部分のたちわり作業、壁面の焼土の除去作業を行なう。



図15 窯跡たちわり作業風景



図16 作業風景

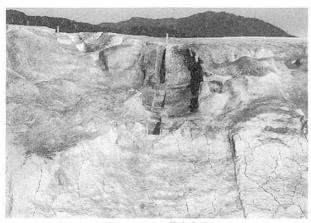


図17 5 - Ⅱ 号窯全景

5号窯に伴う前庭部の実測作業を行なう。

16・17日に3号窯天井部分のたちわり、床面たちわり、2・4号窯前庭部検出作業を行なう。さらに遺物の撤収作業と作業道具機材の撤収、確認作業を行なう。

大学の後期講義が開始されるため、全員引き上げることになり、その準備作業を行なう。なお現地での作業は、そのまま継続とする。また実測など作業が一定程度まとまった段階で再度訪問し、それらの作業を行なうことにする。なおその期日としては10月中を目処にして実施するようにする。

なお当面は石木氏の指示のもと、下方に拡がっているであろう灰原遺物の採集作業及び灰原下層 面で確認されている遺構の検出調査を行なう。ただし、当該調査に関する報告は、本報告には含ま れていない。後日の改めての報告となる。

当初の予定にしたがって10月の下旬に再び現地を訪問し、3号窯前庭部検出作業及び実測作業を行なう。また併せて $2 \cdot 4 \cdot 5 \cdot 5 - \Pi$ 号窯などの関連遺構の確認精査を行なう。

なお今回検出された各土坑については、失われた窯の前庭部の土坑の可能性が濃いのではないだろうかとする意見が出された。すなわち窯1基について1ヶ所ずつのピットを伴っていたと見られるのである。

また現状で土坑が見られたにもかかわらず、窯が確認されなかったのは、既に丘陵上部に位置していた遺構が丘陵の開発のために削り取られた結果と考えるのである。このように理解すれば、S

X14・15・16について、多くの遺物の確認と 窯の位置関係に見る矛盾などの理解が比較的 容易になるだろう。この点も報告書作成段階 までの課題とする。

3号窯に伴う前庭部ピットについての写真 撮影及びレベル実測作業を実施する。遺物な どの撤収作業を実施し、大学までの運搬作業 に備える。遺物はほぼコンテナハウス2棟分 となっている。以上の作業で、今回の現地で の調査はひとまず完了を見た。

#### 4、遺物整理の経過

12月17日に今回調査で出土した遺物が大野城市から搬入された。それらは調査段階では土嚢袋に収納していたが、この段階ではコンテナに収められ、輸送中の遺物の混乱を防ぐためボール紙で、コンテナ上部に蓋を各々おこなうという丁寧さであった。この蓋は水分を吸っており、以後の作業にとっては厄介なものであった。

大谷女子大学博物館では調査参加者及び学

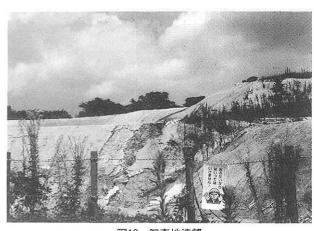


図18 調査地遠望



図19 測量他作業風景

生に呼びかけて、まず水洗作業から開始することにした。作業は既述のようにこれらの各コンテナ に蓋をしていた紙の除去作業からであった。それらのコンテナは、博物館収蔵庫及び事務局の好意 で屋外に臨時に設置したテント内にひとまず保管されることになった。

遺物整理作業は搬入日から開始し、土曜日、日曜日を含めて、大学行事によって登学禁止となる 日のほかは、全て作業日としてあてることにした。さらに作業に参加する学生諸姉には日程の提出 を求め、作業工程を組み立てたが、実際には試験日程との絡みやそれぞれの予定の変更などが相次 ぎ、その作業予定者の確保に関する日程そのものは、有効なものではなかった。

大量遺物の整理作業の能率をはかるために、当初段階は細かな破片遺物については水洗対象から除外し、後にそれらをまとめて水洗することにした。これによって作業のスピードは大幅にアップすることになった。2月中旬には、ほぼ全体量の大半の遺物水洗を完了したが、一部の細片の水洗がやや手間取った。

やがて一定量以上の水洗済み遺物が溜まった段階で、注記作業に入ることにした。この作業は各 遺物に細かな文字で、墨汁あるいはポスター・カラー(白色)を用いて、出土遺構、層、出土年月 日などを記入するものである。この作業は人力に頼るのが通例ではあるが、期間的なことや遺物の 量的なことを考慮すると、期間内にこれらを完了することは相当困難であることが予想された。し たがって今回は、この作業の主体を機械力によって行なうことにした。すなわちバブルジェットに

よって自動的に印字される機械を借用し、それによって注記作業を進めていった。また実 測用とした形の重要な遺物については、手書 きによる注記作業も併用して行なった。

実測作業は、個別の遺物を実寸大で方眼紙に記録していく作業であり、遺物整理作業の中で最も時間を要する部分である。このため可能な範囲で実測作業に従事できる学生を養成しながら進めていった。また注記段階で実測可能な遺物の抽出を行ない、作業全体を同時並行状態で進めるように配慮した。

遺物実測図は、完成とともにコピーによって縮少し、レイアウトを行なっていった。さらにそれらの個別遺物について復元及び接合の作業進行と並行して、遺物観察表の作成を行なった。

これらの作業によって実測図は最終的には 700個体を越えて作成することができた。し かしこれら作成された実測図のすべてを報告 書図版などに掲載することはできなかったが、



図20 調査風景近景



図21 調査風景遠望

いずれも基本となる遺物カードを作成し、CD-ROMに収めていった。この作業にはパソコン操作に習熟している学生が担当した。この結果、実測図を作成した遺物については、いつでもその利用が可能になった。今回は実施できなかったが、いずれ近い将来はこの図面類についても、観察表と同じくパソコン画面での検索が可能なようにしていきたいと考えている。

写真資料については、現地作業では、カラー写真、モノクロ写真など、多くの場面で必要な写真 資料を撮影してきた。それらの中から、いくつかのカットについて焼き付け、引き伸ばしを行なっ

た。しかし全てのカットについての焼き付け は不可能であり、フィルム原版の保存となっ た点は致し方ないと考える。また焼き付けた これら大量の写真の中から報告書に使用した ものは、ごく一部である。

また遺物写真については、接合復元が完了 したものについて撮影していった。この作業 については、写真家阿南辰秀氏、伊藤慎二氏 ほかの手を煩わせることになった。そこで焼 き付けられた写真について、遺物の個別番号 に対比して、遺物に関する写真図版を作成し た。

いずれにしても水洗、注記段階までを経て、 重要遺物の抽出を行なった。とくに当初除外 していた細かな破片遺物についても、水洗注 記作業を大半部分について終えることができ、 当初の作業が追いつかないのではないかとす る危惧は、この段階で解消したのである。

なお注記作業について、細かな破片については教育委員会担当者との協議の結果、一部 省略することになった。このため今回返却の ため送付した遺物には、出土地などを表示し たラベルとともにビニール袋に収納し、コン テナに収めているものも一部には見られる。

いずれにしてもこのように整理作業を終え た遺物の多くは、3月上旬に大野城市に返却 し、さらに報告書作成に伴い観察のため残し ていた残余の遺物についても3月下旬に返却 する予定で作業を進め、無事に予定通り3月 下旬には返却することができた。



図22 灰原調査風景

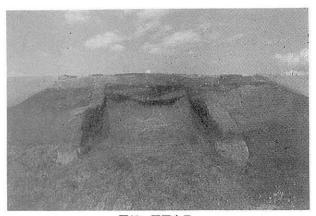


図23 灰原全景

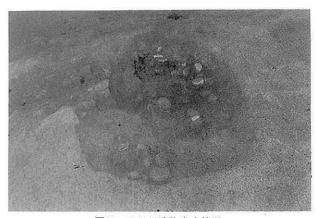


図24 S X 14遺物出土状況

以上、今回の遺物整理作業について記述してきた。

12月下旬から3月上旬というきわめて短期間に作業を完了することができ、報告書原稿を印刷に出すことができたのは、大野城市教育委員会関係者、大谷女子大学博物館及び大学事務局総務課をはじめとする関係者諸氏、さらに整理作業に参加した学生及び多くの関係者の協力があって可能となったものであり、ここに報告書の刊行を喜ぶとともに、改めて各位の努力に対し、感謝するものである。

#### 5、日誌抄

平成15年(2003)

#### 8月18日 曇り時々晴れ

調査開始。現地にて各遺構の確認作業を行なう。窯跡について、北側から2・3・4・5号窯とする。このうち3号窯については、煙突部分が見えるが、窯本体は下層になる模様。このため当初の調査は、この窯を除いて実施することにする。しかし今回の調査対象から外すという意味ではない。なお南側地域の窯跡については、当分の間調査はできないので、今回の予定からは除外する。

調査対象地域の清掃作業に着手する。窯に附属する形で土坑が5号窯の南で確認された。東側からSX13、SX14として調査を行なうことにする。各窯周辺については、午後には清掃が完了し、写真撮影を行なう。また並行して平板測量を開始する。写真撮影の後、2・3・5号窯について各々窯体内セクションの設定を行ない、併せて窯の検出作業を開始する。

#### 19日 快晴

2・4号窯については、窯体内セクションの設定が完了し、いずれも写真撮影、実測作業(1/20)を行なう。なお横断セクションは完了し、縦断セクションのみ作業を翌日に継続する。5号窯については作業を継続する。灰原部分の割り付け作業、灰原 I 区検出作業を開始する。かなり遺物が多く、全体では相当な量になる可能性が濃い。

上位での灰原の堆積状況から、3号窯が最も古く、4号窯が最も新しい。4号窯と5号窯では4号窯が新しく、2号窯と4号窯では前後関係を明らかにできない。また4・5号窯は主軸方向がほぼ同じであることがわかった。

S X 13については遺物の含有が少なく、S X 14については遺物が充満している状態である。これらの遺物について可能な範囲で残して実測を経てとりあげることにする予定。

#### 20日 快晴

3・4号窯については縦断セクションなど実測完了後除去し、窯体の検出作業を完了した。なお 窯体内セクションは余りに残りが少なく、窯の廃棄または放棄の確認はできない状態である。

5号窯窯体内セクション設定が完了したので、写真撮影、実測の後に除去する。窯体検出作業を継続し、右下方で異なる窯らしい痕跡を確認。当該窯については5-Ⅱ号窯と命名する。

実測図作成用の割り付け作業を開始。

灰原 I・H区の各遺物検出作業、平板測量作業を継続した。S X 13・S X 14検出作業。S X 13については内部に遺物の包含が少ないが、S X 14についてはかなりの量を包含している。S X 14内の遺物については、すぐには取りあげず、可能な範囲で実測まで行なう方針を決定する。S X 13検出

作業を継続する。新たにSX15を2号窯北側で確認、検出作業を開始する。

さらに 2 号窯と 3 号窯の間で S X 16 を確認、内部には窯壁が充満しており、他の土坑とは性格的には異なるものである。

21日 快晴

2・4号窯の窯体実測図の作成を開始。

灰原 I・ H区遺物検出作業。いずれの灰原についても明確な分層による遺物の検出作業は困難で

あり、黒色灰層ないしは灰層一括で採取する ことにする。なお分層については可能な限り 試してみたい。

遺物には小型の蓋杯などを相当量を含んでいる模様。ただし大型製品については少ない模様である。

平板測量を継続する。

22日 快晴

2・4号窯実測作業(プラン図) および精 査、検討作業。5号窯実測図作成(プラン図)。 地形測量(平板測量)作業を行なう。

S X 13検出作業が完了した。 S X 14・15の 検出作業を継続する。いずれも遺物の量が多 く、やや手間取る。

熊本大学渋谷秀敏教授、福間浩司講師が来 訪し、考古地磁気年代推定法に伴う試料採取 を行なう。夏原技研夏原信義氏の来訪もあっ た。

#### 23日 快晴

2・4号窯のレベル実測作業、後に清掃作業を行なう。5号窯については、実測作業と平板作業を並行して継続する。なお平板測量のうち、北部地域の遺構が見られない自然地形部分については、25cmコンタで測量する。

灰原 I ・ H区の遺物検出作業。

25日 曇り時々小雨

2・4・5号窯のレベル実測およびその補 強作業。SX14検出作業を継続する。なお、 遺物の堆積状況から3度分の遺構の重複状況 を確認した。



図25 清掃調査

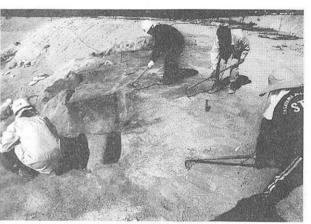


図26 清掃調査



図27 調査完了時全景

灰原G・H・I区遺物検出作業を継続する。なお上位の灰原D区、E区については、可能な範囲で分層して遺物を採集することにする。

平板測量は降雨のため作業が行なえず、灰原の遺物検出作業に合流する。

26日 雨時々曇り

S X14の検出作業を行なう。灰原部分の右端部分、表土が一部残存していた地域については、地面が乾燥しているため、人力では歯が立たない。やむなく重機によって表土除去作業を行なう。

重機によって灰層の除去作業を行なうことについて現地で協議する。この結果をうけて灰原 I 区については機械による掘削を開始する。なお遺物の採集は人力にて採集作業を実施する。

27日 曇り時々雨

平板測量。

灰原 I 区調査および遺物の採集が完了した。G・H・F 区灰原については遺物検出作業を継続する。ただしF区については、第1層の灰層のみの作業とする。

- S X14検出作業が完了し、写真撮影と実測図作成については半分が完了した。
- S X15の検出作業を継続する。

28日 曇り時々雨

灰原G・H・I 区横断セクション清掃作業。窯床面上遺物の採集作業(4・5号窯のみ)。SX 14の実測作業が完了した。SX15の検出作業を継続する。

午後、降雨のため作業を中断し、水洗作業を行なう。

29日 晴れのち曇り

灰原G・H・I 区横断セクション写真撮影、実測に伴う割付作業を行なう。灰原G・H・I 区については、灰層部分の除去が完了した。

各窯床面上の遺物除去後の写真撮影を行なう。

- SX14レベル実測作業。
- S X15横断セクションの写真撮影及び実測図作成。

30日 曇りのち雨

灰原G・H・I区横断セクション実測作業。降雨のため一部は完了せず。

- G区セクションのみ実測作業をほぼ完了する。
- S X14内検討作業および S X16検出作業を行なう。

平板測量作業を継続する。

9月1日 晴れ時々曇り

灰原H・I区横断セクション実測作業。完了後、セクション内部の遺物検出作業を行なう。

D区、F区灰原遺物検出作業。なお出土遺物には、実測図作成可能なものが多く見受けられる。 本日の遺物出土量は従来の作業部分の中で最も多く、全体で土**嚢袋**60袋を数えた。

- S X 14の遺物除去後に清掃作業を行ない、明日の写真撮影の準備を行なう。
- S X 15検出作業。
- S X 16検出作業完了後、実測作業を行なう。

平板測量継続。

2日 曇り

灰原D・E・F区横断セクション設定を行なう。

灰原D・E・F区の灰層内部の遺物採集作業を行なう。

S X14・15・16写真撮影後に実測作業を行ない、平板測量を継続する。

灰原D区横断セクションについてのみ写真撮影が完了し、実測作業開始する。

3日 曇り

灰原D・E・F区横断セクション写真撮影、実測作業、さらに縦断セクションについても同様に写真撮影、実測作業を開始する。

3 号窯は地下に埋もれていることから、上部側からの掘り下げは困難と判断する。灰原部分から 窯体検出を行なうことにする。

5 - II 号窯の窯体内セクションを設定し、実測完了する。窯本体内部に堆積した灰層の除去を行なう。

2号窯たちわり作業。

S X 15検出作業が完了し、写真撮影および実測作業の準備を行なう。

4日 晴れ

2・4・5号窯たちわり作業。たちわり作業完了部分から写真撮影及び実測作業を行なう。

灰原出土遺物採集作業およびB・C区横断セクション実測作業を継続する。

- 5-Ⅱ号窯窯体内セクション除去し、窯本体の検出作業を続行する。
- 3号窯検出作業継続。3号窯はほぼプランにて確認。窯体内セクションの設定。

5日 晴れ

3号窯窯体内セクション写真撮影、実測作業後に除去作業を開始する。窯の検出完了。

灰原A・B区検出作業。なおB区については、5号窯の上部に堆積していたこともあり、ほかの **灰**原に比較してかなり少ない遺物量となっている。

5-II号窯縦断セクション実測、除去して窯の検出が完了したので、写真撮影および実測を行ない、レベル実測まで完了する。たちわりの準備を行なう。

6日 晴れ

3号窯プラン、レベル実測完了。たちわりを開始する。床面が固く、遅々として進まず、難航している。5-II号窯たちわり作業を行なう。

灰原A区2号窯前庭部ピット内の灰層除去を開始。

B区灰原遺物採集作業(2号窯に伴う遺物)。

A・B・C区縦断セクション実測作業。

8日 晴れ

3号窯および5-Ⅱ号窯たちわり作業を継続する。一部については実測作業を開始する。

灰原縦断セクションの実測作業が完了し、除去作業を開始する。

2・3・4・5号窯前庭部ピットの検出作業が完了している部分については実測作業を行なう。

A · B · C · E · F区灰原遺物採集作業。

各窯たちわり内部に残存した遺物の採集を行なう。

- 2 3 4 5 5 Ⅱ号窯について考古地磁気試料採取(岡山理科大学鳥居教授)。
  - 9日 晴れ
- A · B · C · E · F区灰原の遺物採集作業を行なう。
- 5-Ⅱ号窯たちわり部分実測完了する。写真撮影も完了した。
- 3号窯たちわり部分実測作業を行なう。
- 2号窯前庭部分ピット調査を完了した。
- A-B間縦断セクション、黒色灰層は遺物採取が完了した。褐色土層、下層灰層の遺物採取作業は、後少しで完了予定。
  - B-C間縦断セクション黒色灰層部分の遺物採取作業は完了した。

灰原F・E・C区の遺物採集作業は完了した。

10日 雨

雨のため作業は中止となり、市役所で遺物の水洗作業を行なう。

11日 晴れ

- B-C縦断セクションの遺物採取を完了した。A-B間セクション上部の遺物採取作業を残す。 A区遺物採取作業を行なう。
- 3号窯C区縦断セクション写真撮影。
- 4・5号窯の下層床面遺構検出作業と遺物確認作業を行なう。
- 5-Ⅱ号窯について、たちわり下層の検討および前庭部ピットの検出作業を行なう。
- 台風接近のため、調査現場でシートなどが風によって飛ばされないように充分な対策をとる。
  - 12日 曇りのち雨(台風の影響)
- 3号窯たちわり実測図の補強(土色の確認作業)および上部床面の検出作業(たちわりの検討作業)を行なう。
  - 5 Ⅱ号窯たちわりの実測図の検討及び補強(土色の確認作業)。
  - 平板測量作業を継続する。

13日 曇り

平板作業を継続する。

- 3号窯天井部分のたちわり作業および壁面の焼土の除去作業も行なう。
- 5・5 Ⅱ 号窯前庭部の実測作業を行なう。

15日 晴れ

本日は祝日のため現場作業は行なわず、市役所にて遺物整理作業を行なう。

16日 晴れ

地形測量によって窯跡及び灰原の位置の関係を確認する作業を行なう。

- 3号窯天井部分のたちわり作業、床面たちわり作業を行なう。
- 2 号窯前庭部検出作業。

17日 晴れ

- 3号窯天井部分のたちわり部分実測作業。
- 2 · 4 号窯前庭部実測作業。窯跡本体及び関連遺構については、ほぼ調査を終えることになった。 また後日、再度調査を予定している。

遺物の撤収作業。作業道具機材の点検及び撤収を行なう。

大学の後期講義が開始されるため、学生は翌日に全員引き上げる。なお現地での作業は、そのまま教育委員会によって継続され、大学側では、一応遺構実測図などの検討を行なった後、それらがまとまった段階で、再度訪問して、残余の作業を行なうことにする。

なお当面は、灰原遺物の採集作業及び灰原下層面で確認されている遺構の検出調査となる。(当 該調査報告は、本報告には含まれていない。後日の報告となる。)

#### 本堂 5 次の再調査の日誌

#### 10月30日 曇り

3 号窯前庭部検出作業及び実測作業。2 • 4 • 5 • 5 − II 号窯などの関連遺構の確認精査を行なう。

#### 10日31日 晴れ

昨日に引き続き、3号窯前庭部検出作業及び実測作業。なお各土坑については、失われた窯の前庭部ピットの可能性が濃いのではないだろうか。すなわち窯1基について1ヶ所ずつの土坑を伴っていたと見られる。現状で窯が確認されなかったのは、既に上部に位置していた丘陵の開発のために、窯本体は削り取られた結果と考える。このように理解すれば、SX14・15・16についての理解が容易になるだろう。

#### 11月1日 晴れ

3 号窯前庭部上坑写真撮影及びレベル実測作業を行ない、遺物の撤収作業を行なう。

# 第2章 窯跡の調査

#### 1、概観

今回の調査で検出された遺構は、窯跡すなわち窯本体と灰原などの一括遺構、窯の操業に伴う関 連遺構と見られる土坑遺構である。窯跡については2号、3号、4号、5号、5−Ⅱ号窯の5基で ある。これらそれぞれの窯には、灰原などの関連遺構が附属しているが、今回の場合は、いずれも が重複した形で検出されており、一括して灰原を調査している。したがって窯ごとの灰原について は、設定した区画によって区別するほかはない。

ちなみに2号窯ではA・B・E・F・G・ H区がその灰原散布範囲となり、3・4号窯 の場合は、B・C・D・E・F・G・H・I 区が散布範囲である。また5号窯及び5-Ⅱ 窯については、C、D、E、H、I区がその 散布範囲と考えられる。通常、灰原は焚口か ら下方に斜面に沿って扇形に拡がるものであ り、その通常の例に従えば、既述の散布範囲 に大過ないと考えられる。

5 m

土坑遺構については、内部に遺物を大量に

図28 各遺構と灰原の地区

包含したものとそうでないものとがある。しかし両者を地表上で区分するのは困難であり、検出段 階以後の判断によって差異が明らかとなる。今回確認し、調査を行なった土坑は、S X13・14・15・ 16・17の5遺構である。これらのうち、いくつかについては既に前章でも触れたように、窯跡に伴 う前庭部土坑の可能性が濃いとも考えられ、その推定が正しいとすれば、少なくとも窯跡の所在数 が確認されている5基よりは増加する可能性がある。その量は2ないしは3基程度と考えている。 またSX16の如く、遺構検出段階で痕跡程度という状態のものも含まれている。

以下、今回の調査で検出された遺構について記述していきたい。

#### 2、遺構各説

#### (1)窯 跡

#### · 2 号窯跡

#### 位置と検出状況

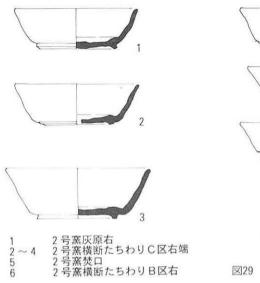
丘陵中腹部、今回調査対象地域の北西部端に位置する窯である。調査段階で、既に表土部分は失 われており、検出部分も焼成部下方から焚口部分にかけての部位であった。

検出部分の最高標高は、53m前後をはかり、焚口部分の標高は52.25m前後をはかる。窯の主軸 方向はN-47°-E、主軸上の残存長は1.8m、内床面延長は1.6m、最大幅1.1m、床面傾斜角6度 を各々はかる。

窯体内に設定したセクションでの観察では、図版に示したように全体で床面からわずかに20cm前 後の堆積しか残存していなかった。なお確認された層は、2層で床面には上位からの流入と見られ る堆積層が見られた。しかし全体に残存度が不良であったこともあり、良好に検討できる状況ではなかったが、床面直上に天井が崩落したと見られる痕跡は確認されなかった。したがって、当該窯が操業中の崩落による理由から放棄されたものではないと見てよいだろう。

# 窯の構造

# A、焚口・前庭部



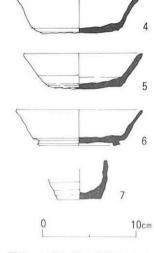


図29 2号窯出土遺物実測図

焚口の幅は1 m前後をはかり、焼土の痕跡から見ると、左側の先端部分が攪乱のため確認できなかったが、右側については床幅を大きくは拡げない状況を呈する。なお床面の温度上昇はあまり高くはなく、還元焼固した範囲は少ない。

焚口前方に見られる灰原は、丘陵斜面に沿って拡がっており、焚口に連続する前庭部の平坦面は 小さく、左右3.5m、上軸上の延長2.8mをはかる。また前庭部を大きく掘り込んで造られた前庭部

ピットは左右幅2.9m、主軸上の延長1.8m、 深さ0.7mを各々はかる。

#### B、燃焼部

燃焼部は焚口から傾斜変換点までをさすが、 当該窯では変換点までは残存しておらず、現 状で床面残存長1.7m、床面傾斜角12度をは かるに過ぎない。当該部位に設定したたちわ りB-B'によると床面下層には5層の確認 があり、内3層は堆積層である。またその内 上位2層は床として使用されたもので、いわ ゆる貼床と分類される。また当該部分には主 軸を中心にして、左右60cm、主軸上の延長75 cm、深さ15cm前後をはかる横に長い楕円形を なす舟底状ピットが設定されている。ピット は、床面を含んで下層の赤色酸化層をも切る 形で設定されている。なおピット内は炭灰層 が充満しており上層面には貼床は認められな い。また縦断たちわりの観察では当該ピット 内の灰層の堆積状況は上下2層に区分され、 最終操業に伴う床面に連なる灰層の厚さは10

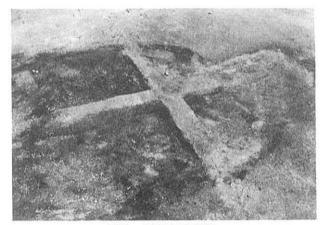


図30 2号窯調査状況



図31 2号窯前庭部ピットの全景(西から)

## ~15cmをはかる。

また当該部分の上位に設定したたちわりA-A'では、床面下層には4層確認されており、内上位2層が床面で、いわゆる貼床である。 当該床は、陶邑域などでみられる砂を敷いたものではなく、明らかに壁と同様に貼ったものであり、特筆に価する。これは牛頸窯の特徴と見てよいだろう。側壁は、左側で僅かに2枚の貼壁を確認することができるが、右側では攪乱のため失われている。



図32 2号窯前庭部ピットの全景(北から)

# C、焼成部

床面は傾斜変換点までも残存しておらず、焼成部については全く明らかにし得ない。

## D、奥壁・煙道部

全く残存しない。

# 灰原

焚口の前方に拡がる。A・B・E・F・G・H区灰原が当該窯に伴う灰原の散布範囲である。

# 関連遺構

窯の焚口右側約1 mに遺物や側壁などが充満した $1.8 \times 0.5 \text{ m}$ をはかる楕円形のピットが確認されている。

さらに前庭部土坑の右端部分に接して、1.2×0.8mをはかる円形をなす上坑が確認されている。 いずれも窯の操業とは直接には関連しないものと見られるが、なお検討を要する遺構である。

#### 出土遺物

大半は前庭部の灰原部分からの採集である。蓋杯を中心とする小型製品が多く見られるが、窯の 残存状態から見ると中型製品の生産も可能である。床面下層から遺物も若干ではあるが採集されて いる。

# · 3 号窯跡

#### 位置と検出状況

丘陵中腹部、今回調査対象地域の北西部、2号窯の南1mに位置する窯である。調査段階では、煙突の途中部分が確認されていたに過ぎず、本体部分は地下に埋もれていた典型的な地下式窯であった。

検出部分の最高標高は、52.8m前後をはかり、焚口部分の標高は51.2m前後をはかる。窯の主軸 方向はN-47°-E、主軸上の全長は4.22m、内床面延長は3.5m、最大幅1.0m、床面傾斜角26度を 各々はかる。

調査当初の段階で窯体内に設定した横断セクションでの観察では、天井部が良好に残されていることが確認され、また天井中央部に一部崩落が見られるものの、床面には遺物の取り損ねた状況は見られなかった。したがって当該窯が、操業中における天井などの崩落により、放棄されたもので

はなく、使用されなくなっ た段階で廃棄されたものと 考えられる。

#### 窯の構造

# A、焚口・前庭部

焚口の幅は1m前後をは かり両側面に焼土を確認し た。焼土の痕跡から見ると、 左側の先端部分が攪乱のた め確認できなかったが、右 側については床幅を大きく

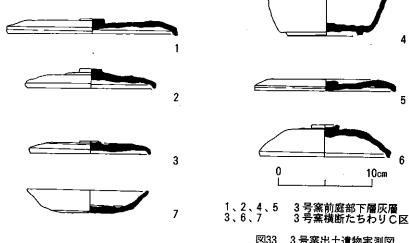


図33 3号窯出土遺物実測図

は拡げない状況を呈している。なお床面の温度上昇はあまり高くはなく、還元焼固した範囲は少な い。

焚口前方に見られる灰原は、丘陵斜面に沿って拡がっており、焚口に連続する前庭部の平坦面は 小さく、左右3.5m、主軸上の延長2.8mをはかる。また前庭部を掘り込んで造られた前庭部土坑は、 左右2.9m、延長1.8m、深さ0.7mを各々はかる。

# B、燃焼部

燃焼部は、焚口から傾斜変換点までをさすが、当該窯では変換点までは残存しておらず、現状で 床面残存長1.7m、床面傾斜角10度をはかるに過ぎない。当該部位に設定したたちわりB—B'によ ると床面下層には5層の確認ができ、内3層は堆積層である。またその内上位2層は床として使用 されたもので、いわゆる貼床と分類される。また当該部分には主軸を中心にして、左右60㎝、延長 75㎝、深さ15㎝前後をはかる横に長い楕円形をなす舟底状ピットが設定されている。ピットは、床 面を含んで下層の赤色酸化層をも切る形で設定されている。なおピット内は炭灰層で充満しており 上層面には貼床は認められない。また縦断たちわりの観察では当該ピット内の灰層の堆積状況は上 下2層に区分され、最終操業に伴う床面に連なる灰層の厚さは10~15㎝をはかる。

また当該部分の上位に設定したたちわりA-A'では、床面下層には4層確認されており、内上 位2層が床面で、いわゆる貼床である。当該床は、大阪陶邑窯などで通常見られる砂を敷いたもの ではなく、明らかに壁と同様に貼ったものであり、牛頸窯での特徴とみることができる。側壁は、 左側で僅かに2枚の貼壁を確認することができるが、右側では攪乱のため失われている。

#### C、焼成部

床面は傾斜変換点までも残存しておらず、焼成部については全く明らかにし得ない。

# D、奥壁・煙道部

全く残存しない。

#### 灰原

焚口の前方に拡がる。B・C・D・E・F・G・H・I区灰原が当該窯に伴う灰原の散布範囲で ある。

# 関連遺構

窯の焚口右側約1mに遺物や側壁などが充満した1.8×0.5mをはかる楕円形のピットが確認されている。

さらに前庭部ピットの右端部分に接して、1.2×0.8mをはかる不整形なピットが確認されている。 いずれも窯の操業とは直接には関連しないものと見られるが、なお検討を要する遺構である。

## 遺物

出土遺物はいずれも須恵器で、蓋杯などの小型製品が中心である。なお灰原部分から比較的大型 製品も見られるが、今回調査した窯の中では、当該窯は規模的に大きく、それらの焼成を行なった 可能性が濃いと考えられる。

# · 4 号窯跡

#### 位置と検出状況

丘陵中腹部、今回調査対象地域の北西部、3号窯の南東1m、さらに南に5号窯、北西3mに2号窯が位置する。調査段階では、床面の大半が露呈しているという状況で、残存度は今回調査対象の窯跡の中では最も不良であろうと予想されたものである。

検出部分の最高標高は52.8m前後をはかり、焚口部分の標高は52.5m前後をはかる。窯の主軸方向はN-45°-E、主軸上の残存長は1.5m、内床面延長は1.1m、最大幅0.7m、床面傾斜角13度を各々はかる。

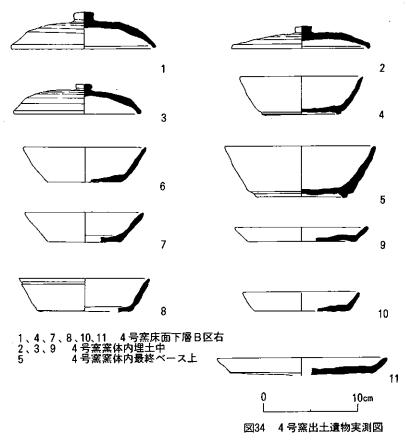
調査当初の段階で窯体内に設定した横断セクションでの観察では、床面と表面との厚さが20cmと 少なく、観察資料としては充分なものではない。当該セクションでの層は3層を数えるが、床面直

上には天井の崩落痕跡は認められなかった。また床面に開るな床面に対した状況は見られなかった。したがってこれのかったののの観察中におけるでは、対策により、放棄されなり、使用されたく、使用されたくのではないを発されたものと考えられる。

# 窯の構造

# A、焚口・前庭部

焚口の床幅は65cmをはかり、 焼土の痕跡から見ると、左側 の先端部分が大きく外側に曲 がっている。またその曲がっ た焼土痕跡は延長30cmをはか



る。なおこの部分の壁面が熱によって焼固していることから、この部分にまで焚口前での燃料燃焼の影響が及んでいたことがわかる。この状況は先の3号窯の場合と同じである。一方、右側にはその痕跡が認められず、この窯の操業に伴う火入れ作業が左側に偏って行なわれていたことがわかる。また床面の先端は、天井部のない部分から先端1mに及んでおり、この状況からも薪を燃焼させた部分が焚口部分から相当前方で行なわれていたことが想像される。

灰原は焚口前方に見られ、丘陵斜面に沿って拡がっており、焚口に連続する前庭部の平 坦面は現状では左右の幅4.5 m に対し、延長 は僅かに0.7 m 前後をはかるのみである。

前庭部ピットは確認されていない。

# B、燃焼部

燃焼部は、焚口からの残存延長1.2m、床面最大幅0.7m、床面傾斜角11度をはかる。 当該部位に設定したたちわりの観察では床面

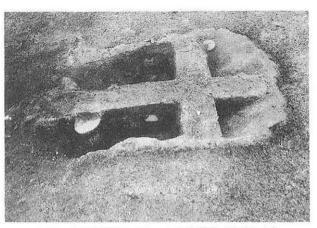


図35 4号窯体内セクション設定状況(南東から)



図36 4号窯体内セクション設定状況(南から)

下層には3層の確認があり、内1層が床として使用されたもので、所謂貼床と分類されるものである。

焚口付近の床面には修復方向に50cm、幅40cmをはかるくぼみが見られたが、いわゆる舟底状ピットと呼ばれるものではなく、後世の攪乱の可能性が濃いと見られる。なお縦断たちわりセクションでは、その状況は観察できない。

焚口部分には若干量の遺物が散布しており、位置状況から当該窯の製品と見られる。

側壁は、左右ともに2枚の貼壁を確認することができる。壁は床面の補修が終了した後に行なわれており、そのことは横断たちわり面で観察できる層の上下関係から明らかになる。

側壁の左右のたちあがり高は、左右とも15cm前後で残存度は良好ではない。

# C、焼成部

既に削平されており、全く残存していない。

# D、奥壁・煙道部

既に削平されており、全く残存していない。

# 灰原

焚口の前方に拡がるB・C・D・E・F・G・H・I区灰原が当該窯に伴う灰原の散布範囲である。とくにB区では上層部分の灰層が当該窯に伴うものである。

# 関連遺構

とくに関連遺構は確認されていない。

#### 出土遺物

蓋杯など小型製品が採集されている。

# · 5 号窯跡

# 位置と検出状況

丘陵中腹部、今回調査対象地域の南東部端に位置する窯である。調査段階で、既に表土部分は失われており、検出部分も焼成部下方から焚口部分にかけての部位であった。

検出部分の最高標高は52.8m前後をはかり、焚口部分の標高は52.6m前後をはかる。窯の主軸方向はN-40°-E、主軸上の残存長は2.5m、内床面延長は1.8m、最大幅1.1m、床面傾斜角22度を各々はかる。

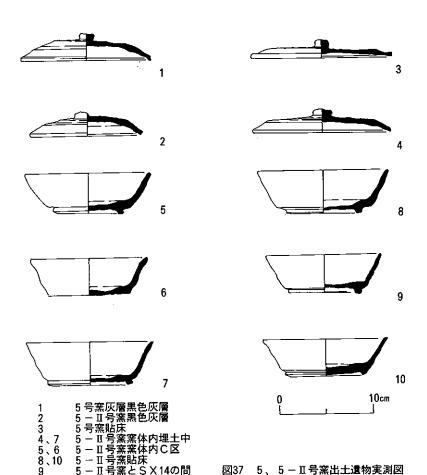
窯体内に設定したセクションでの観察では、図版に示したように全体で床面からわずかに30cm前後の堆積しか残存していなかった。なお確認された層は4層で、床面には上位からの流入と見られる堆積層が見られた。しかし全体に残存度が不良であったこともあり、良好に検討できる状況ではなかったが、床面直上に天井が崩落したと見られる痕跡は確認されなかった。したがって当該窯が、操業中における崩落などの理由から放棄されたものではないと見てよいだろう。

# 窯の構造

# A、焚口・前庭部

焚口の幅は1.2m前後をはかり、焚口は両側に開いているが、焼土の痕跡から見ると右側の先端部分が大きく先端方向に伸びている。焚口先端の右側部分の成形によいるが確保されているが確保されているが強性がまって、近、められる。従部が語っている。とを物語っていないと考えられる。

焚口前方に見られる灰原は、 丘陵斜面に沿って拡がってお り、焚口に連続する前庭部の 平坦面は小さく、左右2.7m、



主軸上の延長2mをはかる。また前庭部を掘り込んで造られた前庭部上坑は、左右2.4m、延長1.7m、深さ0.5mを各々はかる。

# B、燃焼部

燃焼部は、焚口から傾斜変換点までの床面 長1.0m、床幅0.9m、床面傾斜角13度をはか る。当該部位に設定した横断たちわりB一B' によると床面下層には4層の確認があり、内 2層は堆積層である。またその内上位2層は 床として使用されたものである。なお角底状 ピットの設定は見られない。

側壁は、左右ともに1枚の貼壁を数えるに 過ぎない。

## C、焼成部

傾斜変換点から上位への床面残存長は1m、最大床幅1.1m床面傾斜角度は22度をはかる。 当該部分に設定したたちわり A — A'による と、床面下層に4層を数え、内2層が床面と して使用された面である。左右の側壁部分に ついては立ち上がり部分が殆ど確認されない ほど上部が削平されており、確認できない。

#### D、奥壁・煙道部

すでに削平されており、全く残存しない。

# 灰原

焚口の前方に拡がる。C・D・E・H・I区灰原が当該窯に伴う灰原の散布範囲である。とくに C区の遺物は、当該窯及び4号窯に伴うものと見てよいだろう。

#### 関連遺構

窯の焚口右側に接する状況でS X 13、さらにその東北側にS X 14が確認されている。それらの詳細については後述する。

# 出土遺物

大半は前方部の灰原からの採集である。蓋杯を中心とする小型製品が多く見られる。

# · 5 - Ⅱ 号窯跡

#### 位置と検出状況

丘陵中腹部、5号窯の調査段階で新たに確認されたものである。すなわち5号窯の焚口から下方約1mから赤色酸化層の連続と還元層が確認され、当初は炉跡の可能性も考慮しながら遺構検出作業を行なった。やがてそれらが側壁部分の一部であり、5号窯の構築によって、当該窯の一部が攪



図38 5号窯体内セクション設定状況



図39 5号窯体内セクション設定状況

乱されたということが明らかとなった。従って検出された窯の一部は大きく攪乱を被っており、内部には上位の5号窯の灰層が堆積していた。

検出部分の最高標高は、52.4m前後をはかり、焚口部分の標高は52m前後をはかる。窯の主軸方向はN-77°-E、主軸上の残存長は2.6m、内床面延長は2.5m、最大幅1.1m、床面傾斜角22度を各々はかる。

窯体内に設定した縦断窯体内セクションでの観察では、図版に示したように、全体に床面上に30~40㎝前後の黒色灰層の堆積が確認された。なおこの他の層は下位には1層のみで、床面には天井や側壁部の崩落と見られる堆積層が見られなかった。

したがって当該窯が、操業中における崩落などの理由から放棄されたものではないと見てよいだろう。

#### 窯の構造

# A、焚口・前庭部

焚口の幅は1 m前後をはかり、焼土の痕跡から見ると左側の先端部分が約40cm長い。なお床面の 温度上昇はあまり高くはなく、還元焼固した範囲は少ない。

焚口前方に見られる灰原は、丘陵斜面に沿って拡がっており、焚口に連続する前庭部の平坦面は少ない。また前庭部を掘り込んで造られた、前庭部土坑は、左右2m、延長2.8m、深さ0.73mを各々はかる。

#### B、燃焼部

燃焼部は、焚口から傾斜変換点まで床面長1.7m、床面傾斜角16度をはかるに過ぎない。当該部位に設定したたちわりB-B'によると床面下層には6層の確認があり、内4層は堆積層である。またその内上位3層は床面として使用されたものであるが、とくに貼床と分類されるものではなく、灰層が堆積していたものである。

# C、焼成部

床面は傾斜変換点から上位への残存長は1.5m、最大幅0.9m傾斜角度は22度をはかる。とくに右側床面中位から上位の5号窯によって攪乱されており残存しない。当該部位に設定したたちわりA—A'によると床面下層には4層認められ、内床面は2枚を数える。床面は青灰色に還元焼固しており、3cm前後の厚さをはかる。側壁は右側のみであるが、3枚の貼壁を認める。いずれも青色に還元焼固しており良好に温度上昇が見られたことを示している。

なお縦断たちわりの状況も横断面に良好に対応している。

# D、奥壁・煙道部

全く残存しない。

#### 灰原

焚口の前方に拡がる。D・E・G・H・I 区灰原が当該窯に伴う散布範囲と考えられる。

#### 関連遺構

とくに確認されていない。

## 出土遺物

大半は前方部の灰原部分からの採集である。蓋杯を中心とする小型製品が多く見られる。

# (2) 土坑遺構

#### · S X 13

#### 位置と検出状況

丘陵中腹部が今回調査対象となった窯跡が位置する地域であるが、同じ丘陵域の南東部端、5号窯の南東約1mにほぼ接するかたちで位置する土坑である。表面の清掃によって不整形な楕円形の平面プランを確認した。併せて西側に同じような形態のSX14遺構が確認されている。

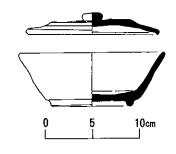


図40 S X 13埋土中出土遺物実測図

# 遺構の状況

南北の長軸 $0.45\,\mathrm{m}$ 、東西の短軸 $0.44\,\mathrm{m}$ 、深さ $0.3\,\mathrm{m}$ を各々はかる素掘りの土坑である。内部には周囲から流入したと見られる土砂が充満しており、とくに遺物の包含が目立つようなものではなく、きわめて少量の遺物が検出されたに過ぎない。ほかのSX14やSX15が内部に大量の遺物を包含していたことを合わせて考えると、当該土坑は $5-\mathrm{II}$ 号窯が使用される以前に放棄された可能性があろう。また須恵器の粘土採掘に伴う採掘坑とするには、肝心の粘土層が見当たらないので、その推定は成立しない。

# 出土遺物

ごく少量の須恵器の蓋杯の細かな破片が出土しているが、いずれの窯の製品かは判断できない。

#### · S X 14

#### 位置と検出状況

丘陵中腹部が今回調査対象となった窯跡が位置する地域であるが、同じ丘陵域の南東部端、5-II号窯の右側側壁上南東に、ほぼ接するかたちで位置する土坑である。調査段階までに上層土砂の多くが失われており、先のSX13同様表面清掃によって不整形な楕円形の平面プランを確認した。

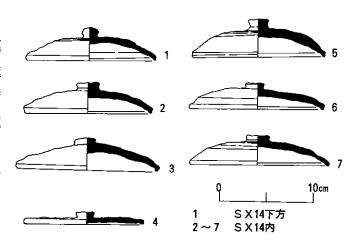


図41 SX14出土遺物実測図

# 遺構の状況

南北の長軸2.2m、東西の短軸1.6m、深さ0.43mを各々はかる素掘りの土坑である。内部に設定したセクションでの観察では、まず10 Y R6/2暗黄褐色砂質土からなる20~25cmをはかる堆積層であり、それを切る形で遺物を多く含む2.5 YR3/2黒褐色灰層の堆積がみられる。また先の10 Y R6/2暗黄褐色砂質土層も堆積層であり、第一次的には当該土坑が形成され、後に規模を縮小する形に改造されたと見ることができる。従って、前者を14- I、後者を14- II として記述を進める。

14-Iは、長軸(南北) 2.2m、幅1.8m、深さ0.31cmを各々はかり、西南側の側壁部分は明確な 状態ではなく、上位では少々だらだらした印象を与える状況であった。遺物は、東側基底部付近に 蓋杯などの比較的形の整った須恵器が検出されている。しかしそれらが意識的に配置されていたというような規則性は見られないことから、意識的な配置という可能性はきわめて少なく、単に投げ入れたあるいは投げ込まれた結果、堆積しているというような印象であった。

SX14-IIは、SX14-IIの西側部分に切り込んで作られたもので、長軸方向はSX14-IIとは逆に東西方向にやや振っている。ちなみにその延長は $1.5\,\mathrm{m}$ 、幅 $1.2\,\mathrm{m}$ 、深さ $0.37\,\mathrm{m}$ を各々はかる。形状は楕円形というよりも、南に長辺をもつ南北二辺が平行な平行四辺形に近い。内部には須恵器が多数包含されており、器種は蓋杯、皿、瓶子のような小型製品に限定されている。破片も多く見られたが、完全な形状の製品も比較的多く検出されている。

S X13の如く、使用されなかった段階に放棄されたのではなく、確実に使用されているが、その 用途については明らかにできる材料に乏しい。

#### 出土遺物

2 つの土坑からそれぞれ須恵器が大量に出土しているが、量的には圧倒的にS X 14 − II 出土遺物 の方が多い。なお両者の遺物については時期的な差は殆ど判断できない。

#### · S X 15

#### 位置と検出状況

2号窯の北2mに位置する楕円形に近い不整形な素掘土坑である。S X 14と同様、内部の遺物堆積状況は、2つに区分することができる。すなわち東側部分が層序的には高く、西側部分が低い。堆積状況のみからの判断では、東側部分が新しく、西側部分が古いということになる。図版では、最下層の遺物検出状況の実測図と、それらを取りあげた後の土坑の状態を示している。また調査の初期段階で設定したセクションの図を添付しているが、この状況から推測すると、土坑内部の二次堆積は、大きく時間を隔てない状況で行なわれたことがわかる。すなわち長時間の経過に伴う二次堆積土の状況は少なくとも当該セクションからは、読み取れないのである。

## 出土遺物

2 つの土坑からそれぞれ須恵器が出土しているが、量的には圧倒的に西側の土坑の方が多い。な お両者についての時期的な差は殆ど判断できない。

#### • S X 16

#### 位置と検出状況

2号窯の焚口の南東に接するように検出された土坑である。内部には窯壁片が充満しており、遺物の包含は極めて少ない。上層から少量の須恵器が採集されたが、当該遺構に伴うものかどうかの判断は困難である。

## 遺構の状況

南北の長軸0.43m、東西の短軸0.43m、深さ0.43mを各々はかる素掘りの土坑である。上部を削平されており、上部の状態などは不明である。

#### · S X 17

#### 位置と検出状況

今回調査対象となった窯の分布する丘陵中腹部から僅かに南側の丘陵斜面に遺物散布部分が確認

され、S X17と命名して調査を開始したが、まもなくその痕跡が見えなくなり、遺構の確認はできなかった。しかし当初は輪郭や遺物の散布が見られたことから、全く遺構が存在しなかったのではなく、既に削平されていた可能性も十分考えられる。

# 第3章 出土遺物

# 1、概観

本堂 5 次の調査のうち、今回出土した遺物は殆どが須恵器であり、ごく少量の瓦および土師器が含まれている。これらの大半は窯跡および灰原からの出土遺物であり、一部には土坑からの出土遺物が見られる。出土した遺物の総量は、時間的な制約などのため灰原の最終的な拡がりを確認していないことから確定した数値ではないが、パンケース約400箱にのぼる。なお引き続き丘陵裾部基底面までの調査が実施されたことから、次回の報告には、それらを加えた数値を明らかにすることができるだろう。

# 2、遺物各説

# ・須恵器

今回の調査で出土した須恵器は、既述のごとく大量であるが、器種としては蓋杯、杯、皿、高杯、壺 (短頸壺・長頸壺・水瓶)、鉢、甕と一見豊富なように見える。しかし蓋杯、杯を除くと、各器種ともに出土数量が少なく、小型製品が大半を占めている特異性が指摘される。また蓋杯では、窯が5基以上存在したということを反映して時期的な変化を確認しうるだけの形態差の見られる遺物が確認されている。以下、各器種別に形態及び手法のその特徴を記述しておきたい。

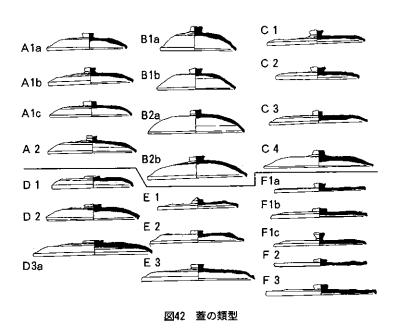
# 蓋杯

通常は蓋と杯がセットとして出土することが多い器種であるが、窯からの出土例では必ずしもセット関係をなす状態で検出される例が全てではない。すなわち窯体内での操業段階での配置つまり窯詰め状態によって出土することが多く、とくに重ね焼き状態での検出例でのみセット関係が確認されるに過ぎない。今回の場合もその例外ではなく、重ね焼き状態での例を除くと口径や形態の特徴によるセット関係の復元に頼るほかはない。ともあれ本稿では、杯の形態分類を蓋と同様に実施したものである。記述の例は、アルファベットのA・B・Cは同一器種における形態上の類似、例え

ば蓋では天井部、杯では口縁部などから見た大別を示し、次の数字 1・2・3は大別された同じ器種内の細別、すなわち口径などの大小による区分を示す。さらにa・b・cについては、蓋ではつまみ、杯では高台部分の形態差及び手法上の差による区分を示している。

#### 蓋

蓋A1a一口径12.5~13.5cm、器 高3.8cm、つまみ径2.1cm前後をは かり、天井は比較的高くわずかに 丸みをもち、端部に向かってなだ



-30 -

らかに下がる。天井端部ではほぼ垂直に曲げられているが、外面は丸みをわずかに認める。天井部 中央外面に比較的高く中央がわずかに窪んだつまみを貼付する。

蓋A1b-口径13.5cm、器高2.5cm、つまみ径2cm前後をはかり、天井は比較的高くわずかに丸みをもち、端部に向かってなだらかに下がる。天井端部ではほぼ垂直に曲げられているが、外面は丸みをわずかに認める。天井部中央外面に比較的高く中央が高いつまみを貼付する。

蓋A1 c 一口径13cm、器高2.4cm、つまみ径2.2cm前後をはかり、天井は比較的高くわずかに丸みをもち、端部に向かってなだらかに下がる。天井端部では下方に曲げられているが、外面は丸みを認める。天井部中央外面に比較的高く中央がわずかに窪んだ丸みをもつつまみを貼付する。

蓋A2一口径14cm、器高2.8cm、つまみ径1.7cm前後をはかり、天井は比較的高くわずかに丸みをもち、端部に向かってなだらかに下がる。天井端部ではほぼ垂直に曲げられているが、外面は丸みをわずかに認める。天井部中央外面に比較的高く中央がわずかに窪んだつまみを貼付する。内面にナデ調整を行なう。

蓋B1 a 一口径12.1cm、器高3.8cm、つまみ径1.9cm前後をはかり、天井は高く丸みをもち、端部に向かって丸みをもって下がる。天井端部では内側に曲げられている。外面は丸みをわずかに認める。 天井部中央外面に比較的高く中央が窪んだつまみを貼付する。

蓋B1b一口径12.1cm、器高3.6cm、つまみ径2.1cm前後をはかり、天井は高く丸みをもち、端部に向かって丸みをもって下がる。天井端部では内側に曲げられている。外面は丸みをわずかに認める。 天井部中央外面に比較的高く中央が高いつまみを貼付する。

蓋B2a一口径15.5cm、器高3.8cm、つまみ径1.8cm前後をはかり、天井は高く丸みをもち、端部に向かって丸みをもって下がる。天井端部ではほぼ垂直に曲げられているが、外面は丸みをわずかに認める。天井部中央外面に比較的高く中央が窪んだつまみを貼付する。天井部外面にヘラ削り、内面にナデ調整を認める。

蓋B2b-口径15.8㎝、器高3.5㎝、つまみ径2.5㎝前後をはかり、天井は高く丸みをもち、端部に向かって丸みをもって下がる。天井端部ではほぼ垂直に曲げられているが、外面は丸みを認める。 天井部中央外面に比較的高く中央が高いつまみを貼付する。

蓋C1一口径15.5cm、器高3cm、つまみ径2.2cmをはかる。天井は低く平らに近く、天井部端部近くで屈曲点をもっている。天井端部ではほぼ垂直に曲げられているが、外面は丸みを認める。天井部中央外面に比較的高く中央が高いつまみを貼付する。

蓋C2一口径13cm、器高2cm、つまみ径2.4cmをはかる。天井は低く平らに近く、天井部端部近くで屈曲点をもっている。天井端部ではほぼ垂直に曲げられているが、外面は丸みを認める。天井部中央外面に比較的高く山形のつまみを貼付する。

蓋C3一口径15.5㎝、器高2.2㎝、つまみ径1.6㎝をはかる。天井は低く平らに近く、天井部端部近くで屈曲点をもっている。天井端部でわずかに下方に曲げられているが、外面は丸みを認める。天井部中央外面に比較的高く中央が高いつまみを貼付する。

蓋C4一口径17.5cm、器高2.6cm、つまみ径1.6cmをはかる。天井は低く平らに近く、天井部端部近くで屈曲点をもっている。天井端部で下方に曲げられている。外面は丸みをもつ。天井部中央外面

に比較的高く中央が低いつまみを貼付する。

蓋D1一口径12.8cm、器高1.8cm、つまみ径2.4cm前後をはかり、天井は比較的高くわずかに丸みを もち、端部に向かってなだらかに下がる。天井端部ではほぼ垂直に曲げられているが、外面は丸み をわずかに認める。天井部中央外面に扁平で中央が窪んだつまみを貼付する。

蓋D2一口径14.4cm、器高2.6cm、つまみ径2.8cm前後をはかり、天井は比較的高くわずかに丸みを もち、端部に向かってなだらかに下がる。天井端部ではほぼ垂直に曲げられているが、外面は凹面 をなす。天井部中央外面に扁平で中央が高いつまみを貼付する。

蓋D3 a —口径18.5cm、器高2.4cm、つまみ径3.0cm前後をはかり、天井は比較的高くわずかに丸みをもち、端部に向かってなだらかに下がる。天井端部ではほぼ垂直に曲げられているが、外面は丸みをわずかに認める。天井部中央外面に扁平で中央が窪んだつまみを貼付する。

蓋E1一口径12.7cm、器高1.8cm、つまみ径1.7cm前後をはかり、天井は低く平らに近い。端部に向かって Z字状に大きく曲げられている。天井端部では、ほぼ垂直に曲げられているが、外面は丸みをわずかに認める。天井部中央外面に高く中央が高いつまみを貼付する。

蓋E2一口径14.8cm、器高1.8cm、つまみ径1.9cm前後をはかり、天井は低く平らに近い。端部に向かって Z字状に大きく曲げられている。天井端部では、ほぼ垂直に曲げられているが、外面は丸みをわずかに認める。天井部中央外面に比較的高い中央が山形のつまみを貼付する。

蓋E3一口径12.8cm、器高2.6cm、つまみ径2.1cm前後をはかり、天井は低く平らに近い。端部に向かって Z字状に大きく曲げられている。天井端部ではほぼ垂直に曲げられているが、外面は外傾する面をなす。天井部中央外面に比較的高い中央が平らなつまみを貼付する。

蓋F1 a —口径14.5cm、器高1.3cm、つまみ径1.9cm前後をはかり、天井は低く平らである。端部に向かってほぼ水平にのびる。天井端部ではほぼ垂直に下方曲げられている。天井部中央外面に比較的高く中央が山形のつまみを貼付する。

蓋F1b一口径15.1㎝、器高1.6㎝、つまみ径2.3㎝前後をはかり、天井は低く平らである。端部に向かってほぼ水平にのびるが、一部にわずかな丸みを認める。天井端部ではほぼ垂直に下方曲げられている。天井部中央外面に比較的高く中央が高いつまみを貼付する。

蓋F1c一口径14.6㎝、器高2.2㎝、つまみ径1.8㎝前後をはかり、天井は低く平らである。端部に向かってほぼ水平にのびる。天井端部ではほぼ垂直に下方に曲げられている。天井部中央外面に比較的高い逆三角錐形のつまみを貼付する。

蓋F2一口径14.8㎝、器高1.2㎝、つまみ径2.1㎝前後をはかり、天井は低く平らである。端部に向かってほぼ水平にのびる。天井部中央外面に比較的高く中央が高いつまみを貼付する。

蓋F3一口径17.5㎝、器高2.9 ㎝、つまみ径2.0㎝前後をはかり、天井は低く平らである。端部に向かってほぼ水平にのびる。天井端部ではほば垂直に下方に曲げられている。天井部中央外面に比較的高く中央が高い径の比較的小さなつまみを貼付する。

# 杯(高台付杯)

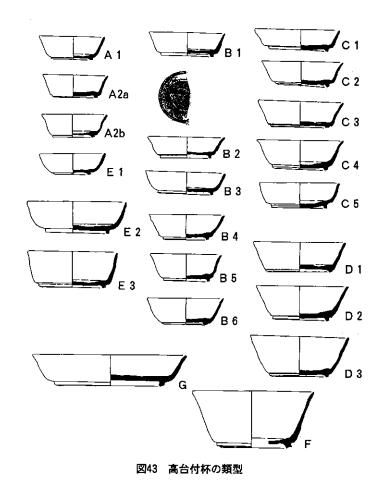
高台付杯A1-口径10.2cm、器高3.6cm、高台径5.6cm、同高0.4cmをはかる。底部は比較的深く平らである。口縁部は、なだらかに上外方にのび端部は丸く仕上げられている。高台は、比較的高く外

反し、内端部で接地する。底部内面 にはナデ調整が行なわれている。

高台付杯A2a一口径10.0cm、器高3.6cm、高台径6.4cm、同高0.5cmをはかる。底部は比較的深く平らである。口縁部はS字を描いて上外方にのび、端部は丸く仕上げられている。高台は比較的高く外反し、内端部で接地する。

高台付杯A2b一口径10.1cm、器高3.6cm、高台径5.8cm、同高0.5cmをはかる。底部は比較的深く平らである。口縁部はS字を描いて上外方にのび、端部は丸く仕上げられている。高台は比較的高く外反し、内端部で接地する。底部内面にはナデ調整が行なわれている。

高台付杯B1一口径12.1cm、器高3.7 cm、高台径8.4cm、同高0.5cmをはか



る。底部は比較的浅く平らで、ヘラ削り調整及びすだれ状圧痕が見られる。口縁部は杯A1に比較 して短くなだらかに上外方にのび、端部は丸く仕上げられている。高台は比較的高く外反し、外端 部で接地する。底部内面にはナデ調整が行なわれている。

高台付杯B2一口径12.2cm、器高3.5cm、高台径8.0cm、同高0.5cmをはかる。底部は比較的浅く平らである。口縁部は短くなだらかにS字状に弧を描いて上外方にのび、端部は丸く仕上げられている。 高台は比較的高く外反し、内端部で接地する。底部内面にはナデ調整が行なわれている。

高台付杯B3一口径12.6cm、器高3.5cm、高台径7cm、同高0.45cmをはかる。底部は比較的浅く平らである。口縁部は短く内彎気味に弧を描いて上方にのび、端部は丸く仕上げられている。高台は比較的高く外反し、内端部で接地する。底部内面にはナデ調整が行なわれている。

高台付杯B4一口径11.8㎝、器高4.2㎝、高台径5.4㎝、同高0.5㎝をはかる。底部は比較的浅く平らである。口縁部は短く内彎気味に弧を描いて上外方にのび、端部は丸く仕上げられている。高台は比較的高く外反し、内端部で接地する。

高台付杯B5一口径11.2cm、器高4.5cm、高台径6.5cm、同高0.5cmをはかる。底部は比較的浅く平らである。口縁部は短くなだらかにS字状に弧を描いて上外方にのび、端部は丸く仕上げられている。 高台は比較的高く外反し、内端部で接地する。

高台付杯B6-口径12.2cm、器高4.2cm、高台径6.7cm、同高0.3cmをはかる。底部は比較的浅く平らである。口縁部は短くなだらかに上外方にのび、端部は丸く仕上げられている。高台は幅広く、比

較的高く外反し、外端部で接地する。

高台付杯C1-口径13.5cm、器高3.5cmをはかる。底部は比較的浅く平らである。口縁部は短くなだらかに上外方にのび、端部は丸く仕上げられている。高台は比較的高く外反し、外端部で接地する。

高台付杯C2一口径13.2㎝、器高3.7㎝をはかる。底部は比較的浅く平らである。口縁部は短く外 轡状に弧を描いて上外方にのび、端部は丸く仕上げられている。高台は比較的高く外反し、内端部 で接地する。

高台付杯C3一口径13.7cm、器高5.0cmをはかる。底部は比較的浅く平らである。口縁部は短く外 彎状に弧を描いて上外方にのび、端部は丸く仕上げられている。高台は比較的低く外反し、内端部 で接地する。

高台付杯C4一口径13.7cm、器高4.6cmをはかる。底部は比較的浅く平らである。口端部はS字状に弧を描いて上外方にのび、端部は丸く仕上げられている。高台は比較的高く外反し、内端部で接地する。

高台付杯C5-口径17.1cm、器高6.0cmをはかる。底部は比較的浅く平らである。口縁部はわずかに外彎状に弧を描いて上外方にのび、端部は丸く仕上げられている。高台は比較的高く外反し、外端部で接地する。

高台付杯D1一口径15.3cm、器高4.8cm、高台径9.4cm、同高0.5cmをはかる。底部は比較的深く平らである。口縁部はなだらかに上外方にのび、端部は丸く仕上げられている。高台は比較的低く外反し、内端部で接地する。底部内面にはナデ調整が行なわれている。

高台付杯D2一口径15.5cm、器高5.5cm、高台径8.0cm、同高0.6cmをはかる。底部は比較的深く平らである。口縁部はわずかに弧を描いて上外方にのび、端部は丸く仕上げられている。高台は比較的高く底部端に貼付し、大きく外反、内端部で接地する。底部内面にはナデ調整が行なわれている。高台付杯D3一口径15.5cm、器高6.4cm、高台径8.4cm、同高0.5cmをはかる。底部は深く平らである。口縁部はなだらかに上外方にのび、端部は丸く仕上げられている。高台は比較的低く底部端から内側に貼付し、大きく外反、内端部で接地する。

高台付杯 E 1 — 口径15.7cm、器高5.1cm、高台径9.5cm、同高0.6cmをはかる。底部は比較的深く平らである。口縁部はわずかに弧を描いて上方にのび、端部は丸く仕上げられている。高台は比較的高く底部端から内側に貼付し、直立しており、両端が接地する。底部内面にはナデ調整が行なわれている。

高台付杯E2-口径15.2cm、器高5.8cm、高台径9.5cm、同高0.6cmをはかる。底部は比較的深く平らである。口縁部は直立気味に上方にのび、端部は丸く仕上げられている。高台は比較的高く底部端から内側に貼付し、外反して貼付されており、内端部が接地する。底部内面にはナデ調整が行なわれている。

高台付杯E3一口径15.4cm、器高5.0cm、高台径10.5cm、同高0.6cmをはかる。底部は比較的深く平らである。口縁部はわずかに弧を描いて上外方にのび、端部は丸く仕上げられている。高台は比較的低く底部端に貼付し外反する。高台の外端部が接地する。底部内面にはナデ調整が行なわれてい

る。

高台付杯F一口径19.1cm、器高9.2cm、高台径10.1cm、同高0.8cmをはかる。底部は深く平らである。 口縁部は高く、わずかに弧を描いて上外方にのび、端部は丸く仕上げられている。高台は比較的高 く底部端から内側に貼付され、外反し内端部で接地する。底部内面にはナデ調整が行なわれている。 高台付杯G一口径24.1cm、器高4.9cm、高台径15.5cm、同高0.8cmをはかる。底部は比較的浅く平ら である。口縁部はわずかにS字状を描いて上外方にのび、端部は丸く仕上げられている。高台は比 較的高く底部端から内側に貼付し、直立しており、内端部で接地する。

#### 杯

蓋杯とは異なる器種であるが、出土量は蓋杯についで多いものである。とくに底部に高台を貼付しないのを特徴とする。口径の大小、底部の形状などから分類が可能であるが、蓋杯ほどの区分はできない。

杯A一口径9.0cm、器高2.5cmをはかる。底部は比較的浅く平らである。口縁部は短く直線的に上外方にのび、端部は丸い。底部はヘラ削り調整が行なわれている。

杯B1 a 一口径12.3cm、器高3.6cmをはかる。底部は比較的浅く平らである。口縁部は短く直線的に上外方にのび、端部は丸い。底部はヘラ削り調整が行なわれている。

杯B1b-口径12.2㎝、器高3.3㎝をはかる。B1aに比較してわずかに底部が広い。底部は比較的浅く平らである。口縁部は短く直線的に上外方にのび、端部は丸い。底部はヘラ削り調整が行なわれている。

杯B1c一口径13.2cm、器高3.3cmをはかる。底部は比較的浅く平らである。口縁部は短くなだらかに上外方にのび、端部は丸い。B1bと比較して口縁部の傾斜が緩やかである。底部から体部下位にヘラ削り調整が行なわれている。

杯C1 a 一口径12.1cm、器高3.6cmをはかる。底部は比較的浅く平らである。口縁部は短くわずかにS字状をなして上外方にのび、端部は丸い。底部から体部下位にはヘラ削り調整が行なわれている。

杯C1b-口径13.2cm、器高3.9cmをはかる。底部は比較的浅く平らである。口縁部は短くわずかにS字状をなして上外方にのび、端部は丸い。底部にはヘラ削り、底部内面にはナデ調整が行なわれている。

杯C1 c 一口径12.2cm、器高3.8cmをはかる。底部はわずかに丸みを持つ。口縁部は短くわずかにS字状をなして上外方にのび、端部は丸い。底部にはヘラ削り、底部内面にはナデ調整が行なわれている。

杯C2一口径12.2㎝、器高3.6㎝をはかる。 底部は比較的浅く平らである。口縁部は短

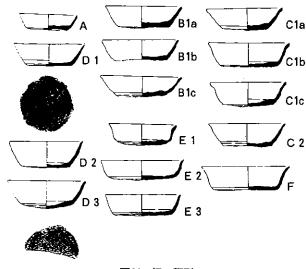
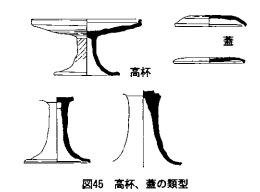


図44 杯の類型

く直線的に上外方にのび、端部は丸い。底部から体部下 位にはヘラ削り調整が行なわれている。

杯D1一口径11.4cm、器高3.4cmをはかる。底部は比較的深く平らである。口縁部は直線的に上外方にのび、端部は丸い。底部から体部下位にはヘラ削り調整が行なわれている。

杯D2一口径11.5cm、器高4.2cmをはかる。底部は比較的深く、ほぼ平らである。口縁部はわずかに弧を描いて



上外方にのび、端部は丸い。底部にはヘラ削り調整が行なわれている。

杯D3一口径11.6cm、器高4.6cmをはかる。底部は比較的深く丸みを持つ。口縁部は直線的に上外方にのび、端部は丸い。底部にはカキ目状痕跡が見られる。

杯E1一口径10.8cm、器高3.5cmをはかる。底部は比較的深く平らである。口縁部はS字状に上外方にのび、端部は丸い。底部外面にヘラ削り調整を行なう。

杯E2一口径13.2cm、器高3.1cmをはかる。E1に比較して口径が大きい点が異なる。底部は比較的深く平らである。口縁部はS字状に上外方にのび、端部は丸い。底部の外面にヘラ削り調整を行なう。

杯E3一口径11.8cm、器高3.4cmをはかる。底部は比較的深く平らである。口縁部はわずかにS字 状をなして上外方にのび、端部は丸い。底部外面にヘラ削り調整を行なう。

杯F一口径14.0cm、器高3.6cmをはかる。底部は比較的深く平らである。縁縁部は外彎して上外方にのび、端部は丸い。底部外面にヘラ削り調整を行なう。

高杯一復元が可能なものは一例のみであるが、脚部の破片はいくつか確認されている。しかし全く同じ形状のものは複数確認されていない。なお復元可能な例は口径17.4cm、器高9.0cmを測る中型の高杯である。ちなみに脚のみの例は、いずれも当該例より若干大型の高杯となる。

ⅢA1 —□径12.4cm、器高1.7cmをはかる。底部は浅く平らである。底部外面にはカキ目痕跡を残す。□縁部は短くわずかに弧を描いて上外方にのびる。端部は丸く仕上げている。

ⅢA2一口径13.2cm、器高1.7cmをはかる。底部は浅く平らである。底部外面にはヘラ削り調整が行なわれている。口縁部は短くS字状に弧を描いて上外方にのびる。端部は丸く仕上げている。

皿A3一口径12.8cm、器高2.5cmをはかる。底部は浅く丸みを持つ。底部外面にはヘラ削り調整が 行なわれている。口縁部は短く直線的に上外方にのびる。端部は丸く仕上げている。

皿A4-口径13.3cm、器高2.0cmをはかる。底部は浅く平らである。底部外面にはヘラ削り調整が 行なわれている。口縁部は短く直線的に上外方にのびる。端部は丸く仕上げている。

ⅢB1—□径15.0cm、器高2.1cmをはかる。底部は浅く平らである。底部外面にはヘラ削り調整が 行なわれている。□縁部は短く上外方にのびる。端部は丸く仕上げている。

皿B2一口径21.0cm、器高3.1cmをはかる。底部は比較的浅く、丸みをもつものである。底部外面にはヘラ削り調整が行なわれている。口縁部は短く上外方に直線的にのびる。端部は丸く仕上げている。

皿C1a一口径17.2cm、器高2.4cmをはかる。底部は浅く平らである。底部外面にはヘラ削り調整が行なわれている。口縁部は短くなだらかに上外方にのびる。端部は丸く仕上げている。

皿C1b一口径18.0cm、器高2.8cmをはかる。底部は浅くわずかに丸みをもつ。底部外面にはヘラ削り調整、内面にはナデ調整が行なわれている。口縁部は短くなだらかに上外方にのびる。端部は丸く仕上げている。

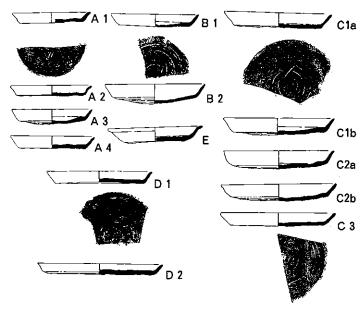


図46 皿の類型

皿C2 a 一口径17.8cm、器高3.0

cmをはかる。底部は浅くわずかに丸みをもつ。底部外面にはヘラ削り調整、内面にはナデ調整が行なわれている。口縁部は短く外彎気味に上外方にのびる。端部は丸く仕上げている。

皿C2b-□径18.4cm、器高2.6cmをはかる。底部は浅くわずかに丸みをもつ。底部外面にはヘラ削り調整が行なわれている。□縁部は短くなだらかに上外方にのびる。端部は丸く仕上げている。

皿C3 ─□径18.2cm、器高2.2cmをはかる。底部は浅く平らである。底部外面にはカキ目調整が行なわれている。□縁部は短くなだらかに上外方にのびる。端部は丸く仕上げている。

皿D1−口径17.1cm、器高2.1cmをはかる。底部は浅く平らである。底部外面にはヘラ削り調整が行なわれている。口縁部は短くなだらかに上外方にのびる。端部は丸く仕上げている。

ⅢD2 一口径20.2㎝、器高1.9㎝をはかる。底部はかなり浅く平らである。底部外面にはヘラ削り調整が行なわれている。口縁部は短く直線的に上外方にのびる。端部は丸く仕上げている。

皿E─□径15.2cm、器高2.4cmをはかる。底部は浅く平らである。底部外面にはヘラ削り調整が行なわれている。□縁部は短くS字を描いて上外方にのびる。端部は丸く仕上げている。

#### 壺

壺には短頸壺、長頸壺(水瓶)など多様ではあるが、出土量は少ない。なおこれらの種類は複数 見られる。

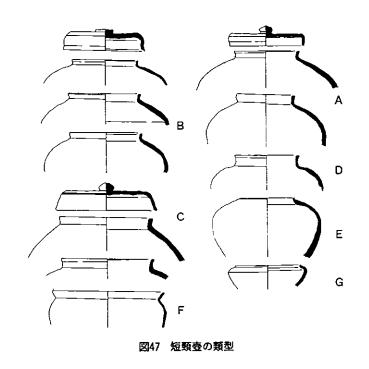
短頸壺A一口径9.1~10㎝をはかる蓋を伴う短頸壺である。薬壺形と呼ばれる形態のもので、頸基 部太く頸部は短く直立気味に上外方にのび、端部は内傾する面をなす。体部最大径は、わずかに上 位に求められ、肩の張りは少なくなだらかである。頸部の高さや立ち上がる角度に差異が見られる。

蓋は、天井が平らで中央に肉厚の宝珠つまみを貼付する形状のもので、口縁部は天井端から内方に傾斜して下がり、端部は内傾する面をなす。

短頸壺B一口径10.5~11.5㎝をはかる蓋を伴う短頸壺である。薬壺形と呼ばれる形態のものである。 頸基部は太く、頸部は短く直立気味に上外方にのび、端部は内傾する面をなす。体部最大径は、上 位に求められ、肩の張りは少ない。 頸部の高さや立ち上がる角度に差 異が見られる。

蓋は、天井が平らで中央に扁平なつまみを貼付する形状のもので、口縁部は天井端から下方に外彎して下がり、端部は内傾する面をなす。

短頸壺C一口径13.5~14.5㎝をはかる蓋を伴う短頸壺である。薬壺形と呼ばれる形態のものである。 頸基部は太く、頸部は短く外反気味に上外方にのび、端部は外傾する面をもつ。体部最大径は、中位



に求められ、肩の張りは少なくなだらかなカーブを描く。頸部の高さや立ち上がる角度に差異が見られる。

蓋は、天井が平らで中央に肉厚の宝珠つまみを貼付する形状のもので、口縁部は天井端から下方に外反して下がり、端部は内傾する面をなす。

短頸直口壺D一口径10.4cmをはかる短頸直口壺である。頸基部は太く、頸部は短く直立気味に上方にのび、口縁端部は内傾する面をもつ。口縁外面には稜を認める。体部最大径は上位に求められ、 肩の張りは比較的少ない。

短頸壺E-口径8.4㎝をはかる短頸壺である。頸基部は太く、頸部はきわめて短く直立して上方にのびる。体部最大径は上位に求められ、肩の張りをわずかに認める。

短頸壺F—口径17㎝前後をはかる短頸壺である。頸基部は太く、頸部は短く外反して上方にのび、口縁端部は丸く仕上げられている。体部最大径は上位に求められ、肩の張りはほとんど見られない。短頸壺G—口径10.2㎝をはかる小型の短頸壺である。頸基部は太く、頸部はきわめて短く直立して上方にのびる。体部最大径は上位に求められ、肩の張りを認める。

長頸壺A一口径12.3cm、器高18.9cmをはかる。頸基部は比較的細く、頸部は外反して上外方にのび、端部付近で大きく外側に曲げられ、口縁端部は丸く仕上げられている。頸基部から上位外面に沈線3条をめぐらせている。体部最大径は中位からわずかに上位に求められ、肩は大きく張っている。体部中位から径をせばめて底部に至る。底部両端に八の字に開いた幅の広い高台を貼付する。高台は内端面で接地する。

長頸壺B1一口径6.3cmをはかる。水瓶と呼ばれる形状の壺である。頸基部は細く、頸部は全体に細く、端部付近で大きく外反し、端部付近で再び大きく内側に曲げられている。頸部中位外面に沈線3条をめぐらせている。体部は欠損のため明らかではないが、他の類例から見ると、肩の張りの見られない径の小さい、丸みを持ったものとなろう。

長頸壺B2一口径3.2cmをはかる。水瓶と呼ばれる形状の小型の壺である。頸基部は細く、頸部は全体に細く、端部付近で大きく外反し、端部付近で再び大きく内側に曲げられている。頸部中位外面に沈線2条をめぐらせている。体部は欠損のため明らかではないが、他の類例から見ると、肩の張りの見られない径の小さい、丸みを持ったものとなろう。

長頸壺C1一口径6.9㎝をはかる。頸基部は比較的細く、頸部は外彎して上外方にのび、端部付近で大きく曲げられ、口縁端部にいたる。体部は失われているが、同一例と見られるものの体部最大径は中位からわずかに上位に求められ、肩はわずかに張っている。

長頸壺C2一口径5.7cmをはかる。C1と 同様の形状を示すが、やや小型である。

平瓶一扁平な体部の一方に偏して口頸部を貼付する形状のものである。体部外面にはカキ目調整が見られ、底部付近からはヘラ削り調整が行なわれている。

蓋一蓋杯のセットをなす蓋ではない。おそらく壺ないしは鉢に伴う蓋と見るのが妥当なように思われる。すでにこの形状の蓋は、

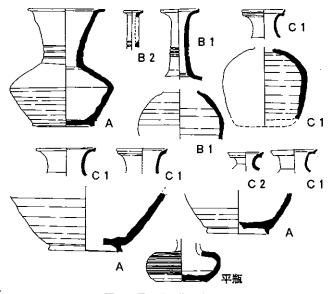


図48 長頸壺・瓶の類型

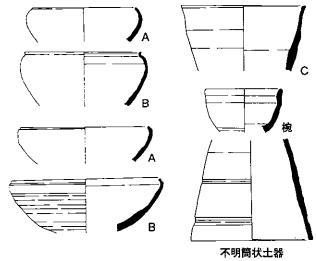


図49 鉢、椀の類型

時期的に下降した段階で蓋杯に伴うものとして、播磨地域では確認されているが、牛頸での場合は 量的に少ないことや、杯に該当するものが明確に確認されていないことから、本稿では蓋杯との関係はないものとしておきたい。なお今後の出土例からの再検討を要することは記すまでもないだろう。

鉢A一口径16.2~20.0㎝をはかる鉄鉢形土器である。本来は金属器で作られているものであるが、 須恵器で模倣して作られたものである。口縁端部でわずかに段をなすのが本例の特徴である。わず かに法量の異なるものが出土している。

鉢B一口径18.1~23.4㎝をはかる鉄鉢形土器である。口縁端部で内側に曲げられ、外面に段を認める。外面全体にヘラ削りによる丁寧な仕上げ調整が行なわれている。

鉢C一口径19.3cmをはかる深鉢形土器である。底部は失われているが、口縁部は上外方にのび、口 縁端部は内傾する面をなす。瓦質であり、須恵器としてよいかどうかは問題がある。 椀一口径11.5㎝をはかる小型の鉢ないしは椀である。底部を欠損しているが、状況から平らに近い ものと考えられる。体部は底部から外反したのちS字状に彎曲しながら端部にいたる。口縁端部は 丸く仕上げられている。体部下位から底部には回転へラ削り調整が行なわれている。

# ・瓦

今回の調査では、瓦類に属する遺物として丸瓦および瓦塔が見られる。いずれも灰原からの採集 品であるが、いずれかの窯で生産されていた可能性が濃いものである。

丸瓦一丸瓦の一部が少量出土しているが破片であり、全体の復元はできない。内面には布の痕跡が見られ、側面にはへう切りが行なわれている。外面には縦方向の調整が見られるが、明瞭ではない。瓦塔——辺の長さが40㎝、厚さ1~1.8㎝をはかり、両端がわずかに反り上がった瓦質の塔の屋根である。出土した破片を接合すると一層分の屋根が復元できるが、すべての部分は確認できない。一辺には、4列の丸瓦棟が見られ、それぞれ端部には丸瓦とは異なる端飾瓦が見られる。中央部分は径11.2センチ前後をはかる円形の穴が認められる。またこの円孔に面して面取り調整が行なわれており、当該部分に何かを嵌め込んだものと考えられる。

# ・土師器

灰原から若干の土師器の破片を採集しているが、そのうちで形状が明らかなものは小型壺と甑と見られる2点のみである。他はいずれも細かな破片であり、器種の判定はできない。また採集された灰原の下層部分からは、明らかに異なる時期の須恵器も採集されており、今回報告した2号窯から5-Ⅱ号窯の操業と時期的に直接結びつかない。なお当該遺構については後日の報告にゆだねることにする。従って本稿ではその出土が見られたという記述にとどめておきたい。

# 3、小 結

以上、今回出土した遺物についての観察を記述してきた。既述の状況から明らかなように量的にも質的にも須恵器が圧倒していることは改めて記述するまでもない。窯の構築状況から、その操業の順位を想定することは可能であるが、灰原での輻輳状況はその区分を困難にしている。すなわち灰原は、その性格上廃棄物の捨て場であり、重複状況は必ずしも地質を見る層位学の順位をあきらかにできる堆積状況ではない場合が多い。とくに今回の場合は地域的に狭小な範囲に各窯の廃棄物が集中したこともあって、通常の場合にはない複雑さを呈していることは否定できない。

このような状況の中で、須恵器についてはいくつかの類型区分が可能であった。それらについて 記述してきたが、あくまでその記述は出土状態からの区分、分類ではなく、各遺物の有する形態的 特徴からの分類である。今後は、類似例との比較検討を通じて、それらの分類が如何に時期的な対 応関係を示すのかを明らかにしていかねばならないという課題が残されている。

# 須 恵 器 観 察 表

# 凡 例

- 1、本表は、本堂5次窯跡およびその周辺から出土した須恵器の観察記録である。
- 2、標記の器種は、蓋杯の場合は従来の慣例に従って蓋、あるいは身の区別をおこなっているが、 必ずしも本稿のとおりになるとは限らない。従って、必ずしもこの呼称を他者に求めるもので はない。
- 3、本記述で用いた手法の標記は、いずれも『陶邑』 I、Ⅱ、Ⅲおよび『牛頸ハセムシ窯跡群調査報告書』などで用いたものである。
- 4、図版番号の下方に()内に記入している番号は遺物番号であり、遺物カードとの対比が可能である。
- 5、色調は小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』1967、日本色研事業株式会社によって識別した。
- 6、本表の作成は、中村の指導のもと池田千尋(博物館)および文化財学科学生(久保良子、細川 由起了、服部恵子、廣瀬佑美、田淵智子、河野恭子、井上みさ、中田葉子ほか)が担当した。

	器種•法量	図版番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
	蓋A1a 口径12.5cm~ 13.5cm 器高 3.8cm	13-1 (424)	天井は比較れた。 大井が端部らがは 大井が端が大井直にが、大井直にが、大井直にが、大井直にが、大井直にが、大井直にが、大上、大田が、大上、大田が、大上、大田が、大上、大田が、大上、大田が、大田が、大田が、大田、大田、大田、大田、大田、大田、大田、大田、大田、大田、大田、大田、大田、	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面には1/2に回転ヘラ削り調整が施され、内面ほかは回転ナデ調整によって調整されている。	焼成良好 胎土やや粗 内面 N7/0 灰白 外面 N6/0 灰
,	蓋A1b 口径13.5cm 器高 2.5cm	13-12 (5139)	天井は比較的の高くもっかはにればいかないではが出いた。 ではいい 大井直 ない 大井直 ない 大井直 ない かい でいがい がい	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面2/3前後に回転が施った別り調整が施され、内面ほかは回転ナデ調整によって調整されている。	焼成良好 胎土緻密 内面 5Y5/1 灰 外面 2.5Y5/1 黄灰 断面 5P7/1 明紫灰
	蓋A1c 口径13.0cm 器高 2.4cm	13-13 (5111)	天井は比較のみでは、 大井が端がらがまれている。 では、 大が端がらがまずが、 大がででれば、 大が認め、 でのでするが、 ののでするが、 ののでするが、 ののでするが、 ののでするが、 ののでするが、 ののでするが、 ののでするが、 ののでするが、 ののでするが、 ののでするが、 ののでするが、 ののでするが、 ののでする。 ののでで。 ののでで。 ののでです。 ののででする。 ののでです。 ののでです。 ののででする。 ののででする。 ののでです。 のの	マキアゲ・ミズビ キ成形。天井部外 面2/3前後に回転 ヘラ削り、ほかは 回転ナデ調整。	焼成良好堅緻 胎土やや粗 内面 7.5Y6/1 灰 外面 N6/0 灰 断面 5GY7/1 明オ リーブ灰

器種·法量	図版番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋A2 口径14.0cm 器高 2.8cm	13-15 (5140)	天井が端がはいる。 おかなのでは、 大井が端が、 大井が端が、 大井直るを、 では、 大手直るを、 では、 では、 がは、 では、 がいれたがいれた。 では、 がいれたがいれた。 では、 がいれたがいがはいる。 では、 がいがいがいがいがいがいた。 では、 では、 がいがいがいがいがいがいた。 では、 では、 では、 では、 がいがいがいがいがいた。 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、	マキアゲ・ミズビ キ成形。天井部 画1/2以上に回 へラ削り調整 へっ 削り調整 デ調整、面中央にはナデ調整。	焼成良好堅緻 胎土緻密 内面 N5/0 灰 外面 N6/0 灰 断面 10YR6/1 灰
蓋B1a 口径12.1cm 器高 3.8cm	13-3 (428)	天井は高いない。 大井は端部にもったがられる。 大井は端部にもったがる。 大井はがいるが、 大井はがいるが、 大井はがいるが、 大井はがいるが、 大井はがいるが、 大井をがいまする。 大井をいるが、 大井をいるが、 大井をいるが、 大井をいるが、 大井をいるが、 大井をいるが、 大井をいるが、 大井をいるが、 大井をいるが、 大井をいる。 大井をいるが、 大井をいるが、 大井をいるが、 大井をいるが、 大井をいるが、 大井をいるが、 大井をいるが、 大井をいるが、 大井をいるが、 大井をいるが、 大井をいるが、 大井をいるが、 大井をいるが、 大井をいるが、 大井をいるが、 大力が 大力が 大力が 大力が 大力が 大力が 大力が 大力が 大力が 大力が 大力が 大力が 大力が	マキアゲ・ミズビ キ成形。天井部外 面1/2前後に回転 ヘラ削り調整。口 縁部、および内面 はいずれも回転ナ デ調整を行なう。	焼成良好 胎土やや粗 内面 5B6/1 青灰 外面 5PB6/1 青灰 断面 5PB6/1 青灰
蓋B1b 口径12.1cm 器高 3.6cm	13-8 (13148)	天井は高く丸みを もち、対部に向いてが もち、対象を井端のである。 は内いる。がは内いる。 がはかに外がに中央 がはかいつまる。 はいる。 はいかに中央 がいる。 はいかのかに がいる。 はいかのかに はいかのかに はいかのか。 はいののである。 はいののでも はいののである。 はいののでは はいののである。 はいののでは はいのである。 はいののでは はいのである。 はいのでは はいのである。 はいのでは はいのである。 はいのでは といのでは といので といので といので といので といので といので といので といので	マキアゲ・ミズビ キ成形、天井部外 面1/3に回転へラ 削り調整、他は回 転ナデ調整。	焼成良好堅緻 胎土緻密 内面 N6/0 灰 外面 N6/0 灰 断面 N7/0 灰白

器種•法量	図版番号	形態の特徴	手法の特徴	備考 —————
蓋B2a 口径15.5cm 器高 3.8cm	13-17 (13147)	天井は端部にって 大丸みをって 大丸ので、2/3部で 大力ので 大力ので 大力ので 大力で 大力で 大力で 大力で 大力で 大力で 大力で 大力	マキアゲ・ミズビ キ成形。天井部外 面1/2に回転へラ 削り調整。内面中 央にナデ調整、他 は回転ナデ調整。	焼成甘い 胎土やや粗 内面 7.5Y6/1 灰 外面 7.5Y5/1 灰 断面 N6/0 灰
蓋B2b 口径15.8cm 器高 3.5cm	21-16 (7)	口径が大き 大き 大き 大き 大き 大き 大き 大き 大き 大き もって がい はい 大き なみ 大手 直 る 認 に い なみ 中 中 中 い は い は い み ま か ま か い き か け き か は か け き か け き か け き か け き か け き か け き か け き か け き か け き か け き か は か は か は か け き か は か は か は か は か は か は か は か は か は か	マキアゲ・ミズビキ成形、回転ナデ調整。	焼成やや甘い 胎土やや粗 内面 5Y6/1 灰 外面 5Y7/2 灰白 外面 5Y7/1 灰白
蓋C1 口径15.5cm 器高 3.0cm	13-19 (429)	天井は低く平らに 近く、大井は低く平らに で大井に で大井に が、大井に はまれれれない。 大井で はまれれれない。 大井で はなれれない。 大井で はないない。 大井で はないない。 大井で はないない。 大井で はないない。 大井で はないない。 大井で はない。 大井で はない。 大井で はない。 大井で はない。 大井で はない。 大井で はない。 大井で はない。 大井で はない。 大井で はない。 大井で 大井で 大井で 大井で 大井で 大井で 大井で 大井で 大井で 大井で	マキアゲ・ミズビ キ成形。天井部外 面は1/2以上に回転へラ削り調査が 行なわれ、内面にかけないずれものはいず調整がれている。	焼成良好 胎土緻密 内面 N6/0 灰 外面 N6/0 灰
蓋C2 口径13.0cm 器高 2.0cm	21-4 (402)	天井は低く平らに 近く、わずかに凹 凸をもつ。天井端 部では、ほば垂直 に曲げられている。 天井部中央外面に 比較的高く山形の つまみを貼付する。	マキアゲ・ミズビ キ成形。天井部外面は1/2以上に回転へラ削り調整が行なわれ、内面ほかけいずれも回転ナデ調整が行なわれている。	焼成良好 胎土緻密 内面 7.5Y8/2 灰白 外面 7.5Y8/1 灰白

器種・法量	図版番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋C3 口径15.5cm 器高 2.2cm	13-20 (1395)	口径が大きく。 井は低く平部は 大平部は 大平部は 大平部は 大平部は 大でに でいる。 近れていれる。 はびられていれる。 はびられていれる。 はびられていれる。 はびられていれる。 はがられていれる。 はいる。 にいるのか。 はいるのが。 は	マキアゲ・ミズドキ成形。天井の町は2/3以上に整いっまり間が行なわれ、内もいずれもいず調整がれている。	焼成良好堅緻 胎土やや粗 内面 5PB6/1 青灰 外面 5PB6/1 青灰 断面 7.5Y7/1 灰白
蓋C4 口径17.5cm 器高 2.6cm	13-22 (7140)	口径が大きく天井 は低く平らに近い。 天井部端が1/2近くでいる。 ている。天井端がられている。 で下方に曲げられる。 はれま中央 もつ。 大井がいる。 や中央が低いる。 を貼付する。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面はわずかに回転から削り調整が行なわれ、内面ほかはいずれも回転ナデ調整が行なわれている。	焼成甘く軟質 胎土粗 内面 7.5Y6/2 灰オ リーブ 外面 2.5Y7/4 浅黄 断面 5Y4/1 灰
蓋D1 口径12.8cm 器高 1.8cm	281 (514)	天井は比較的低い。 端部に向かってな だらかに下がる。 天井端部でほぼ垂 直に曲げられてれるが、外面に みが、外がに央外面に 展平で中央が窪ん だつまみを貼付す る。	マキアゲ・ミズビ キ成形。天井部外 面は1/2以上に回転へラ削り調整が 行なわれ、内面ほかはいずれも回転ナデ調整が行なわれている。	焼成良好堅緻 胎土粗 内面 5Y5/1 灰 外面 5Y5/1 灰
蓋D2 口径14.4cm 器高 2.6cm	29-1 (38)	天井部は比較的高 くわずかに丸みを もち、なだらかに 下りる。端部はほ ば垂直に曲げられ 丸い。天井中央外 面に扁マで中央が 高いつまみを貼付 する。	マキアゲ・ミズビ キ成形。天井部外面は1/2以上に回転へラ削り調整が行なわれ、内面ほかはいずれも回転ナデ調整が行なわれている。	焼成良好 胎土やや粗 内面 N7/0 灰白 外面 5Y6/1 灰 断面 5Y7/1 灰白

器種•法量	図版番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋D3 口径18.5cm 器高 2.4cm	28-20 (92)	口径は大きく 部は比較い。第22 部は近いで3/2 のから下でははれる。 ではれる。 がははれる。 ではれる。 ではれる。 ではれる。 ではれる。 ではれる。 ではれる。 で中央が にはれる。 で中央が にん だっる。 にん でってが にした。 にはれる。 でいる。 にはれる。 でいる。 にはれる。 でいる。 でいる。 にはれる。 でいる。 にはれる。 でいる。 にはれる。 でいる。 にはれる。 でいる。 にはれる。 でいる。 にはれる。 でいる。 にはれる。 でいる。 にはれる。 でいる。 にな。 になる。 になる。 になる。 にな。 にな。 にな。 にな。 にな。 にな。 にな。 にな	マキアゲ・ミズ部の で 大井に で 大井に で 大井に で 大井に を が で 大井に を が で か い は か け が で は い が で は か け で が で い な ら い が で い な ら い か か か か か か か か か か か か か か か か か か	焼成良好 胎土やや粗 内面 2.5Y7/3 浅黄 外面 2.5Y7/3 浅黄 断面 2.5Y8/1 灰白
蓋E1 口径12.7cm 器高 1.8cm	18-4 (761)	天井は低く平らに ではい。端部に大いって ではずられいではいる。 天井道に丸みでが がに発動では丸みをのでは がに認め外面に がいのでが がいが がいが がいが がいが がいが がいが がいが が	マキアゲ・ミズビ キ成形。天井部外、 内面ほかはいずれ も回転ナデ調整が 行なわれて	焼成良好 胎土やや粗 内面 N5/0 灰 外面 5B5/1 青灰 断面 10R4/2 灰赤
蓋E2 口径14.8cm 器高 1.8cm	19-14 (523)	天井は低いない。 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部のは1/2以上に回転へラ削り調整が行なわれ、内はいずれも回かけが調整が行なわれて	焼成甘く軟質 胎土やや粗 内面 10Y8/1 灰白 外面 2.5Y8/2 灰白 断面 10Y8/1 灰白

器種・法量	図版番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋E3 口径12.8cm 器高 2.6cm	43-19 (223)	口径は不 は低く に向から はでいる には でで がいる はばて がいる はばれて がな ははれて がな はなする はなれて がなする はなれて がなする はなれて がなする はなれて がない はなれて がない はなれて がない はなれて がない はなれて がない はなれて がない はない はない はない はない はない はない はない はない はない は	マキアゲ・ミズ 外面は1/2以上に整 行なわれ、内面は1が行なわれ、内面のがけないずれも回 がけいずれも回れている。	焼成やや甘い 胎土やや粗 内面 2.5Y7/1 灰白 外面 2.5Y7/1 灰白 断面 2.5Y8/1 灰白
蓋F1a 口径14.5cm 器高 1.3cm	16-2 (5149)	天井は低部でする。 はば大井地にのでする。 はばられた。 はははははははははははははははははははははははははははははははははははは	マキアゲ・ミズ 半水 で キ 水 が で 大	焼成良好堅緻 胎土やや粗 内面 N5/0 灰 外面 N5/0 灰 断面 N4/0 灰
蓋F1b 口径15.1cm 器高 1.6cm	19-18 (240)	天井は端部である。 でってってってってってってってってってってってってってってってってっていた。 大井さに、一本部では、一本部で大井がいる。 大井前に、大井がいる。 大井前に、大井がいる。 はばず中央 が、はばず中のでは、 が、はばずのでは、 が、はばずのでは、 が、はばずのでは、 が、はばずのでは、 が、はばずのでは、 が、はばずのでは、 か、は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、	マキアゲ・ミズビ キ成形。天井・削り 調整が行なわれ、 内面ほかはいずれ も回転ナデ調整が 行なわれて	焼成良好 胎土緻密 内面 5Y6/1 灰 外面 2.5Y6/1 黄灰 断面 2.5Y7/1 灰白
ŠF1c         口径14.6cm         器高 2.2cm	37 – 23 (185)	天井は低く平らで ある。端部に向かっ てはぼ水平にのびる。 で る。天井端にのででは はぼ垂直いる。 井部中央・逆三 中央・逆三 りのつま かのつま かる。	マキアゲ・ミズビ キ成形。天井部外面は1/2以上に回転へラ削り網整が行なわれ、内面にかけないずれも回転ナデ調整が行なわれて	焼成良好 胎土緻密 内面 5Y6/1 灰 外面 7.5Y7/1 灰白 断面 7.5Y7/1 灰白

器種•法量	図版番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋F2 口径14.8cm 器高 1.2cm	37-17 (189)	天井は低く平らで ある。端部に向かっ てほぼ水平にのび る。天井中央外面 に比較的高く中央 が高いつまみを貼 付する。	マキアゲ・ミズビ キ成形。天井部外 面は回転へう削り 調整が行なわれ、 内面ほかはいずれ も回転ナデ調整が 行なわれている。	焼成良好 胎土やや粗 内面 N5/0 灰 外面 N5/0 灰 断面 N4/0 灰
蓋F3 口径17.5cm 器高 2.9cm	43-20 (214)	天井は低く平らで ある。端部に向かっ てほぼ水平にののび る。天井端に下がでは ほぼ垂直にいる。 井部中央外面に 較的高い接宝珠様 を貼付する。	マキアゲ・ミズビ キ成形。天井部外 面は1/2以上に回 転へラ削り調整が 行なわれ、内面ほ かはいずれも回転 ナデ調整が行なわ	焼成良好 胎土やや粗 内面 5Y6/1 灰 外面 5Y6/1 灰 断面 5Y6/1 灰
高台付杯A1 口径10.2cm 器高 3.6cm	18-6 (780)	底部は比較的深く 平らである。口縁 部は、なだらかに 上外方にのび端部 は丸く仕上げられ ている。高台は、 比較的高く外反し、 内端部で接地する。	マキアゲ・ミズビキ 成形。底部外面は 回転へラ削り調整 が行なわれ、内面 中央にナデ調整 は かは回転ナデ調整 が行なわれている。 高台は貼り付け。	焼成良好 胎土やや粗 内面 N7/0 灰白 外面 N6/0 灰 断面 10Y6/1 灰
高台付杯A2 口径10.0cm 器高 3.6cm	20-5 (263)	底部は比較的深く 平らである。口縁 部は、わずかにS 字を描いて上外方 にのび端部は丸く 仕上げられている。 高台は、比較的高 く外反し、内端 で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面は回転へラ削り調整が行なわれ、中間をかけないではないではないできます。高台は貼り付け。	焼成良好 胎土緻密 内面 5PB5/1 青灰 外面 N5/0 灰 断面 N6/0 灰
高台付杯A2b 口径10,1cm 器高 3.6cm	18-8 (13111)	底部は比較的深く 平らである。口縁 部は、S字を描い て上外方にのび端 部は丸く仕上げられている。高台は、 比較的高く外反し、 内端部で接地する。	マキアゲ・ミズビキ 成形。底部外面は 回転へう削り調整 が行なわれ、内面 中央にナデ調整ほ かは回転ナデ調整 が行なわれている。 高台は貼り付け。	焼成良好 胎土やや粗 内面 5Y7/2 灰白 外面 5Y6/1 灰

器種・法量	図版番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
高台付杯B1 口径12.1cm 器高 3.7cm	34-13 (786)	底部は比較的浅く 平らで、口較的部で、 杯A1に比較のおいた 短くなだらかに がらないがられて がらく仕上がられて いる。 高く外域 端部で接地する。	マキアゲ・ミング キ で まっという で で で で で で で で で で で で で で で で で で で	焼成良好 胎土緻密 内面 5PB7/1 明青灰 外面 N7/0 灰白 断面 N7/0 灰白
高台付杯B2 コ径12.2cm 器高 3.5cm	16-6 (105)	底部は比較的とは いあるながいない。 のはは一般では いて上外では いて上外では はないの は いては は いで は いで は いで は い に い に い に い に い に い に い に い に い に い	マキアゲ・ミズ・コーション・ミズ・・ミズ・・ミズ・・ミズ・・ミズ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	焼成良好 胎土やや粗 外面 N7/0 灰白 内面 N7/0 灰白
高台付杯B3 コ径12.6cm 器高 3.5cm	30-14 (512)	底部は比較的浅く 平らである。口縁 部は短くわずかに 内彎気味に弧で払 いて上方にのびげられている。高く仕上げられている。外反し、 内端部で接地する。	マキアゲ・ミズ外面は回転へのラル、は回転ではかけれていた。底前の内ではカカル、関連をはいたが行いたが、高いのでは、これにはいいでは、これにはいいでは、これにはいいでは、これにはいいでは、これにはいいでは、	焼成良好 胎土やや粗 内面 7.5Y6/1 灰 外面 7.5Y5/1 灰 断面 10Y5/1 灰
高台付杯B4 口径11.8cm 器高 4.2cm	22-7 (11)	底部は比較的というである。 一般である。が対象にはないのであるがである。 が対象にはいいではないのではないのではできる。 はいかにはないのではないのではないのではないのではないのではないのではない。 はいのではないのではないのではないのではないのではない。 はいのではないのではないのではないのではない。 はいのではないのではないのではないのではない。 はいのではないできます。 はいのではないできます。 はいのできまする。	マキアゲ・ミズ外の間は回転へララカれの調整が行なわれた。これの中央にカールに対している。高台は貼り付け。	焼成良好堅緻 胎土緻密 内面 N6/0 灰 外面 N6/0 灰 断面 10YR6/2 灰黄 褐

器種・法量	図版番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
高台付杯B5 口径11.2cm 器高 4.5cm	30-12 (73)	底部は比較的浅く 平らである。口縁 部は短くなだらか にS字状に弧を描 いて上外方にのび 端部は丸く仕上げ られている。く外 は比較的高で接地 し、内端部で接地 する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面は回転へっ削り内面はかれたのは回転ナデ調整が行なわれている。高台は貼り付け。	焼成良好堅緻 胎土粗 内面 7.5Y5/1 灰 外面 7.5Y6/1 灰 断面 7.5Y5/1 灰
高合付杯B6 口径12.2cm 器高 4.2cm	23-18 (502)	底部は比較的深く 平らである。口縁 部はなだらかに上 外方にのび端部は 丸く仕上げられて いる。高台は幅広 く、比較的高く、 外端部で接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面は回転へラ削り調整が行なわれ、調整は中央にナデデ調をはかけなわれて調整が行なわれて調整が行なわれている。高台は貼り付け。	焼成良好 胎土緻密 内面 10BG6/1 青度 外面 10BG5/1 青度
高台付杯C1 口径13.5cm 器高 3.5cm	30-15 (98)	底部は比較的浅く 平らである。口縁 部は短くなだらか に上外方にのびげられている。高く仕上げられている。外域的高く外反し、 外端部で接地する。	マキアゲ・ミズド・ミズ州 は回転へラ削、内面中央にナデナ にはか行なかが行なかが行なが行ながにない。 整が行なわれまりが行なわれより付い。	焼成良好堅緻 胎土やや粗 内面 7.5Y4/2 灰 リーブ 外面 7.5Y5/2 灰 リーブ 断面 7.5Y5/1 灰
高台付杯C2 口径13.2cm 器高 3.7cm	18-16 (7124)	底部は比較的浅く 平らである。口縁 部は短く外彎状に 弧を描いて上外方 にのび、端部に く仕上げられてい る。高く外反し、内端 部で接地する。	マキアゲ・ミズビ キ成形。底部外面 は回転へ ラ削り調整が行なわれ、内面中央にナデ調整 ほかは回転ナデ 悪い をが行なわれている。高台は貼り付け。	焼成良好 胎土緻密 内面 N7/0 灰白 外面 N6/0 灰 断面 10Y7/1 灰白

器種•法量	図版番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
高台付杯C3 口径13.7cm 器高 5.0cm	35-20 (287)	底部は比較的浅は比較的。 対域 外域 大大 は 大 が ら が が が が ら が が が が が が が が が が が が	マキアが・ミストン・ミストン・ミストン・ミストン・ミストン・ミストン・ミストン・リー・ロー・ロー・ロー・ロー・ロー・ロー・ロー・ロー・ロー・ロー・ロー・ロー・ロー	焼成良好 胎土緻密 内面 10YR8/3 浅黄 橙 外面 2.5Y6/1 黄灰 断面 10YR8/4 浅黄 橙
高台付杯C4 口径13.7cm 器高 4.6cm	20-14 (124)	底部は比較的浅く 平らである。口縁 部はS字状に弧を 描いて上外方にく位 び、端れている。 高台は比較的高く 外反し、内 ・ 接地する。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外の調整が行なわれ、調整が行なわれが開いませんが行なれた。高かけないではいかではいいですができませんが、高台は貼り付け。	焼成やや甘い 胎土粗 内面 2.5Y7/2 灰黄 外面 2.5Y6/1 黄灰 断面 2.5Y7/4 浅黄
高台付 杯C5 口径17.1cm 器高 6.0cm	30-17 (200)	底部は比較的浅く 平らである。口縁 部はわずを描い、 外方にの仕上 外方にの仕上 がは、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は	マキアゲ・ミズ外の ミズ外の はの転りない。 をかけない。 をかけない。 ではいたがでいたができます。 をがいる。 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、	焼成やや甘い 胎土やや粗 内面 10YR8/2 灰白 外面 2.5Y8/1 灰白 断面 10Y8/1 灰白
高台付杯D1 口径15.3cm 器高 4.8cm	44-25 (1377)	底部は比較的深く 平らである。口縁 部はなだらかに上 外方にのび端れて 丸く仕上げられて いる。高台はし、内 端部で接地する。	マキアゲ・ミズギー キ成形。底部外間は一般が行なわれ、調整は一切が行ないが行いに一般が行いた。 をおいる でいる いい あい おい はい けい かい おい はい かい	焼成良好 胎土緻密 内面 5PB6/1 青灰 外面 5PB6/1 青灰 断面 5P5/1 紫灰

器種・法量	図版番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
高台付杯D2 口径15.5cm 器高 5.5cm	16-18 (43)	底部は比較的深く 平的にある。になる。 一切を描いないがある。 が大力にはいいでは 上部はれていいがは 上がははいいがは 上がははいいがいがいた。 高底部はく 大きく 大きく 大きく かで接地する。	マキアが・ミズビキ成形。は一部では一部では一部では一部では一部では一部では一部では、一部では、一部では、	焼成甘く軟質 胎土やや粗 内面 10YR8/2 灰白 外面 5Y5/2 灰オリー ブ
高台付杯D3 口径15,5cm 器高 6,4cm	15-13 (7169)	底部は深く平らでなる。口に上外は大いである。口に上部でが、端れていていたがられていいでは、は上げらは上げらいではいいのでは、高部端に内側に上がらわずし、大きく外で接地する。	マキアゲ・ミズダーキ成形。底部外の調整が行なわれ、ナデー調整が行なわれいが行なりませんが行なりませんがである。高台は比りではいる。	焼成良好 胎土緻密 内面 5PB5/1 青灰 外面 5PB6/1 青灰 断面 5RP6/1 紫灰
髙台付杯E1 口径15.7cm 器髙 5.1cm	47 – 14 (13154)	底部は比較ののは ですずかにの がはなるがですが がはて上丸くは がはて上丸くる。 は此が がはてい的 ははから内側して はいが はいが はいが はいが はいが はいが はいが はいが	マキアゲ・ミズ・・ミズ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	焼成良好堅緻 胎土緻密 内面 N5/0 灰 外面 N7/0 灰白 断面 N6/0 灰
髙台付杯E2 口径15.2cm 器高 5.8cm	30-23 (198)	底部は比較的深く 部は上較的深い 部である。は直び気味が 力にはないがける。 ががいた。 がいたははない がいたがいた。 がいたいない がいたいない がいたいない がいたいない がいたいない がいたいない がいたいない がいたい がいた	マキアゲ・ミズビ キ成形。底部外面 は回転へ かわれ、関 をが行なわれ、関 ではいた はいかけい はい でいます がい でいます でいます ない おい おい おい はい	焼成良好 胎土やや粗 内面 5Y7/2 灰白 外面 7.5Y6/1 灰 断面 5Y7/1 灰白

器種•法量	図版番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
高台付杯E3 口径15.4cm 器高 5.0cm	15-11 (791)	底部は比較的に いる。 い外域 のに外域 のに外域 に外方に が、 が、 が、 が、 が、 が、 が、 が、 が、 が、 が、 が、 が、	マキアゲ・ミズ外面は回転へったのでは、本成形のでは、ないでは、ないでは、ないでは、ないでは、ないでは、ないでは、ないでは、ない	焼成良好 胎土やや粗 内面 5PB5/1 青灰 外面 5PB6/1 青灰 断面 5RP4/1 暗紫灰
高台付杯F 口径19.1cm 器高 9.2cm	16-19 (170)	口径は深くいます。 大くないはないのではないがいた。 をいずのではないがいたができる。 ではないがいないができる。 はいかがいたがいがいたがいがいたがいた。 はいかがいたがいがいたがいたがいたがいた。 はいかがいたがいたがいたがいたがいたがいたがいた。 はいがいたがいたがいたがいたが、がいたがいたができる。 はいかがいたがいたがいたがいたがいたが、はいたができる。 はいかいたがいたがいたがいたが、はいたがいたが、はいたがいたが、はいたがいたが、はいたがいたが、はいたがいたが、はいたが、は	マキアゲ・ミスケーミスが、底部りのでは、ないでは、ないでは、ないでは、ないでは、ないでは、ないでは、ないでは、ない	焼成甘く軟質 胎土やや粗 内面 7.5Y7/1 灰白 外面 10Y7/1 灰白 断面 7.5Y6/1 灰
高台付杯G 口径24.1cm 器高 4.9cm	47-15 (5141)	口径は比較のにいる。 は比較のはいる。にS字がとがいる。にS字がのではがないではがいないがいというではないでは、いいではないでは、いいではないでは、いいではないではないではないではないでは、はいいではないではないではないではないではないでは、はいいではないでは、はいいではないでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これ	マキアゲ・ミズ ・ミス ・ミス ・ミス ・ミス ・ミス ・ミス ・ミス ・ミス ・ミス ・ミス	焼成良好 胎土緻密 内面 10Y8/1 灰白 外面 5Y8/2 灰白 断面 5Y8/3 淡黄
杯A 口径9.0cm 器高 2.5cm	22-8 (156)	底部は比較的浅く 平らである。口縁 部は短く直線的に 上外方にのび、端 部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面は回転へラ削り調整が行なわれ、内面ほかは回転ナデ調整が行なわれている。	焼成良好堅緻 胎土緻密 内面 N6/0 灰 外面 N6/0 灰 断面 N6/0 灰

器種・法量	図版番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯B1a 口径12.3cm 器髙 3.6cm	15-1 (708)	底部は比較的浅く 平らである。口縁 部は短く直線的に 上外方にのび、端 部は丸い。	マキアゲ・ミズビ キ成形。底部外面 は回転へラ削り調整が行なわれ、内面ほかは回転ナデ 調整が行なわれて いる。	焼成良好 胎土やや粗 内面 N6/0 灰 外面 5Y6/1 灰 断面 5Y7/1 灰白
杯B1b □径12.2cm 器高 3.3cm	15-5 (75)	Blaに比較してわずかに底部が広く直線的に上外方にのび、端部は丸い。	マキアゲ・ミズビ キ成形。底部外面 は回転へラ削り調 整が行なわれ、内 面ほかは回転ナデ 調整が行なわれて いる。	焼成良好堅緻 胎土緻密 内面 5PB5/1 青灰 外面 7.5Y4/1 灰 断面 N6/0 灰
杯B2 口径13.2cm 器高 3.3cm	15-9 (81)	底部は比較的浅く 平らである。口縁 部は短くなだらか に上外方にのび、 端部は丸い。B1b と比較して口縁部 の傾斜が緩やかで ある。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面は回転へラ削り調整が行なわれ、内面ほかは回転ナデ調整が行なわれている。	焼成やや甘い 胎土粗 内面 7.5Y7/1 灰白 外面 7.5Y6/1 灰
杯C1a 口径12.1cm 器高 3.6cm	15-2 (41)	底部は比較的浅く 平らである。口縁 部は短くわずかに S字状をなして上 外方にのび、端部 は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面は回転へラ削り調整が行なわれ、内面ほかは回転ナデ調整が行なわれている。	焼成良好堅緻 胎土やや粗 内面 5BG5/1 青灰 外面 10BG5/1 青灰
杯C1b 口径13,2cm 器高 3.9cm	23-2 (125)	底部は比較的浅く 平らである。口縁 部は短くわずかに S字状をなして上 外方にのび、端部 は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面は回転へラ削り調整が行なわれ、内面ほかは回転ナデ調整が行なわれている。	焼成良好 胎土やや粗 内面 2.5Y7/2 灰黄 外面 2.5Y6/1 黄灰
杯C1c 口径12.2cm 器高 3.8cm	22-6 (12)	底部はわずかに丸 みを持つ。口縁部 は短くわずかにS 字状をなして上外 方にのび、端部は 丸い。	マキアゲ・ミズビ キ成形。底部外面 は回転へう削り調整が行なわれ、内面ほかは回転ナデ調整が行なわれている。	焼成良好堅緻 胎土緻密 内面 5PB6/1 青灰 外面 N6/0 灰 断面 5P6/1 紫灰

器種・法量	図版番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯C2 口径12.2cm 器高 3.6cm	22-12 (505)	底部は比較的浅く 平らである。口縁 部は短く直線的に 上外方にのび、端 部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面は回転へラ削り調整が行なわれ、内面ほかは回転ナデ調整が行なわれている。	焼成良好 胎土やや粗 内面 5Y7/3 浅黄 外面 5Y6/1 灰
杯D1 口径11.4cm 器高 3.4cm	26-1 (1344)	底部は比較的深く 平らである。口縁 部は直線的に上外 方にのび、端部は 丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面は回転へラ削り調整が行なわれ、内面ほかは回転ナデ調整が行なわれている。	焼成良好堅緻 胎土緻密 内面 N6/0 灰 外面 N6/0 灰 断面 N5/0 灰
杯D2 口径11.5cm 器高 4.2cm	51-4 (13120)	底部は比較的深く、 はぼ平らである。 口縁部はわずかに 弧を描いて上外方 にのび、端部は丸 い。	マキアゲ・ミズビ キ成形。底部外面 は回転へラ削り調整が行なわれ、内面ほかは回転ナデ 調整が行なわれている。	焼成甘く軟質 胎土粗 内面 5Y7/1 灰白 外面 5Y8/1 灰白 断面 5Y8/1 灰白
杯D3 口径11.6cm 器高 4.6cm	15-7 (1335)	底部は比較的深く 丸みを持つ。口縁 部は直線的に上外 方にのび、端部は 丸い。底部にはカ キ目状痕跡が見ら れる。	マキアゲ・ミズビ キ成形。底部外面 は回転へラ削り調整が行なわれ、カキ目痕跡が残る。 内面ほかは回転ナデ調整が行なわれている。	焼成甘い 胎土やや粗 内面 10YR8/1 灰白 外面 5Y8/1 灰白 断面 7.5Y8/1 灰白
杯E1 口径10.8cm 器高 3.5cm	51-1 (143)	底部は比較的深く 平らである。口縁 部はS字状に上外 方にのび、端部は 丸い。	マキアゲ・ミズビ キ成形。底部外面 は回転へラ削り調整が行なわれ、内面ほかは回転ナデ 調整が行なわれている。	焼成良好堅緻 胎土緻密 内面 N5/0 灰 外面 N6/0 灰 断面 N7/0 灰

器種・法量	図版番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯E2 口径13, 2cm 器高 3, 1cm	26-4 (7112)	E1に比較して口径が大きい点が異なる。底部は比較的深く平らである。口縁部はS字状に上外方にのび、端部は丸い。	マキアゲ・ミズビ キ成形。底部外面 は回転へう削り調整が行なわれ、内面ほかは回転ナデ 調整が行なわれて いる。	焼成甘く軟質 胎土緻密 内面 2.5Y7/3 浅黄 外面 2.5Y7/2 灰黄 断面 2.5Y8/1 灰白
杯E3 口径11.8cm 器高 3.4cm	14-14 (13149)	底部は比較的深く 平らである。口縁 部はわずかにS字 状をなして上外方 にのび、端部は丸 い。	マキアゲ・ミズビ キ成形。底部外面 は回転へラ削り調整が行なわれ、内面ほかは回転ナデ 調整が行なわれている。	焼成甘く軟質 胎土粗 内面 5Y7/1 灰白 外面 5Y7/2 灰白 断面 5Y8/1 灰白
杯F 口径14.0cm 器高 3.6cm	32-7 (1393)	底部は比較的深く 平らである。口縁 部は外彎して上外 方にのび、端部は 丸い。	マキアゲ・ミズビ キ成形。底部外面 は回転へラ削り調整が行なわれ、内面ほかは回転ナデ調整が行なわれて いる。	焼成甘い 胎土やや粗 内面 2.5Y6/1 黄灰 外面 5Y5/1 灰 断面 5Y7/1 灰白
短頸螯A 口径 9.1~ 10.0cm	40-1 • 3 (231 • 280)	をるれ、部に部なはに張らのるらは中つ形縁内がする。 が要形基短外内。わめはでさ度る天にみのはに、面短壺態部く方傾体ずら少あやに。井肉をも天傾端を頭形のは直にす部かれなる立差 が厚貼の井斜部な頭形のは直にす部かれなる立差 が厚貼の井斜部なった。井肉をも天傾端を変しる。 をるれ、部に部なはに張らのるらは中つ形縁内がする。 をるれ、部に部なはに張らのるらは中つ形縁内がする。 をるれ、部に部なはに張らのるらは中つ形縁内がする。 をるれ、部に部なはに張らのるらは中つ形縁内がする。 をるれ、部に部なはに張らのるらは中つ形縁内がする。 をるれ、部に部なはに張らのるらは中つ形縁内がする。 をるれ、部に部なはに張らのるらは中つ形縁内がする。 をるれ、部に部なはに張らのるらは中つ形縁内がする。	マキアゲ・ミズ 外の、内、外ではかは回転ナデザンでのではかけなわれている。	(231) 焼焼 や せい 内の 2.5 Y 7 / 1 灰 外面 5 Y 6 / 1 灰 断 5 Y 7 / 1 灰 (280) 焼 出面 7 / 1 灰 (280) 焼 サ 粒 ウ サ ヤ ウ ト ウ ト ウ ト ク

器種・法量	図版番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
<b>短</b> 頸壺B	41-9 • 11	蓋を伴う短頸壺で、	マキアゲ・ミズビ	(152)
口径10.5~	(152 • 164)	薬壺形と呼ばれる	   キ成形。内、外面	焼成良好
11.5cm		形態のものである。	ほかは回転ナデ調	胎土緻密
		頸基部は太く、頸	整が行なわれてい	内面
		部は短く直立気味	る。   る。	N6/0 灰
		に上外方にのび、		外面
		端部は内傾する面		5Y5/1 灰
		をなす。体部最大		断面
		径は、上位に求め		N6/0 灰
		られ、肩の張りは		110, 0 %
		少ない。頸部の高		(164)
		さや立ち上がる角		焼成良好
		度に差異が見られ		胎土やや粗
•		3.		内面
		蓋は、天井が平ら		7.5Y6/1 灰
		で中央に扁平なっ		^.010/ 1 //   外面
		まみを貼付する形		7.5Y5/1 灰
		状のもので、口縁		斯面
		部は天井端から下		7.5Υ6/1 灰
		方に外彎して下が		7.310/1 by
		り、端部は内傾す		
		る面をなす。		
<del></del>		2 m c . 2 3 0		
短頸壺C	32-11 • 13	蓋を伴う短頸盤で、	マキアゲ・ミズビ	(147)
口径13.5~	(147 • 146)	薬形壺と呼ばれる	+成形。内、外面	焼成良好
14.5cm		形態のものである。	ほかは回転ナデ調	胎土緻密
		頸基部は太く、頸	整が行なわれてい	内面
		部は短く外反気味	る。	2.5Y6/1 黄灰
		に上外方にのび、		外面
		端部は外傾する面		5Y6/1 灰
		あるいは丸みをも		断面
		つ。体部最大径は、		2.576/3 にぶ
		中位に求められ、		い黄
		層の張りは少なく		
		なだらかなカーブ		(146)
		を描く。頸部の高		焼成良好堅緻
		さや立ち上がる角		胎士やや粗
		さや立ち上がる角 度に差異が見られ	•	胎土やや粗 内面
				内面
		度に差異が見られる。		内面 5Y5/1 灰
		度に差異が見られ る。 蓋は、天井が平		内面 5Y5/1 灰 外面
		度に差異が見られる。 蓋は、天井が平 らで中央に肉厚の		内面 5Y5/1 灰 外面 5Y6/1 灰
		度に差異が見られる。 蓋は、天井が平 らで中央に肉厚の 宝珠つまみを貼付	S.	内面 5Y5/1 灰 外面 5Y6/1 灰 断面
		度に差異が見られる。 蓋は、天井が平 らで中央に肉厚の 宝珠つまみを貼付 する形状のもので、		内面 5Y5/1 灰 外面 5Y6/1 灰
		度に差異が見られる。 蓋は、天井が平 らで中央に肉厚の 宝珠つまみを貼付 する形状のもので、 口縁部は天井端か		内面 5Y5/1 灰 外面 5Y6/1 灰 断面
		度に差異が見られる。 蓋は、天井が平 らで中央に肉厚の 宝珠つまみを貼付 する形状のもので、		内面 5Y5/1 灰 外面 5Y6/1 灰 断面

器種•法量	図版番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
短頸(直口)壺 口径10.4cm	22-23 (281)	頸基部は大く、頸部は短くに直が、 部は短くにの傾いでは、 緑端をもっては、 を動ををでする。 がでする。 体部最大を経れ、 位に求められ、 の張りは比較的少ない。	マキアゲ・ミズビ キ成形。内、外面 ほかは回転ナデ調 整が行なわれている。	焼成良好 胎土粗 内面 N7/0 灰白 外面 N6/0 灰 断面 5Y7/2 灰白
短頸壺E □径 8.4cm	18-19 (274)	頸基部は太く、頸 部はきわめて短く 直立して上方にの びる。体部最大径 は、上位に求めら れ、肩の張りを ずかに認める。	マキアゲ・ミズビ キ成形。内、外面 ほかは回転ナデ調 整が行なわれてい る。	焼成良好 胎土やや粗 内面 5Y6/1 灰 外面 2.5GY5/1 オリー ブ灰 断面 N7/0 灰白
短頭壺F 口径17.0cm	22-24 (172)	頸基部は太く、頸 部は短く外反して 上方にのび、口縁 端部は短く仕上げ られている。体上が られている。上位 最大径は、上位の まない。 りはほとんど見ら れない。	マキアゲ・ミズビ キ成形。内、外面 ほかは回転ナデ調整が行なわれている。	焼成やや甘い 胎土やや粗 内面 5Y6/1 灰 外面 7.5Y6/1 灰 断面 7.5Y7/1 灰白
短頸壺G □径10.2cm	32-4 (140)	小型の短頸壺で、 頸基部は太く、頸 部はきわめて短く 直立して上方にの びる。体部最大径 は、上位に求めら れ、肩の張りを認 める。	マキアゲ・ミズビ キ成形。内、外面 ほかは回転ナデ調 整が行なわれている。	焼成良好 胎土緻密 内面 N5/0 灰 外面 N6/0 灰 断面 7.5Y5/1 灰

器種·法量	図版番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
長頸壺A 口径12.3cm 器高18.9cm	15-16 (299)	頸基部は比較的細く、頸部は外反して上外方にのび、端部付近で大きく外側に曲げられ、口縁端部は丸く仕	マキアゲ・ミズビ キ成形。体部下位 以下に回転へラ削 り調整、内、外面 ほかは回転ナデ調整が行なわれてい	焼成やや甘い 胎土緻密 内面 2.5Y7/2 灰黄 外面 2.5Y7/3 浅黄
		上類基にらせる。外の体がは、一般のでは、一般の	る。 頸部は体部成形後 口頸部を貼付する。 2 段接合。	断面 2.5Y8/1 灰白
長頸壺B1 口径 6.3cm	48-9 (159)	端面で接地する。 ・	マキアゲ・ミズビ キ成形。	焼成良好 胎土緻密 内面 N6/0 灰 外面 7.5Y4/1 灰 断面 7.5Y6/1 灰
		損のためい。他の、他の、他の、他の、他の、他の、他の、他の、他の、見られない。の。他の、他の、他の、他の、他の、他の、他の、他の、他の、他の、他の、他の、他の、他		

器種・法量	図版番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
長頸壺B2 口径 3.2cm	32-9 (142)	形あくくく近側。沈せ欠で類層な丸といいる。 いいい にらはかのない らりのもうで型部体で端きてからが、見の小っ。 はかい らりのもう がい の はい の はい にん かい にらはか の いっと いい にらはか の いっと いい にらせ か の いっと いい にらせ か の いっと いい にらせ か の いっと いい とりい にらせ か の いっと た しん いい とりい にらせ か の いっと た しん いい とりい にらせ か の いっと た しん いい いい しん いい いい しん いい いい しん いい いい しん いい いい しん いい しん いい しん いい しん いい いい しん いい いい しん いい いい いい しん いい いい いい しん いい	マキアゲ・ミズビキ成形。	焼成良好堅緻 胎土緻密 内面 5Y5/1 灰 外面 2.5Y4/1 黄灰 断面 2.5Y6/1 黄灰
長頸嶽C1 口径 6.9cm	40-7•9 (207•234)	頸基部はは外側では、 はははは、 は、 は	マキアゲ・ミズビキ成形。	(207) 焼成土面 N6/0 灰 外面 5B7/1 明 が7/0 灰 (234) 焼胎土面 2.5Y6/1 灰 所の N6/0 灰 断の N6/0 灰 の の の の の の の の の の の の の の の の の の の
長頸壺C2 口径 5.7cm	22-21 (171)	C1と同様の形状を示すが、やや小型である。	マキアゲ・ミズビ キ成形。	焼成良好 胎土やや粗 内面 10Y5/1 灰 外面 N4/0 灰 断面 7.5Y5/1 灰

器種・法量	図版番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
MLA1 口径12.4cm 器高 1.7cm	39-10 (353)	底部は浅く平らで ある。口縁部は短 くわずかに弧を描 いて上外方にのび る。端部は丸く仕 上げている。	マキアゲ・ミズビ キ成形。底部外面 にはカキ目痕跡を 残す。	焼成良好 胎土緻密 内面 5PB5/1 青灰 外面 5PB6/1 青灰 断面 5B6/1 青灰
MA2 口径13.2cm 器高 1.7cm	48-3 (751)	底部は浅く平らである。口縁部は短くS字状に弧を描いて上外方にのびる。端部は丸く仕上げている。	マキアゲ・ミズビ キ成形。底部外面 には回転へラ削り 調整、ほかは回転 ナデ調整。	焼成甘く軟質 胎土粗 内面 2.5GY7/1 明オ リーブ灰 外面 10Y7/1 灰白 断面 7.5Y6/1 灰
IMA3 口径12.8cm 器高 2.5cm	31 – 18 (585)	底部は浅く丸みを 持つ。口縁部は短 く直線的に上外方 にのびる。端部は 丸く仕上げている。	マキアゲ・ミズビ キ成形。底部外面 には回転ヘラ削り 調整、ほかは回転 ナデ調整。	焼成良好堅緻 胎土やや粗 内面 N5/0 灰 外面 5PB6/1 青灰 断面 5B7/1 明青灰
皿A4 口径13.3cm 器高 2.0cm	31 – 10 (14)	底部は浅く平らである。口縁部は短く直線的に上外方にのびる。端部は丸く仕上げている。	マキアゲ・ミズビ キ成形。底部外面には回転へラ削り 調整、ほかは回転 ナデ調整。	焼成良好 胎土緻密 内面 2.5Y7/2 灰黄 外面 2.5Y6/3 にぶ い黄 断面 N6/0 灰
皿B1 口径15.0cm 器高 2.1cm	26-9 (13117)	底部は浅く平らで ある。口縁部は短 く上外方にのびる。 端部は丸く仕上げ ている。	マキアゲ・ミズビ キ成形。底部外面には回転へラ削り 調整、ほかは回転 ナデ調整。	焼成甘く軟質 胎土粗 内面 2.5Y8/2 灰白 外面 2.5Y7/3 浅黄 断面 2.5Y8/1 灰白

器種・法量	図版番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
MB2 口径21,0cm 器高 3,1cm	31-25 (595)	底部は比較的浅く、 丸みをもつ。口縁 部は短く上外方に 直線的にのびる。 端部は丸く仕上げ ている。	マキアゲ・ミズビ キ成形。底部外面 には回転へう削り 調整、ほかは回転 ナデ調整。	焼成やや甘い 胎土やや粗 内面 N7/0 灰白 外面 5Y7/1 灰白 断面 7.5Y7/1 灰白
IIIC1a 口径17.2cm 器高 2.4cm	26-12 (573)	底部は浅く平らで ある。口縁部は短 くなだらかに上外 方にのびる。端部 は丸く仕上げてい る。	マキアゲ・ミズビ キ成形。底部外面 には回転へラ削り 調整、ほかは回転 ナデ調整。	焼成良好堅緻 胎土緻密 内面 N7/0 灰白 外面 N7/0 灰白 断面 N7/0 灰白
MC1b 口径18.0cm 器高 2.8cm	23-6 (136)	底部は浅くわずかに丸みをもつ。口縁部は短くなだらかに上外方にのびる。端部は丸く仕上げている。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面には回転ヘラ削り調整、ほかは回転ナデ調整。	焼成甘く軟質 胎土緻密 内面 2.5Y8/3 淡黄 外面 2.5Y8/4 淡黄 断面 10YR8/4 浅黄
IIIC2a 口径17.8cm 器高 3.0cm	23-9 (5105)	底部は浅くわずか に丸みをもつ。口 縁部は短く外彎気 味に上外方にのび る。端部は丸く仕 上げている。	マキアゲ・ミズビ キ成形。底部外面には回転へラ削り調整、ほかは回転ナデ調整。	焼成やや甘く軟質 胎土やや粗 内面 2.5Y7/4 浅黄 外面 2.5Y7/4 浅黄 断面 2.5Y8/3 淡黄
皿C2b 口径18.4cm 器高 2.6cm	51-24 (62)	底部は浅くわずかに丸みをもつ。口縁部は短くなだらかに上外方にのびる。端部は丸く仕上げている。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面には回転へラ削り調整、ほかは回転ナデ調整。	焼成甘く軟質 胎土やや粗 内面 10YR8/4 浅黄 橙 外面 2.5Y8/2 灰白 断面 10YR7/1 灰白

器種•法量	図版番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
MC3 口径18.2cm 器高 2.2cm	39-16 (352)	底部は浅く平らである。底部外面にはカキ目調整が行われている。口縁部は短くなだらかに上外方にのびる。端部は丸く仕上げている。	マキアゲ・ミズビ キ成形。マキアゲ・ ミズビキ成形。底 部外面にはカキ目 痕跡を残す。ほか は回転ナデ調整。	焼成良好 胎土やや粗 内面 7.5GY7/1 明 緑灰 外面 5Y7/1 灰白 断面 10Y7/1 灰白
MD1 山径17.1cm 器高 2.1cm	26-11 (7129)	底部は浅く平らで ある。口縁部は短 くなだらかに上外 方にのびる。端部 は丸く仕上げてい る。	マキアゲ・ミズビ キ成形。底部外面 には回転へう削り 調整、ほかは回転 ナデ調整。	焼成やや甘く軟質 胎土やや粗 内面 5PB6/1 青灰 外面 5B6/1 青灰 断面 N7/0 灰白
MD2 口径20.2cm 器高 1.9cm	51 – 22 (7106)	底部はかなり浅く 平らである。口縁 部は短く直線的に 上外方にのびる。 端部は丸く仕上げ ている。	マキアゲ・ミズビ キ成形。底部外面には回転へう削り 調整、ほかは回転ナデ調整。	焼成良好 胎土やや粗 内面 N6/0 灰 外面 N6/0 灰 断面 N7/0 灰白
ME 口径15.2cm 器高 2.4cm	23-8 (167)	底部は浅く平らである。口縁部は短くS字を描いて上外方にのびる。端 部は丸く仕上げている。	マキアゲ・ミズビ キ成形。底部外面には回転ヘラ削り調整、ほかは回転ナデ調整。	焼成やや甘い 胎土やや粗 内面 2.5Y7/2 灰黄 外面 N6/0 灰 断面 5Y6/1 灰
**************************************	36-1 (82)	天井部は低く、わずかに丸みを持つ。 天井部につまみを 伴わない。	マキアゲ・ミズビ キ成形。天井部の は1/2以上に 軽へう削り調整が 行われ、内面ほかはいずれも回転ナ デ調整が行なわれている。	焼成良好堅緻 胎土緻密 内面 N6/0 灰 外面 N5/0 灰 断面 N4/0 灰

器種·法量	図版番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
鉢A □径16.2~ 20.0cm	36-14 (208)	底部は丸く安定を 欠く。口縁部は内 彎して上方にのび、 端部でわずかに段 をなす。	マキアゲ・ミズビ キ成形。	焼成良好 胎土緻密 内面 N6/0 灰 外面 N5/0 灰 断面 7.5Y6/1 灰
鉢B □径18.1~ 23.4cm	32-2 (74)	口縁端部で内側に 曲げられ、外面に 段を認める。外面 全体にヘラ削りに よる丁寧な仕上げ 調整が行なわれて いる。	マキアゲ・ミズビ、キ成形。体部は丁寧にヘラ削り調整。	焼成良好堅緻 胎土やや粗 内面 N6/0 灰 外面 5P6/1 紫灰 断面 2.5Y7/1 灰白
鉢C □径19.3cm	40-5 (277)	底部は失われているが、口縁部は上外方にのび、口縁 端部は内傾する面をなす。 瓦質で り、須恵器として よいかどうかは問題がある。	マキアゲ・ミズビ +成形。	焼成良好 胎土やや粗 内面 5Y6/1 灰 外面 5Y6/1 灰 断面 5Y5/1 灰
椀 口径11.5cm	48-8 (157)	底部を欠損しているが、状況のと部に近れる。体別のと部はに近れる。外反はのちのちのちがする。なが、口縁端のはないは、丸くは上げられる。	マキアゲ・ミズビ キ成形。 体部下位から底部 には回転ヘラ削り 調整が行なわれて いる。	内面 N5/0 灰 外面 N5/0 灰 断面 N6/0 灰

## 第4章 考察

### 1、遺跡

#### ・窯の構築方法とその順序について

既に窯跡については記述してきたが、とくにその立地条件から窯体の構築方法について考えてみたい。まず立地条件から明らかに地下式構造すなわちトンネル状に丘陵を掘りぬいて構築されたと考えられるのは、3号窯および5-II号窯の2基である。また残存状況から、半地下式あるいは地上式と見られるのは2号窯、4号窯の2基であり、5号窯についてはいずれとも判断が困難であるが、地下式である可能性は薄いと考えられる。

丘陵地形の状況から見て、最も上位に位置していた窯は2号窯であったが、その残存状態はきわめて悪く、わずかに焚口部分と燃焼部の下位を残すのみであった。検出状況が近似していたのは、4号窯であるが、2号窯よりは残存部分が多く見られた。なお2号窯検出段階で上位に灰層が堆積していたことを考え合わせると、上位部分に異なる窯が存在していた可能性がある。すなわち丘陵部分が少なくとも、2号窯が検出段階された現状の標高からは窯が構築できる程度は高かったということになろう。また4・5号窯では灰層は確認されていない。さらに5−Ⅱ号窯は内部に灰層が充満された状態で検出された。これらがすべて上位に位置する5号窯に伴うものとは考えられず、おそらく異なる窯の存在を推定せざるを得ない状況である。

このようにかつて存在したということが推定される背景には、もう一つの要件がある。すなわち その要件とは、窯に付属して検出された前庭部土坑の存在がある。この土坑内部には灰層と多数の 須恵器が充満しており、それらが意識的に配置されたと見られない状況であったことから、当該土 坑は、ほかの窯に伴って検出されているものと同様、窯に付属する可能性が濃いと考えられる。と すると、その存在は明らかにその検出部分から、上層部分に窯本体が位置していたことを物語って いるとして大過ないだろう。この推定に問題がないとすれば、かつて2号窯の北部に1基、5号窯 の南に1基の窯の存在が考えられるのである。

さて現状で確認された窯について、灰層の堆積状況や窯の位置関係などから操業順位を見ると、まず最も先行するのは 3 号窯であり、 $5-\Pi$  号窯についても 3 号窯との前後関係の確認が出来ないが、先行するものと考えられる。また 5 号窯と  $5-\Pi$  号窯では明らかに  $5-\Pi$  号窯が先行する。

さらに2号窯、4号窯は3号窯より後出段階のものである。4号窯と5号窯では前者の灰層が後 者の上位に見られたことから、明らかに5号窯が先行していることが判る。2号窯と4号窯の時期 的な前後関係は明瞭ではないが、少なくとも灰層の関係からは前者が後出段階と見られる。

このように見てきた前後関係を整理すると、まず3・5-II号窯が操業し、ついで5号窯、さらに4号窯、2号窯の順となろう。すなわち最も先行するのは3・5-II号窯であり、2号窯が最も新しい段階に操業していたと考えられる。これらを注意深く見ると、窯の標高の高いものが新しく、低い位置にあるものが古いという結果となった。この推定に従うと、既述の土坑の存在から推定した窯については、当該調査対象地域で最も新しい時期の窯であった可能性も十分あると考えられる。

#### 2、遺物

出土遺物の観察についてはすでに記述してきたが、それらの出土状況からの問題については触れていなかった。また須恵器生産の窯体内での配置を効率的にするための方策である製品の窯詰め方法についても出土遺物の検討からある程度は推定できる。これらの点については、置台の存在や重ね焼きの状況を見ることによって果たされる。

まず置台については、窯体内の床面に粘土塊を配置し、その上部に製品を詰めていく馬爪と通称されるものがある。これらは窯の床面傾斜が急なため、全くそれらが設置されていなければ製品の安定が図れない。牛頸窯では8~9世紀の比較的古い時期からこの方法を採っており、おそらくは全国的にも先行する地域ではないかと考えられる。ただしこれらの粘土塊は多くの場合、床面の旧位置から下方に落下して、燃焼部床面に固まって確認されることが多い。当該地域の場合もその例に従って、下方に崩落状況でまとまって検出されている。なおこの状況の例は3号窯の段階で見られる。さらに灰原からも量的には少ないが、馬爪状粘土塊が確認されている。しかしそれらがどの窯から排出されたのかは明らかにできなかった。

置台は、床面の傾斜部分に焼成前の製品を安定させるために用いられる補助的な道具とすることができる。記述の馬爪状粘土塊は、窯そのものに付属する固定的な補助具あるいは施設の一部と見ることができる。一方、須恵器そのものを加工して、その用途に用いた例も今回の調査では検出されている。図50に示したものがその例である。これらは当該窯で最も多く焼成されていた蓋あるいは杯を転用したものである。大半のものは転用を示すかのごとく円孔が穿たれており本来の機能は

果たせない状態になっている。さらにこれらは十分に焼成されて焼固しているものではなく、比較的焼成度合いのゆるやかな軟質なものが多い。器形で最も多く見られたのは蓋杯の蓋であり、中央のつまみ部分を除去して穿孔したものや端部に円孔を穿ったものなどが見られた。また杯の底部中央に孔を穿った例や、高台を伴う杯身の中央に孔をうがったものなどが見られた。いずれもその円孔の径は大小さまざまであり、一定の規則性は認められない。なおその出土量は多くはなく、果たして従来からいわれているように置台あるいは窯道具であるのかどうかは今後の類例の増加を待たねばならない。

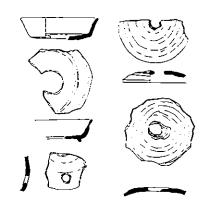


図50 置台

#### 重ね焼きを巡って

重ね焼きとは、窯詰めの際に同じあるいは異なる器種を積み重ねて配置するものであり、大抵の窯で用いられている方法である。その組み合わせは、蓋杯のセットで重ねられているものが最も多く見られ、そのほかに皿あるいは杯の同じ形態のものが重ねられている場合などがある。またそれらの重層個数は、蓋・杯・蓋・杯の4個分あるいは、皿、蓋、杯がランダムに7個みられるもの、さらには蓋のみが4個見られるものなどがある。重ねられた状態で出土しているものは120点で、全体の遺物出土量からは極めて少ない。また重ねられた個数は、2個一53点、3個一44点、4個一

16点、5個-3点、6個-1点、7個-2点、8個-1点である。

これらの諸例から明らかになるのは、蓋杯、杯、皿という、いずれも小型の器種に限定されていることである。小型の器種は、窯での生産品の中では量的に最も多いものであるが、床面積に限りがある以上、それらを効率よく焼成しようとすると、自ずから重層させて配置せざるを得ない。この条件を満たすために採られた処置が重ね焼きである。この検討は、窯での生産量の確認にもつながる問題である。しかし重ね焼きの情報しかなく、その残存状況から床面配置までは確認できなかったので、生産量の推定はできない。

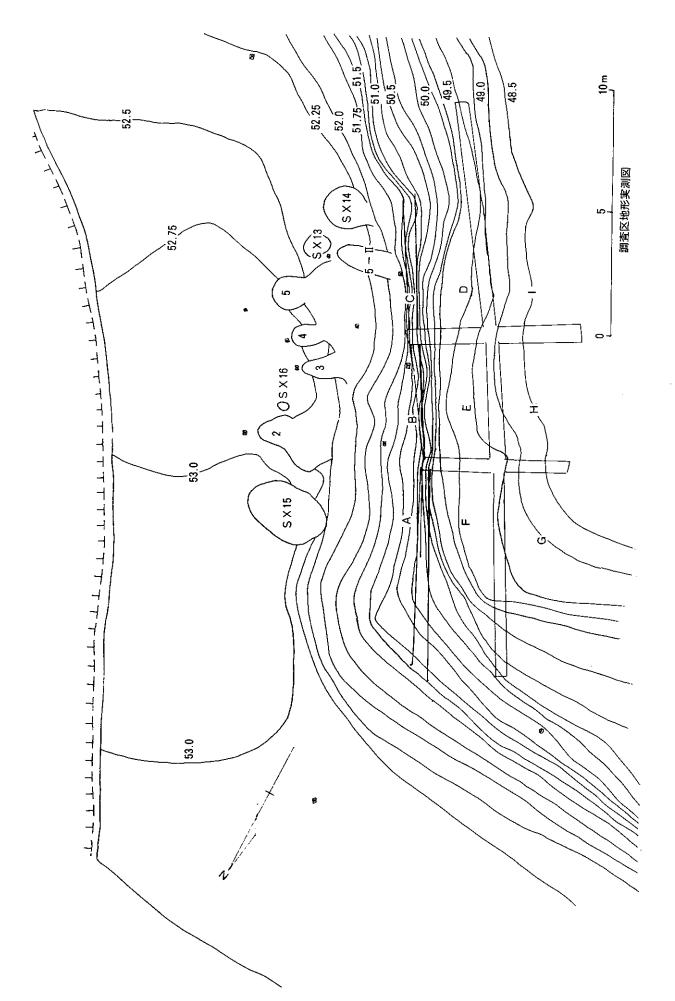
と**もあれ今回の調査で確認しえた重ね焼きの形状と、それらが採集された位置とについて示して** おきたい。

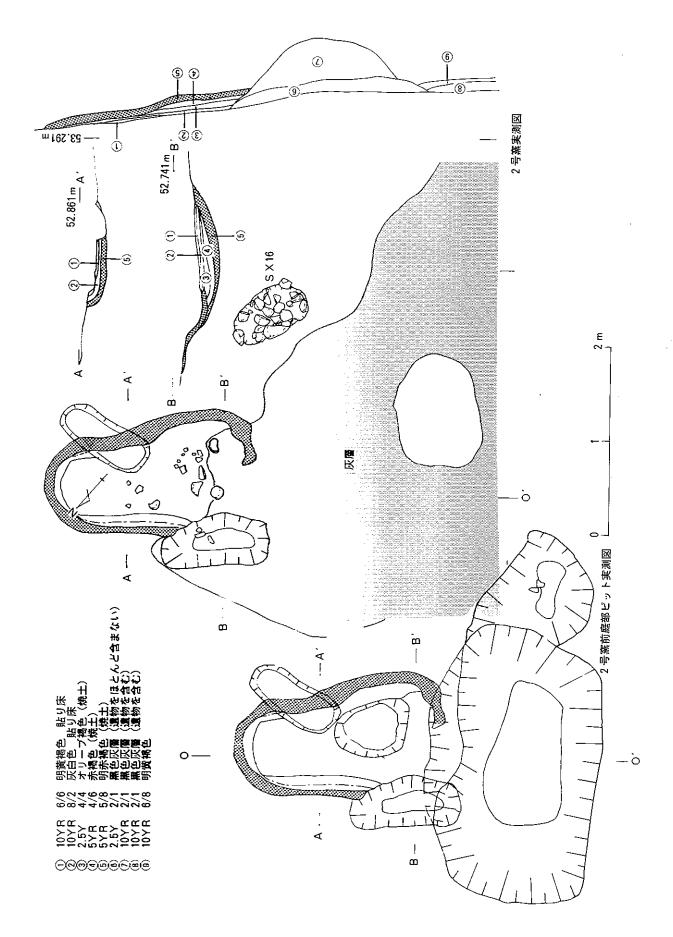
表 1 重ね焼き遺物出土遺構一覧

出土地区(遺構)	出土層(位置)	出土点数
2 号窯	窯体内C区右	1
3号窯	窯体内埋土中	3
S X 14	埋土中	2
S X14	土坑内	1
S X 15	埋土中	1
2 号窯灰原	B区灰原	18
4 号窯灰原	B区灰原	4
5 号窯灰原		1
5-Ⅱ号窯灰原	黒色灰層	1
灰原A-B間縦断セクション	黒色灰層	9
灰原A-B間縦断セクション	下層黒色灰層	1
灰原A区	灰層	1
灰原B区	灰層	2
灰原C区	灰層	8
灰原C区	黒色灰層	6
灰原D区	黒色灰層	7
灰原D区	上層灰層	7
灰原E区	黒色灰層	13
灰原E区	灰層	2
灰原F区	黒色灰層	6
灰原F区	灰層	6
灰原F区	赤褐色灰層	2
灰原G区	黒色灰層	13
灰原H区		1
灰原I区	灰層	3
灰原灰層	1	1

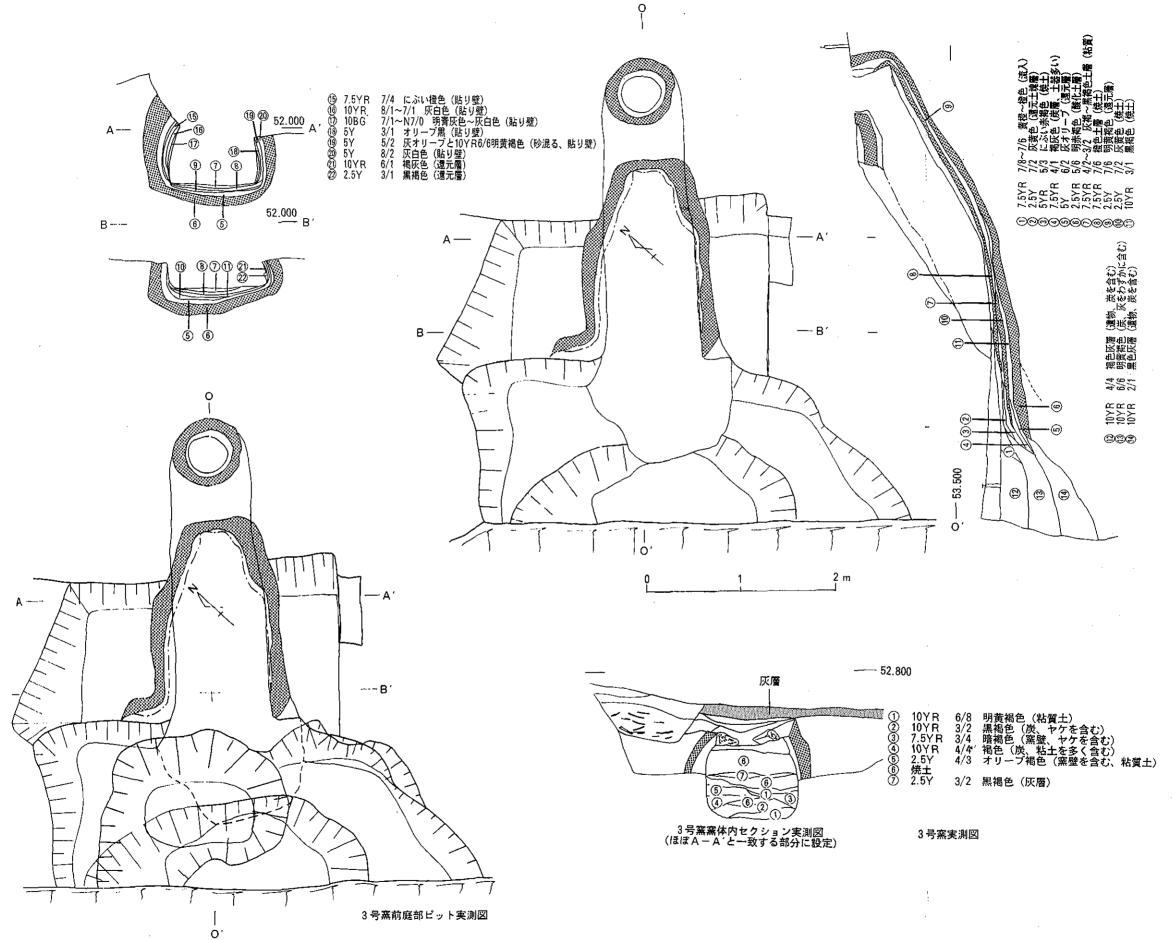
# 図 版

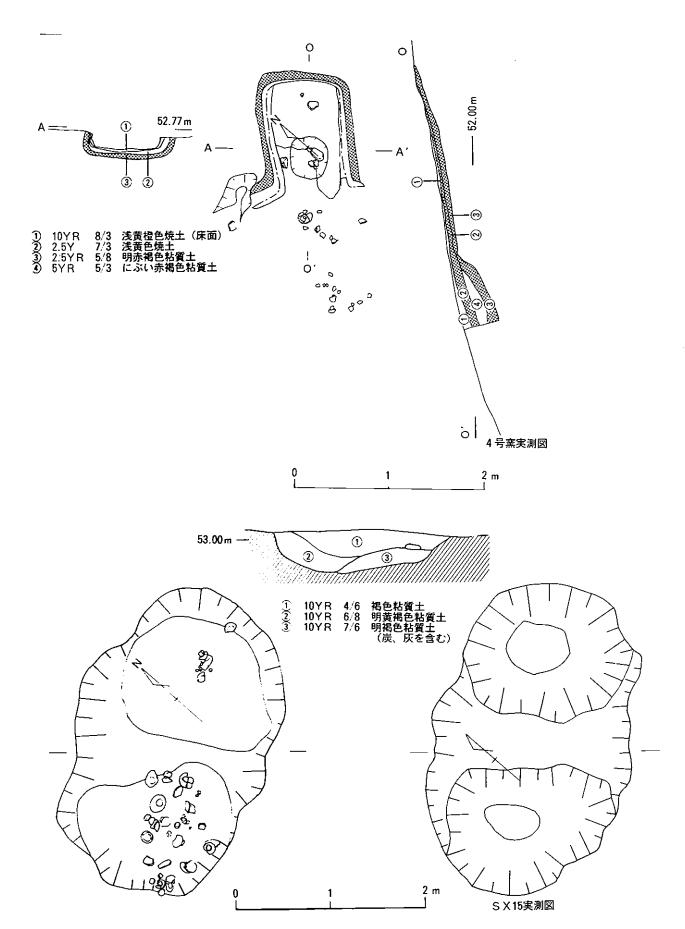


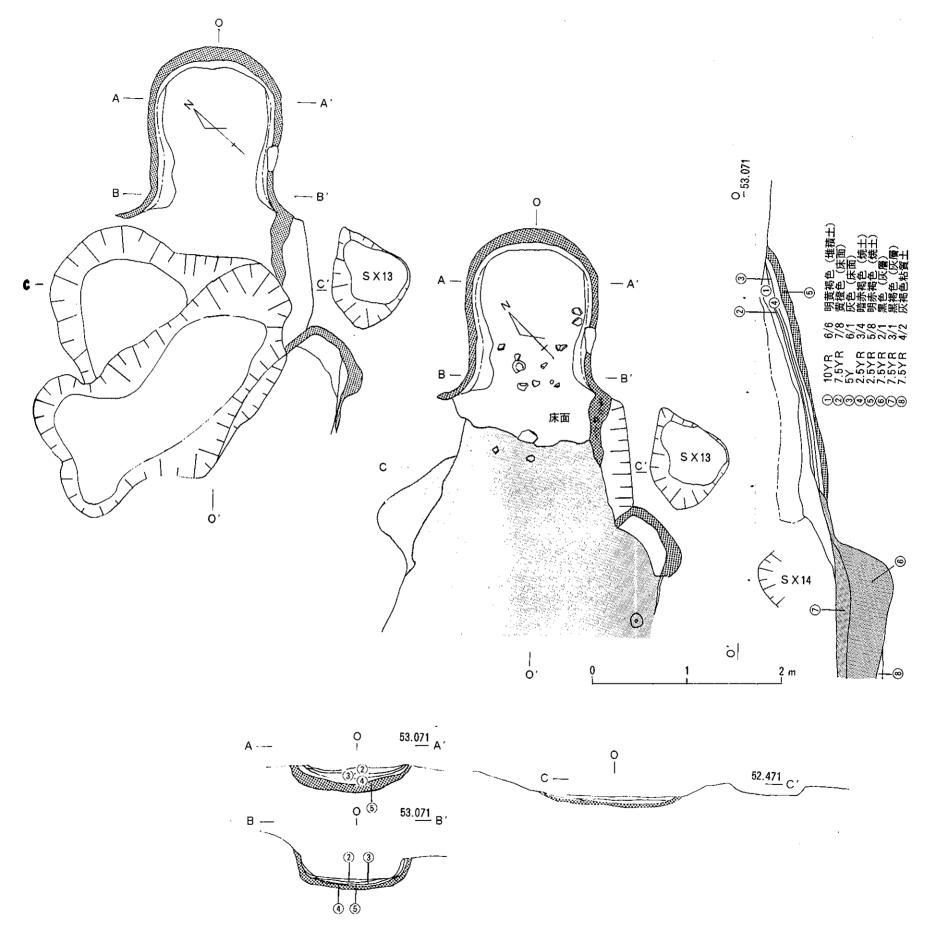


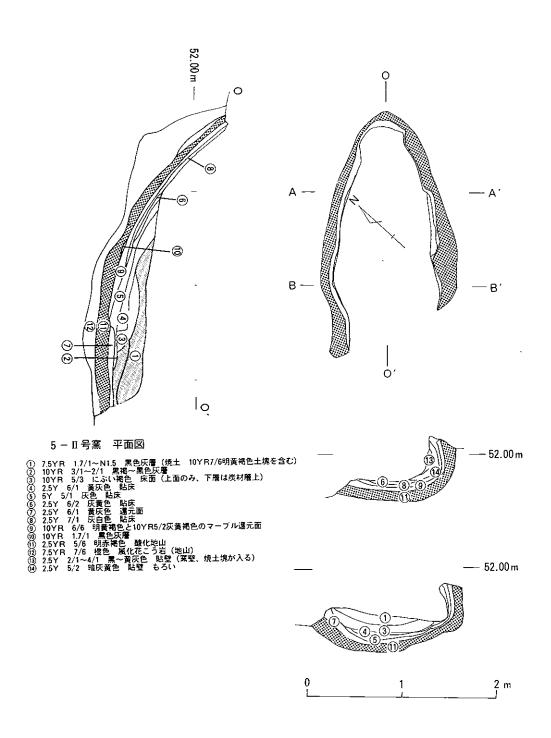


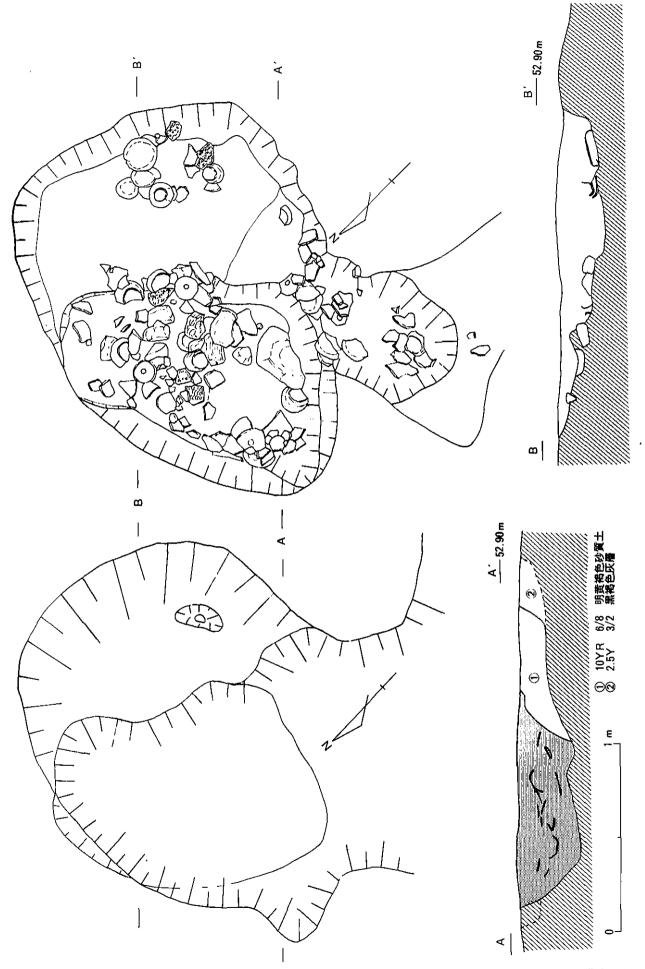
2号窯・SX16遺構実測図



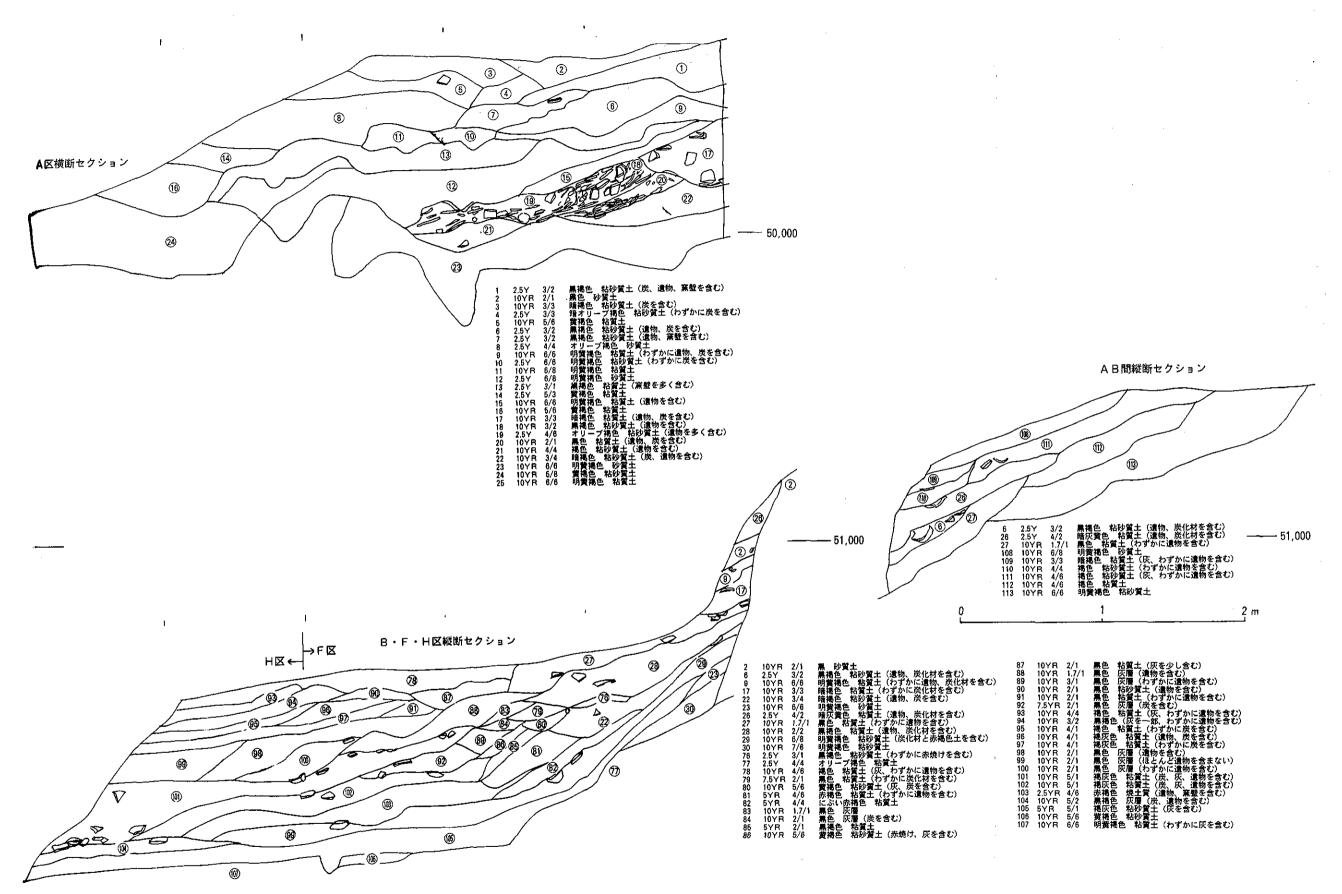


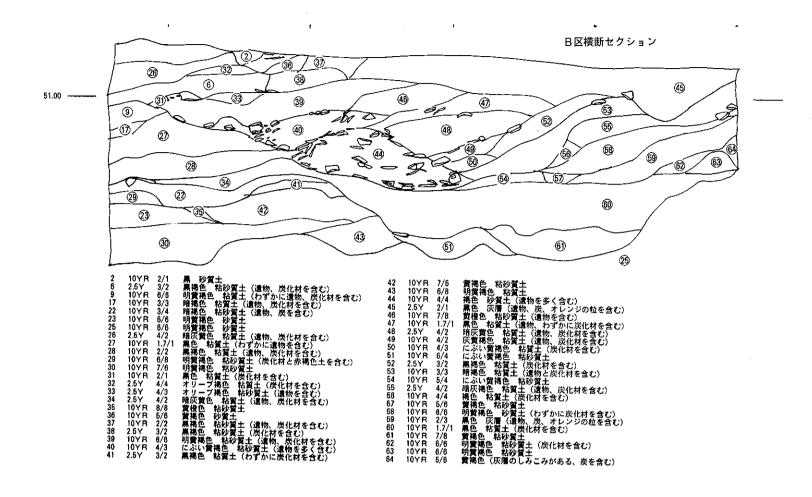


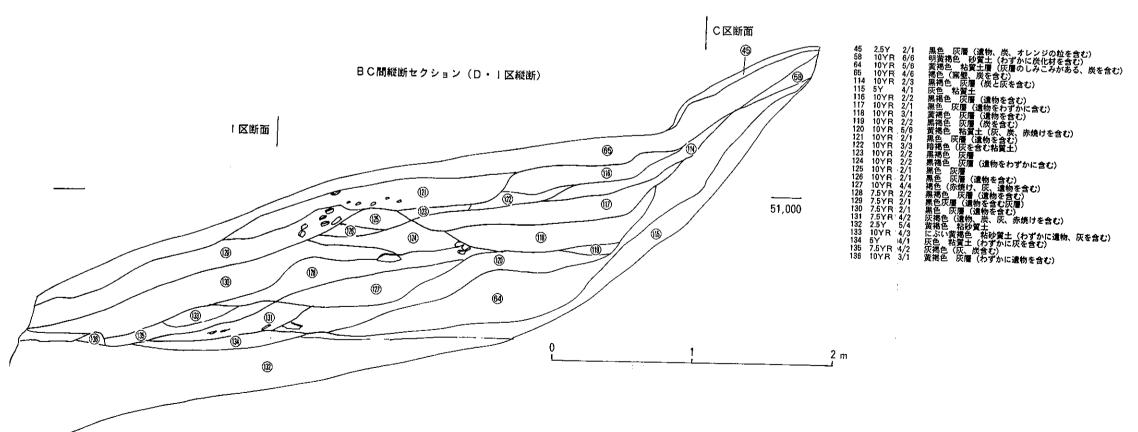


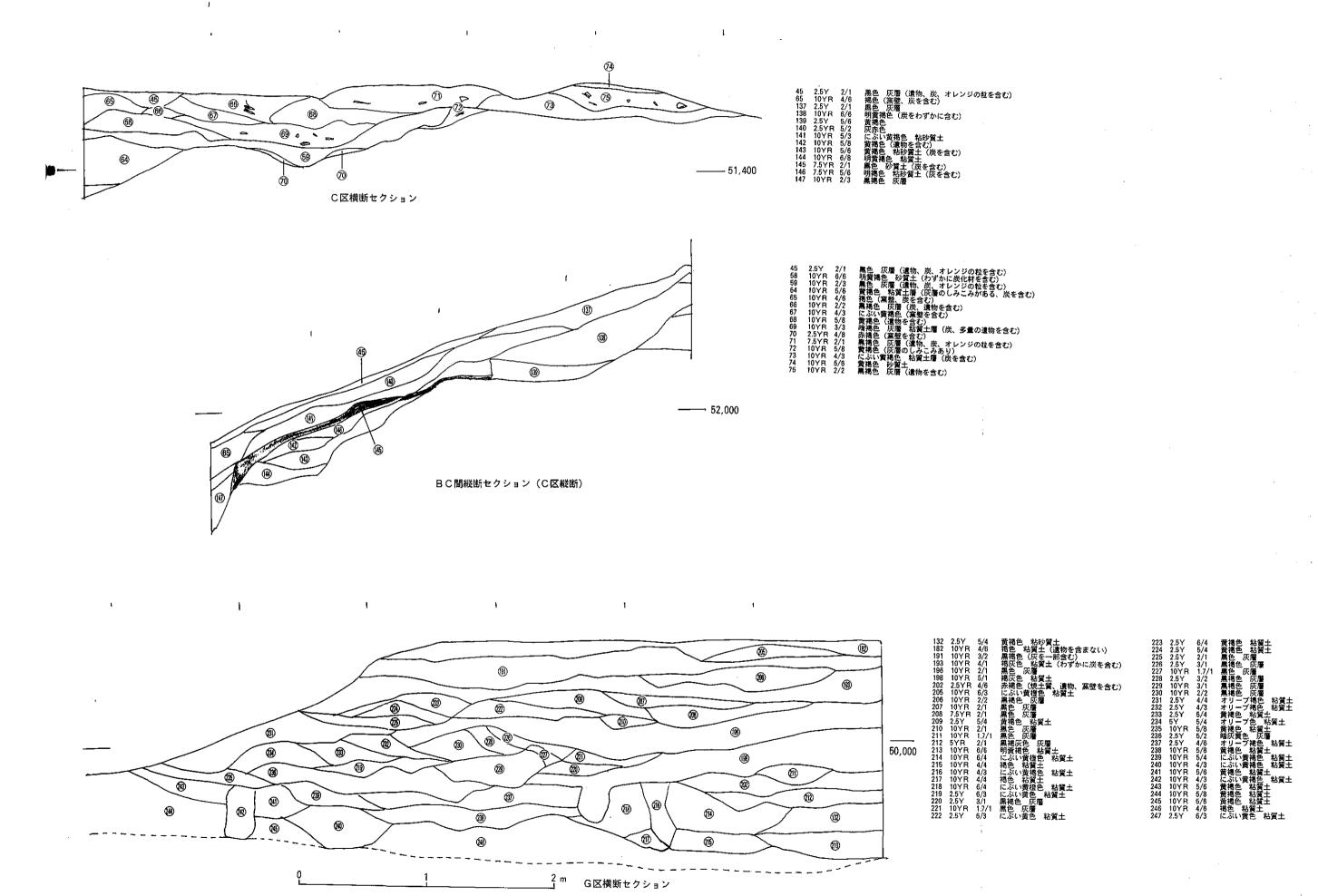


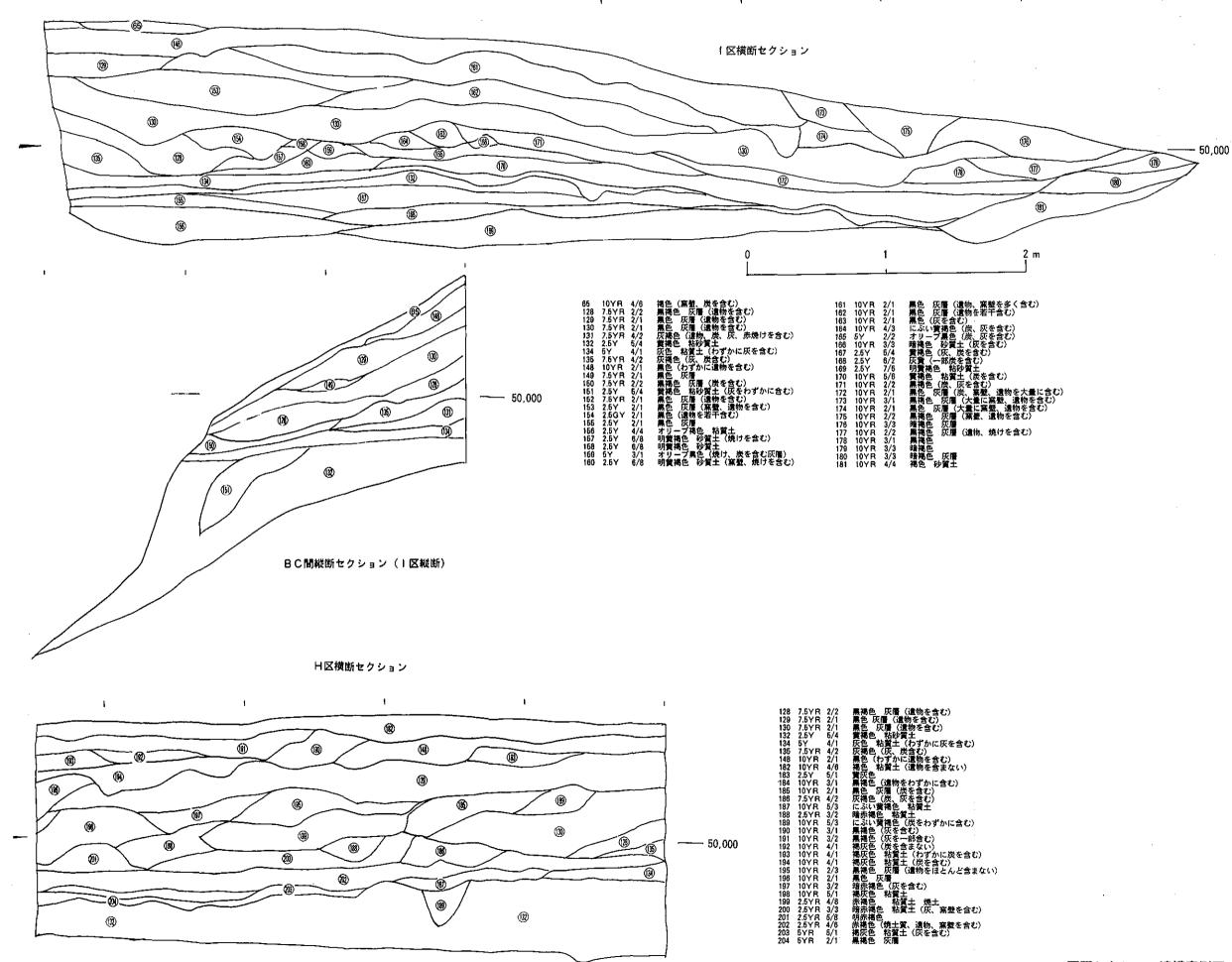
S X 14 遺構実測図

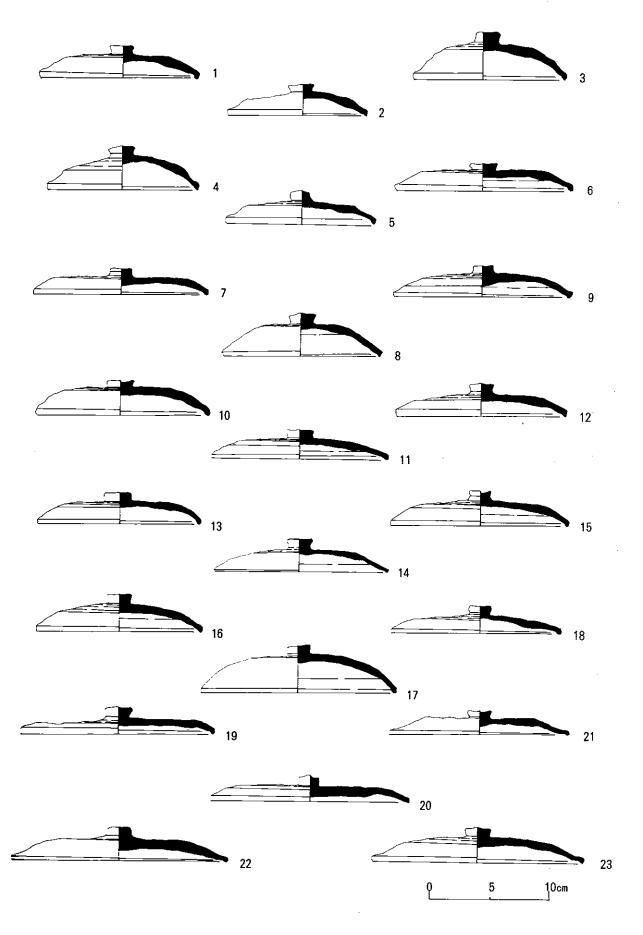




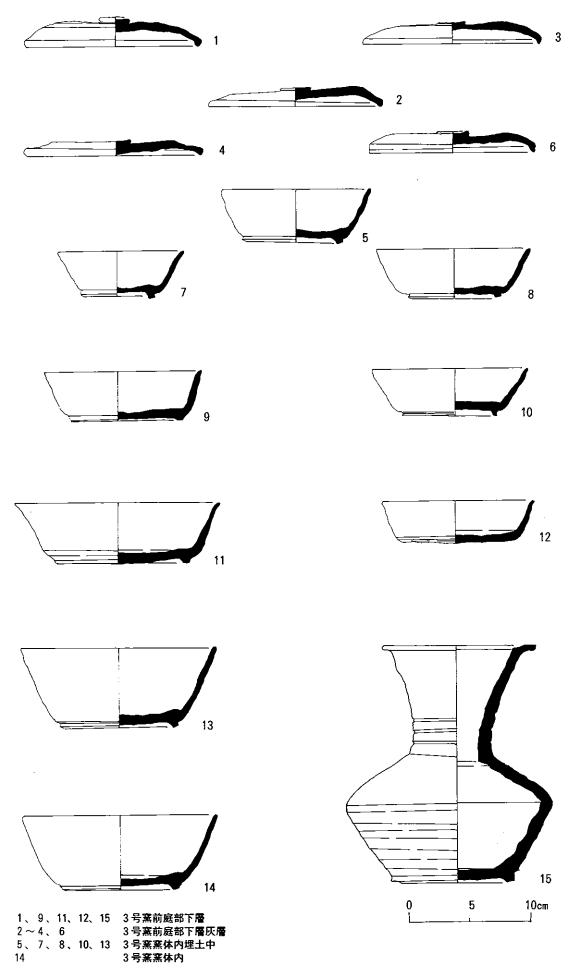




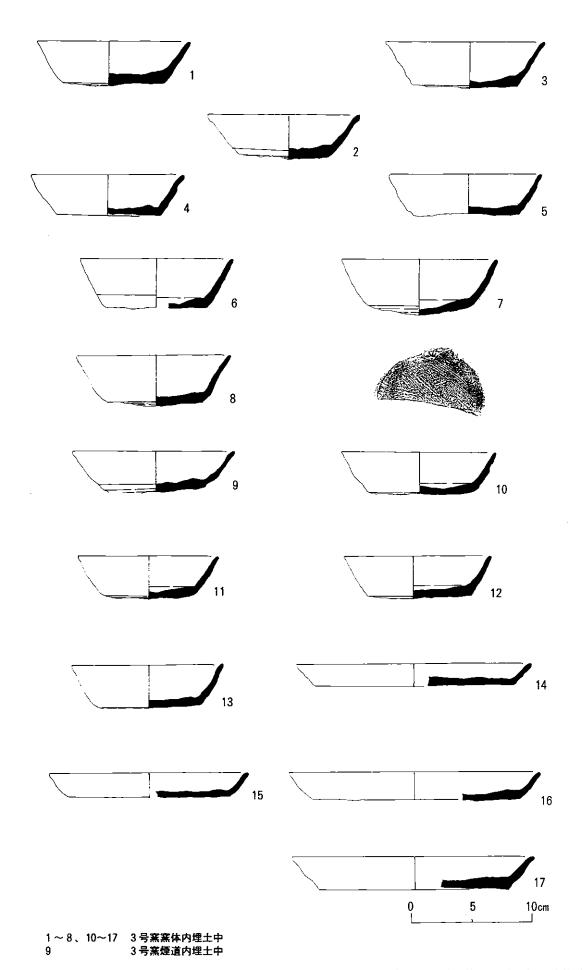




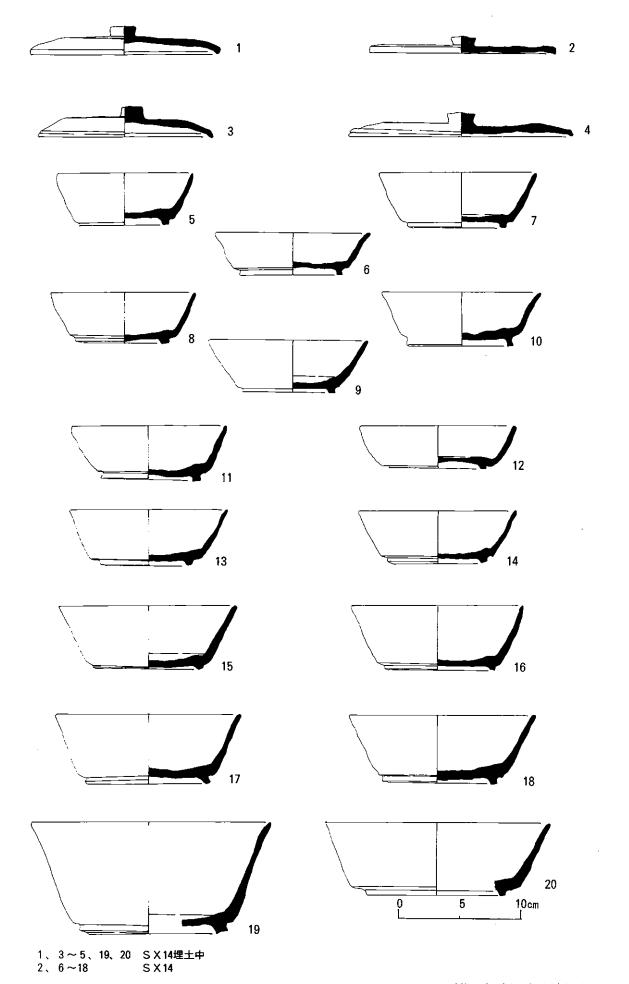
1~23 3号窯窯体内埋土中



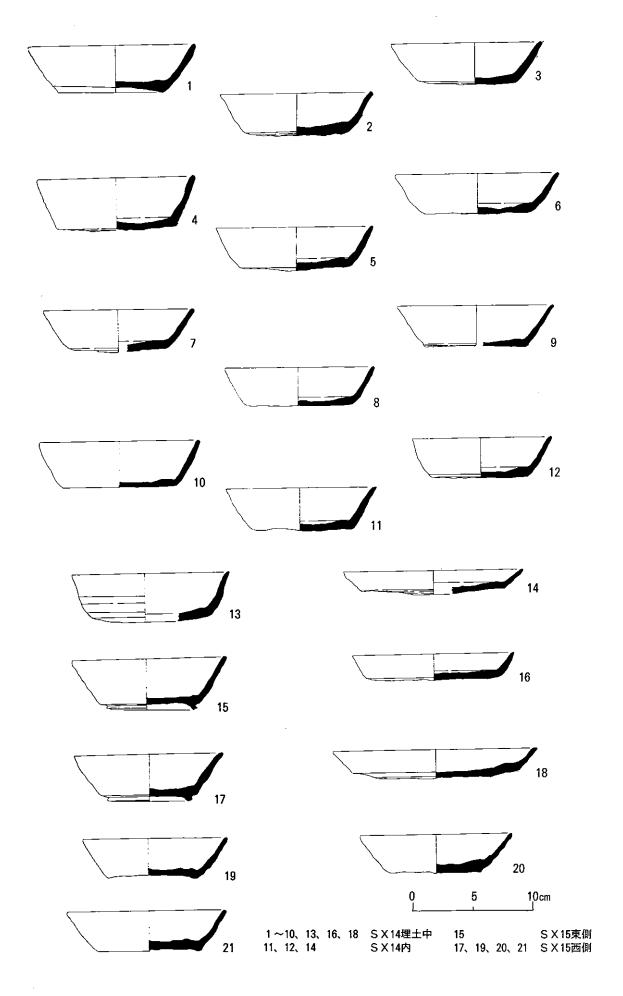
3号窯前庭部(蓋杯、壺)出土遺物実測図



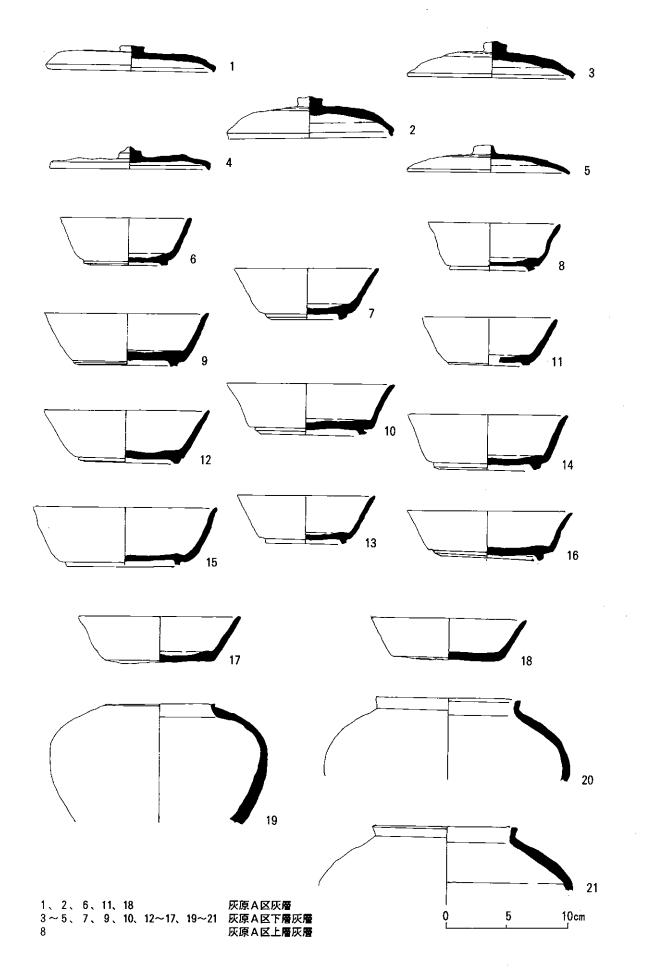
3号窯窯体内埋土中(杯、皿)出土遺物実測図



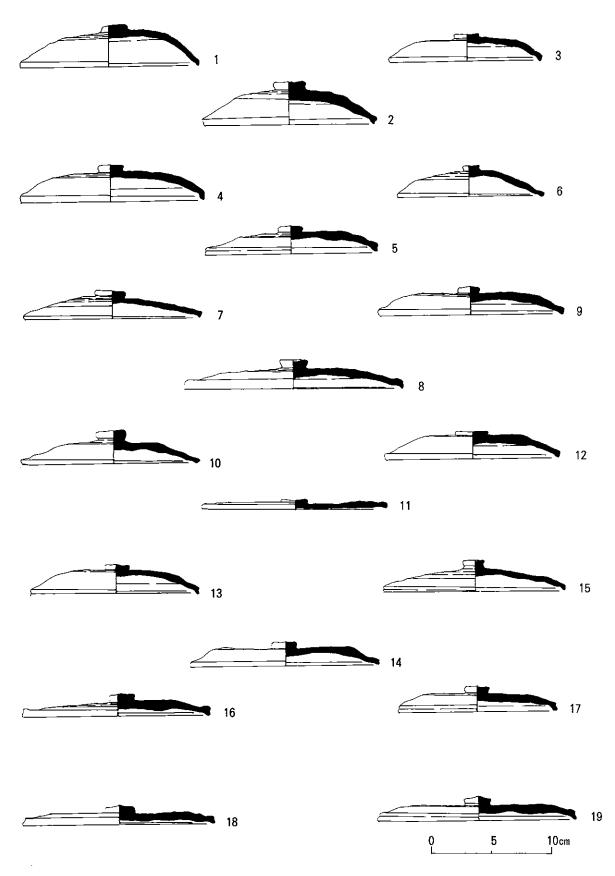
S X 14 (蓋、杯身) 出土遺物実測図

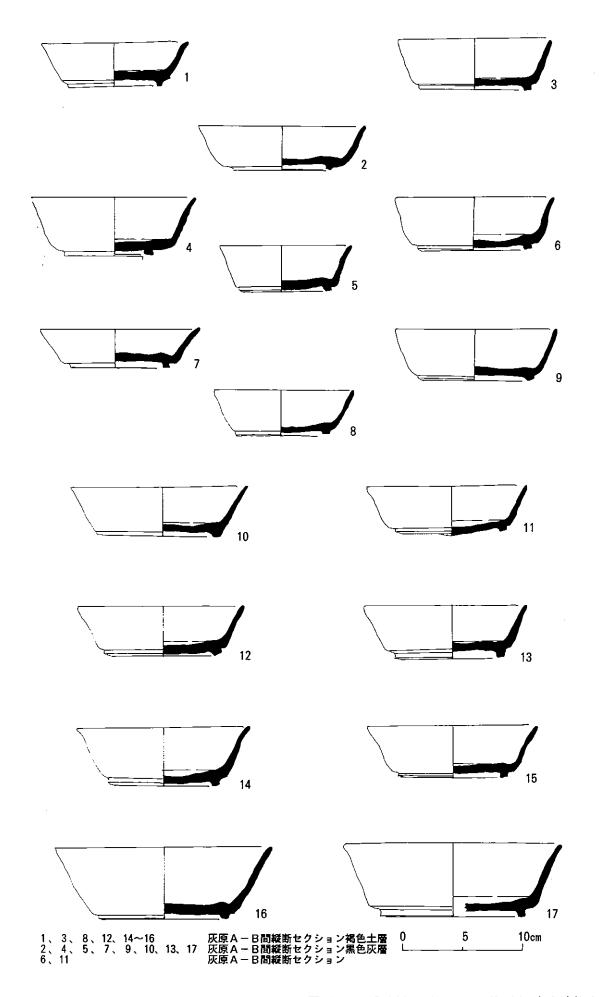


S X 14 (杯、皿)・S X 15 (杯身) 出土遺物実測図

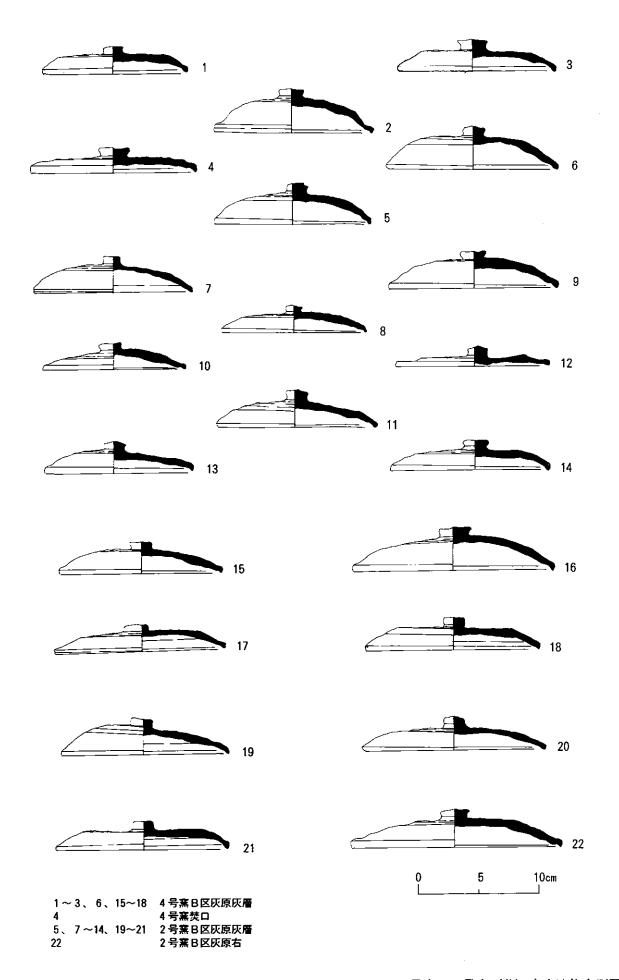


灰原A区(蓋杯、杯身、杯壺)出土遺物実測図

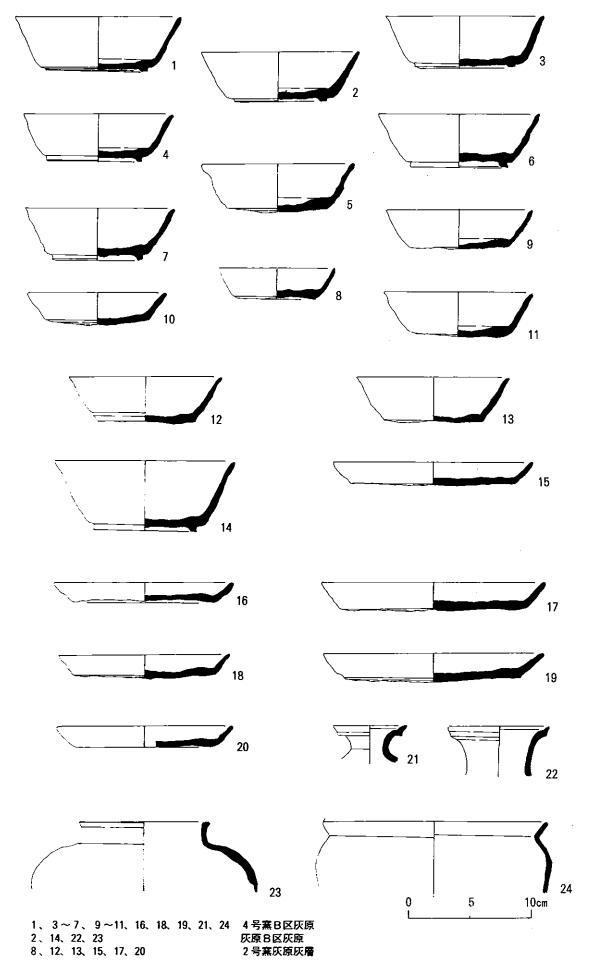




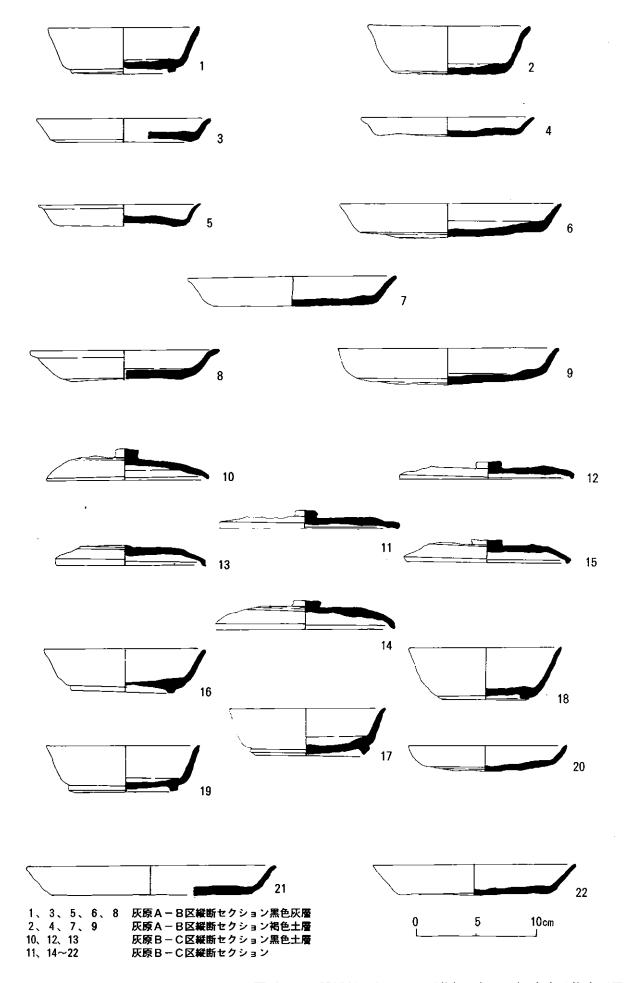
灰原A-B間縦断セクション(杯身)出土遺物実測図



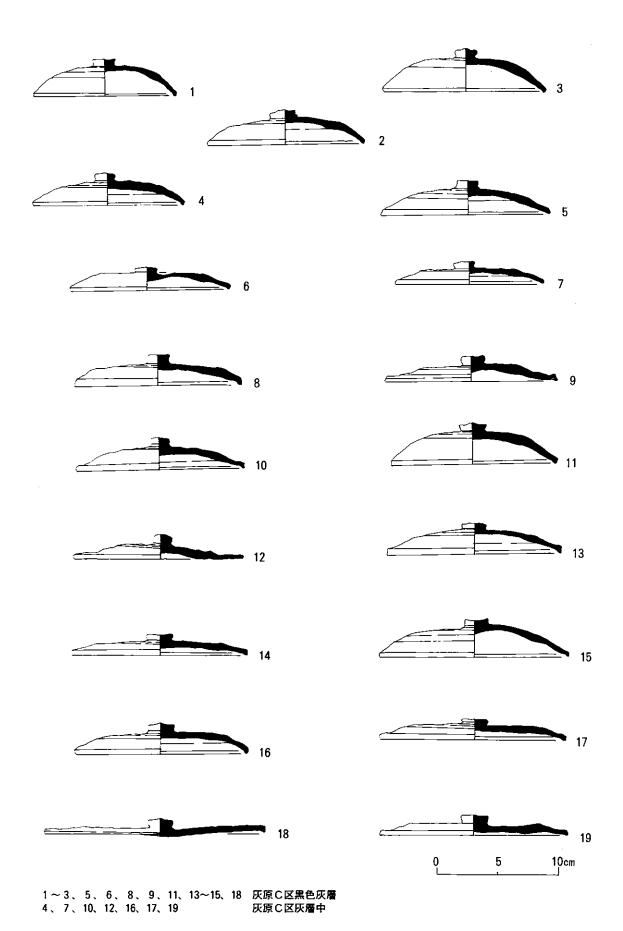
2号窯・4号窯(蓋)出土遺物実測図



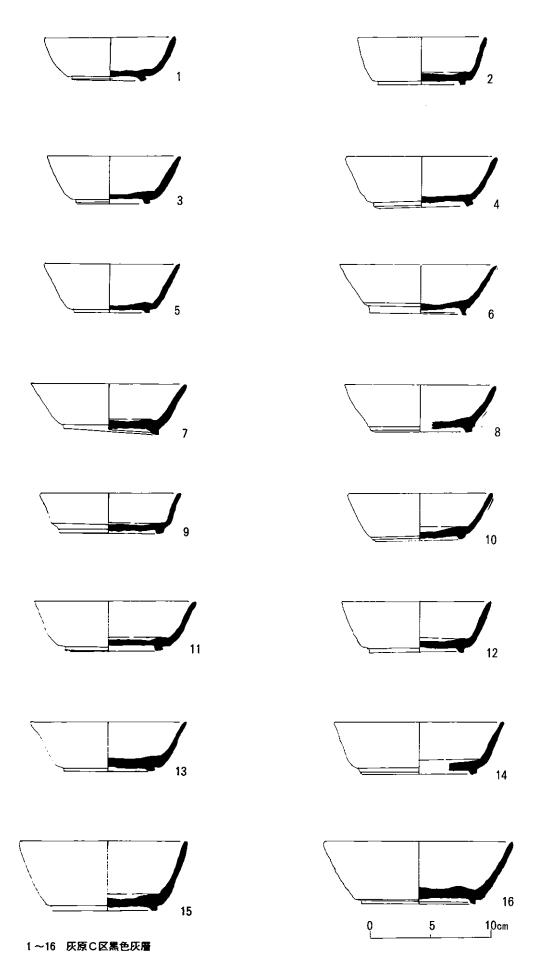
灰原B区(杯身、皿、他)出土遺物実測図



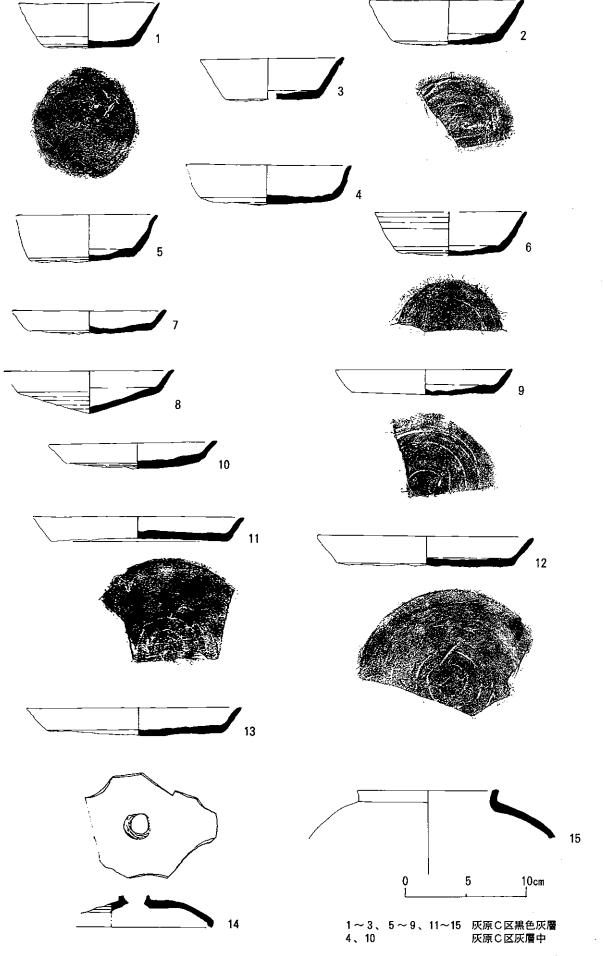
灰原B-C間縦断セクション(蓋杯、杯、皿)出土遺物実測図



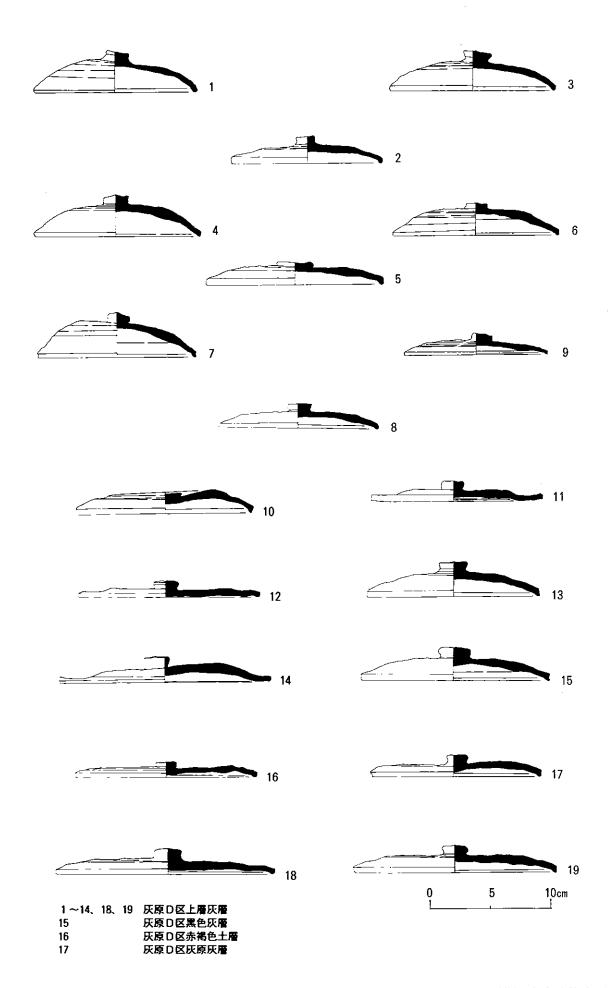
灰原C区(蓋)出土遺物実測図



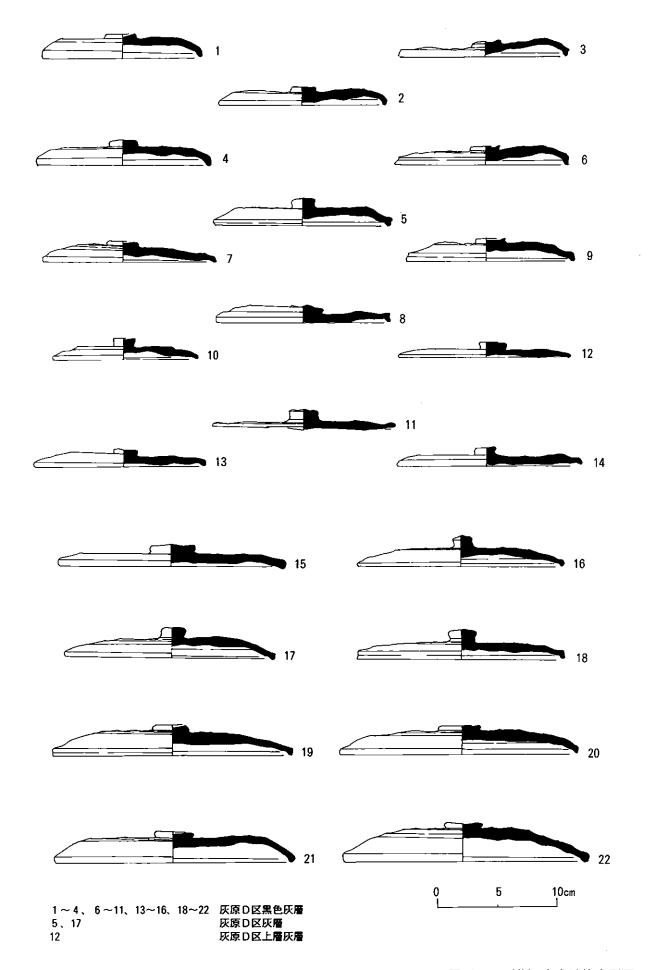
灰原C区(杯身)出土遺物実測図



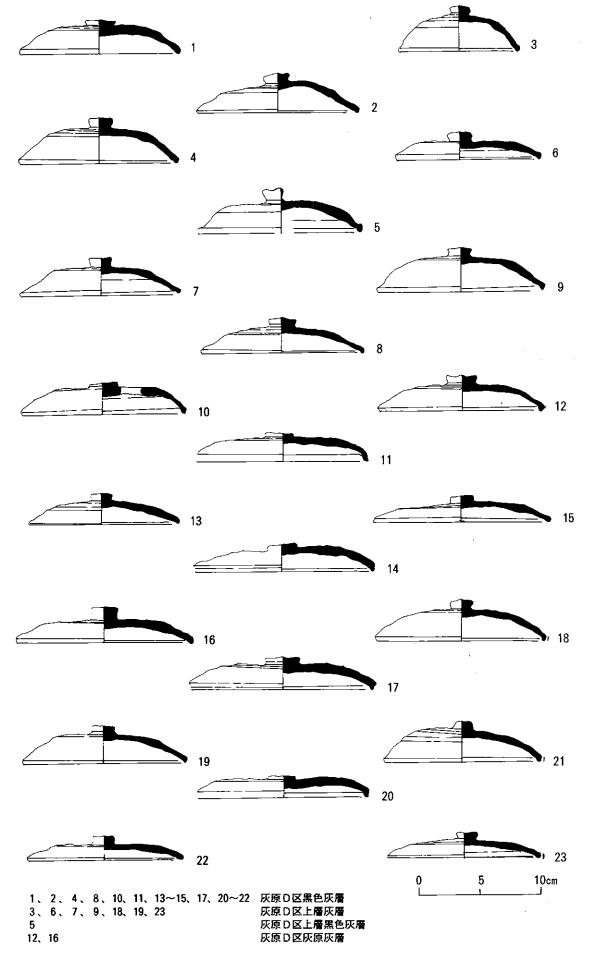
灰原C区(杯、他)出土遺物実測図



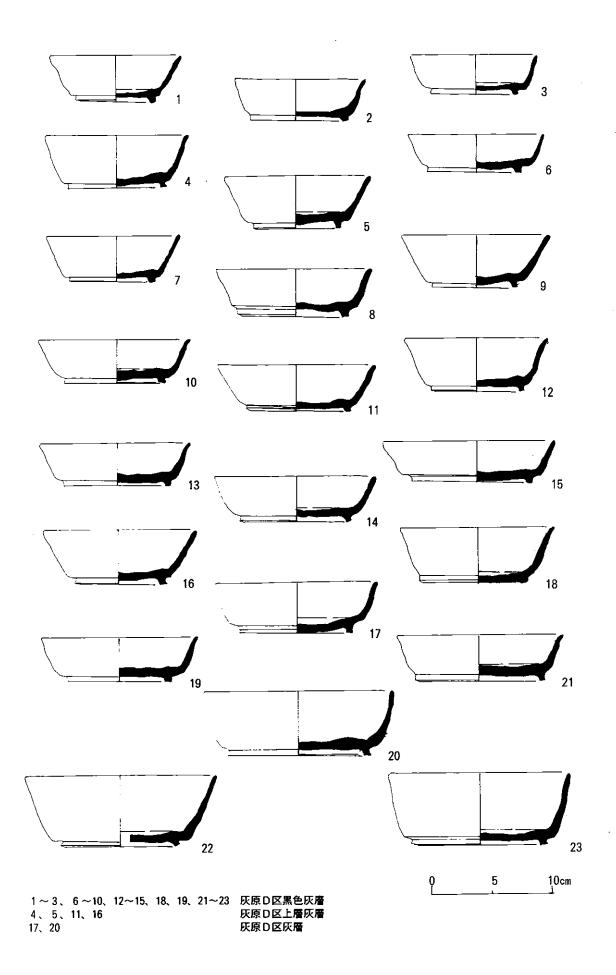
灰原D区(蓋)出土遺物実測図

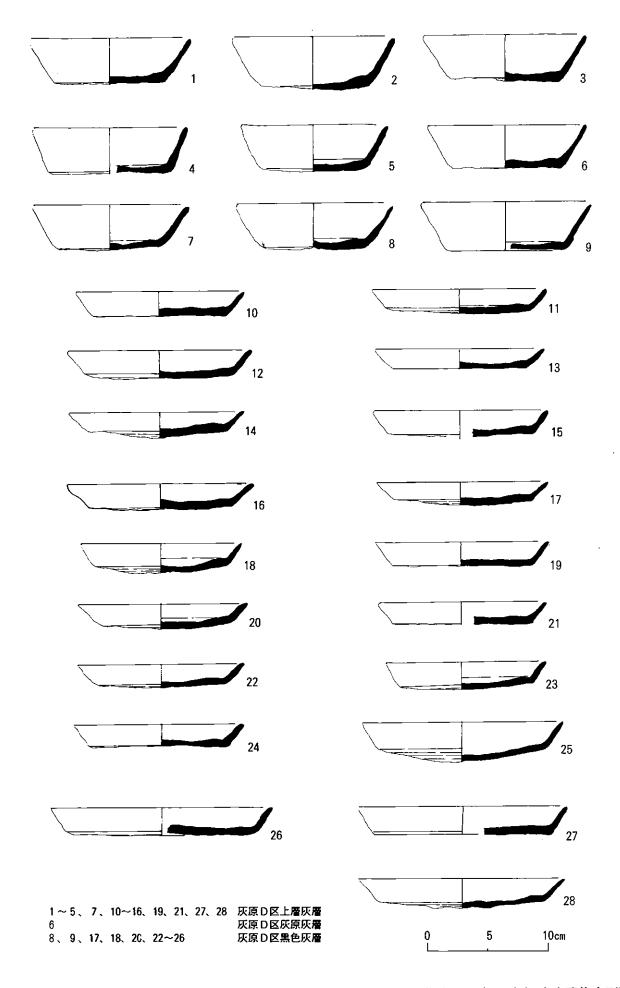


灰原D区(蓋)出土遺物実測図

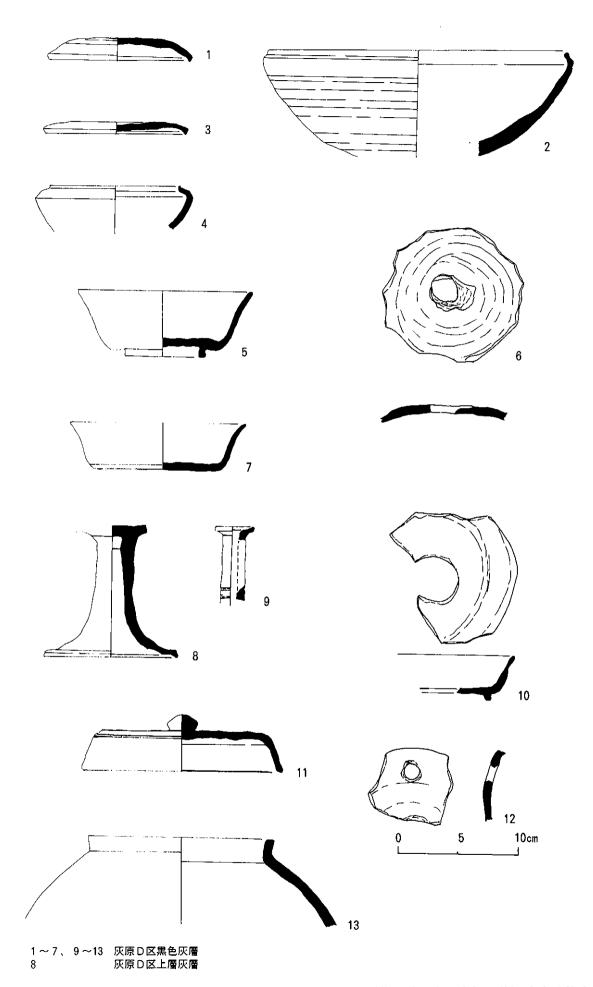


灰原D区(蓋)出土遺物実測図

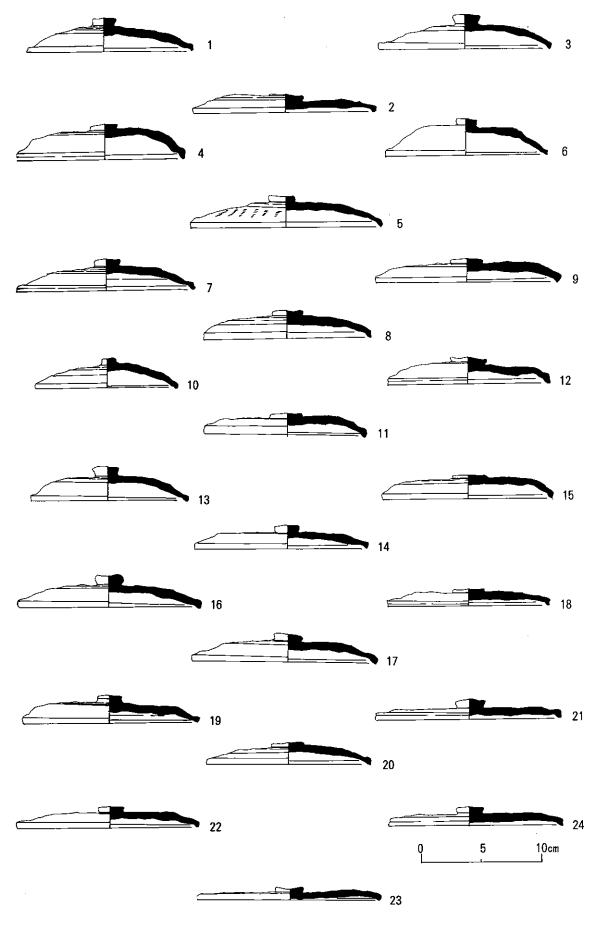




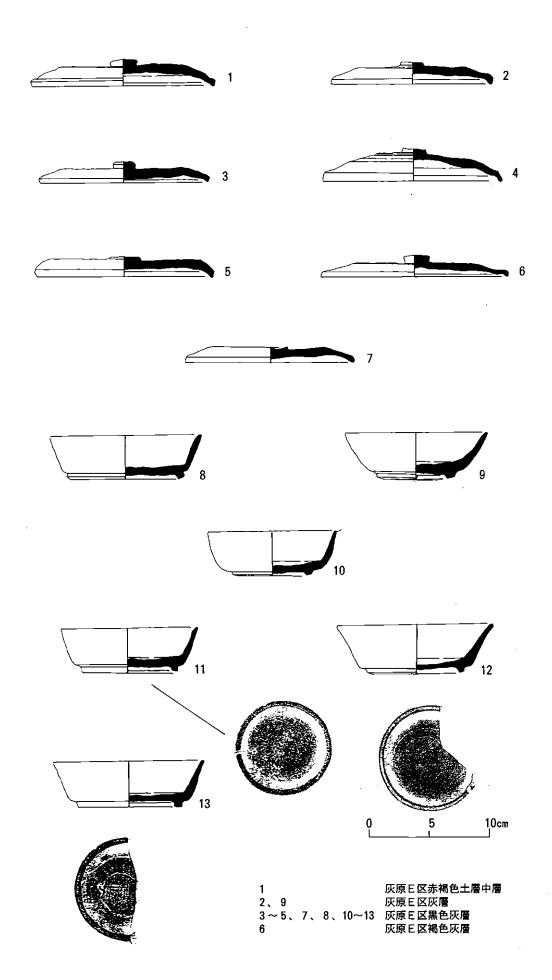
灰原D区(皿、杯)出土遺物実測図



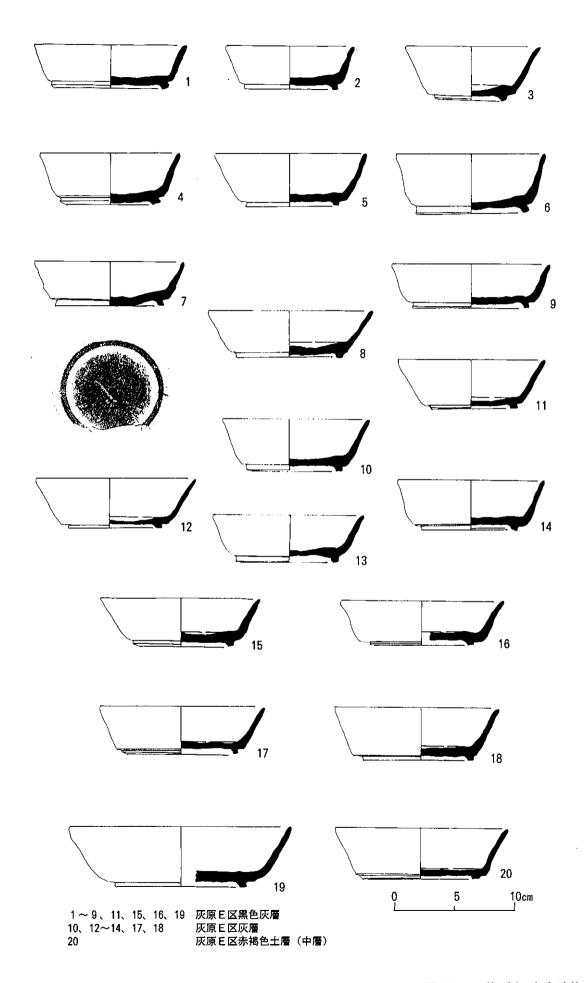
灰原D区(蓋、鉢、壺、高杯、他)出土遺物実測図



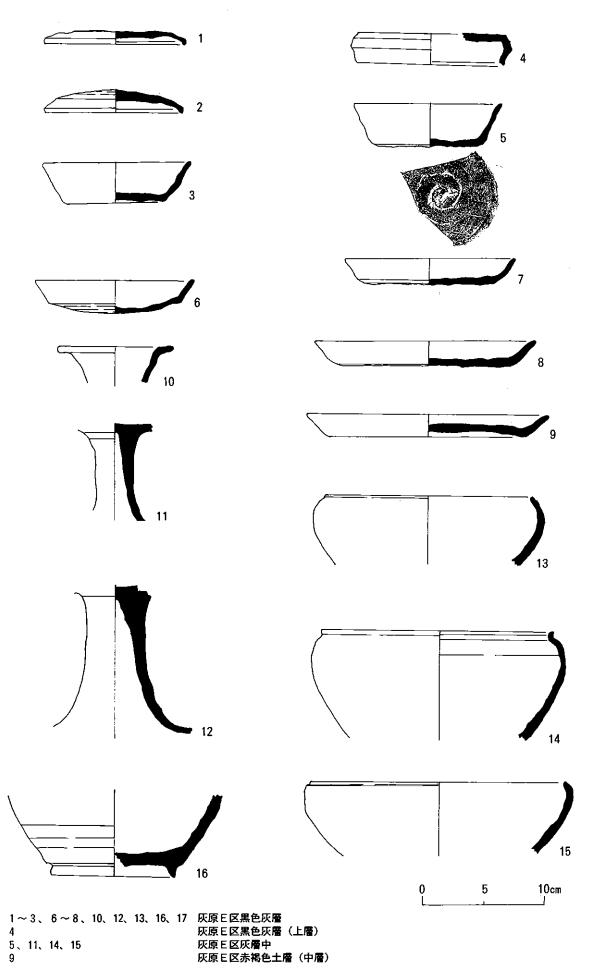
灰原E区(蓋)出土遺物実測図



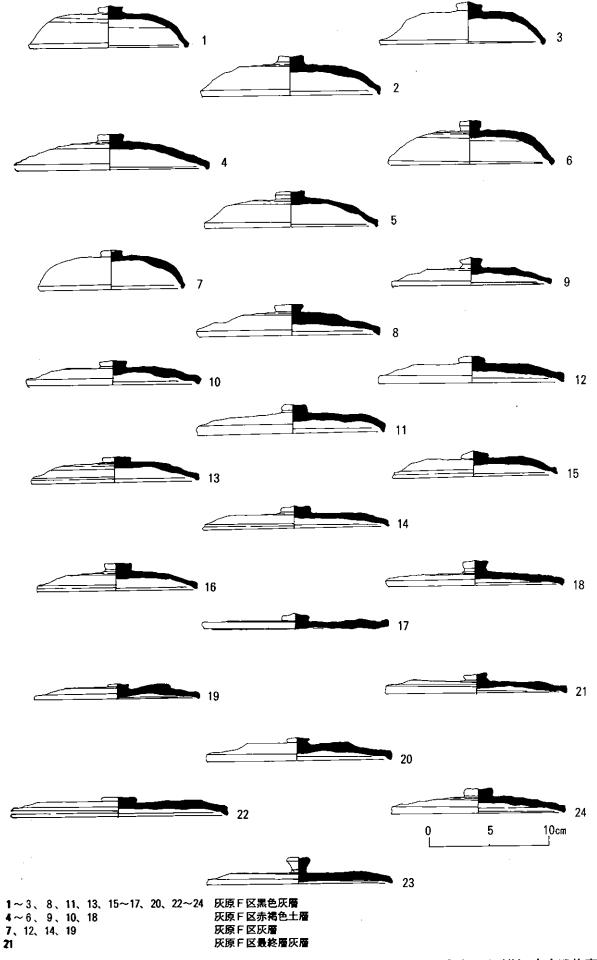
灰原E区(蓋、杯身)出土遺物実測図



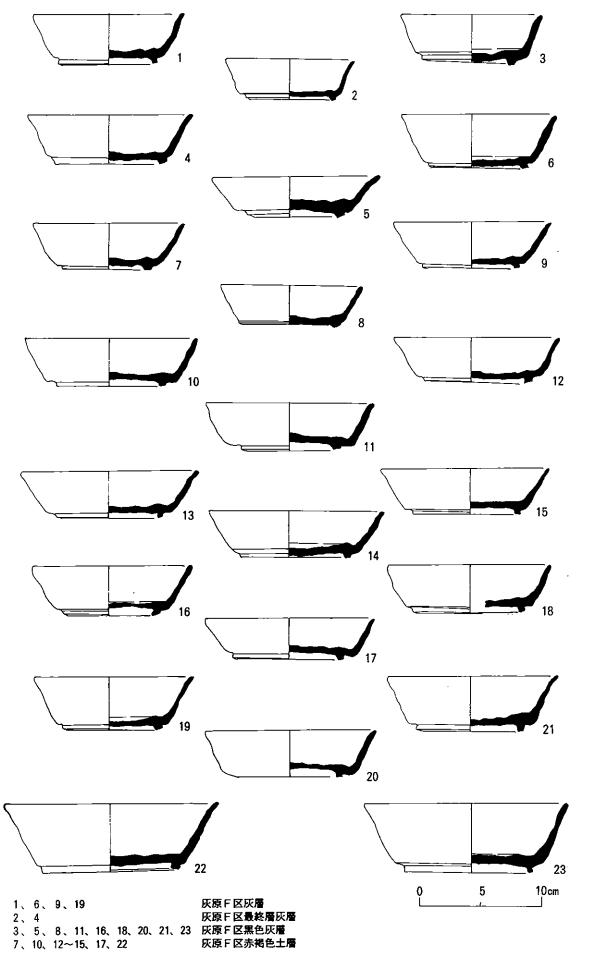
灰原E区(杯身)出土遺物実測図



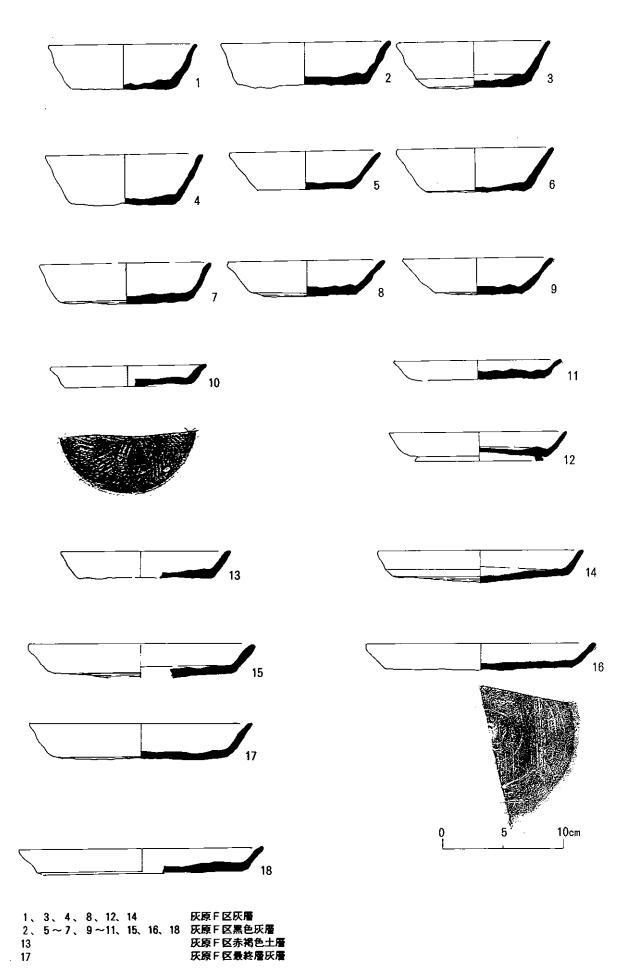
灰原E区(蓋、杯、壺、鉢、他)出土遺物実測図



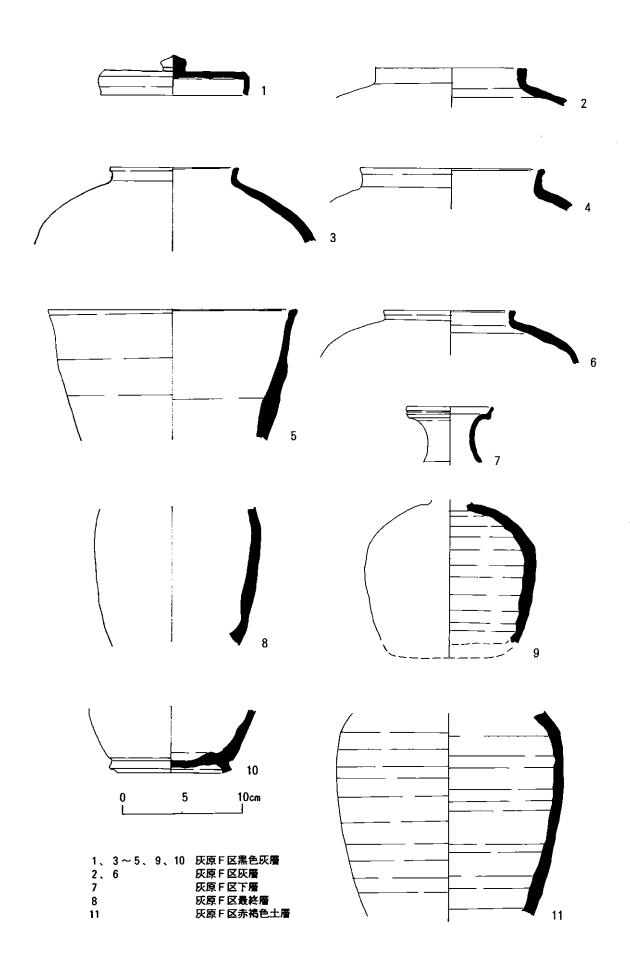
灰原F区(蓋)出土遺物実測図



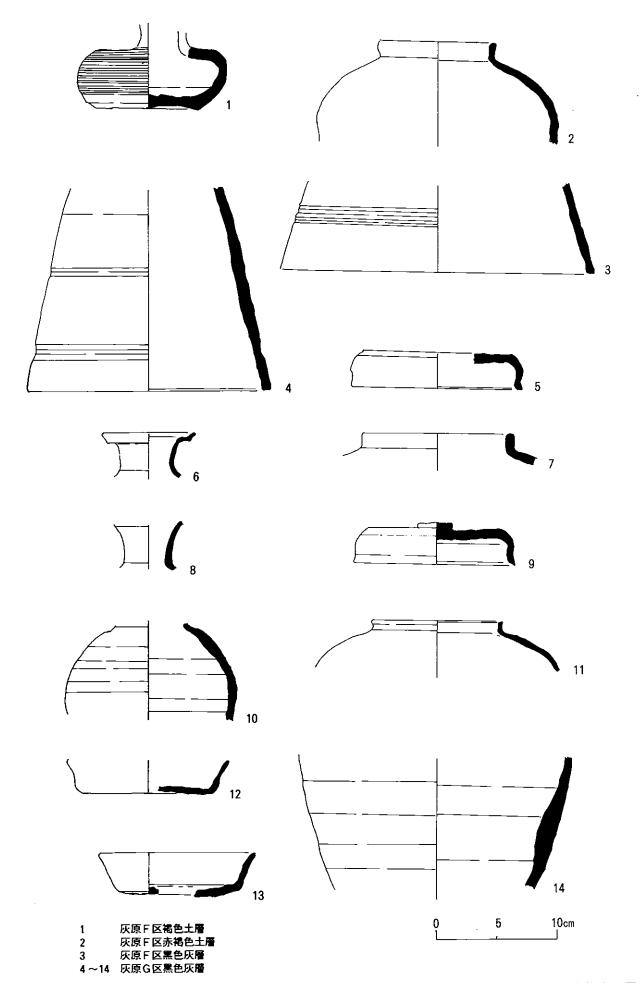
灰原F区(杯身)出土遺物実測図



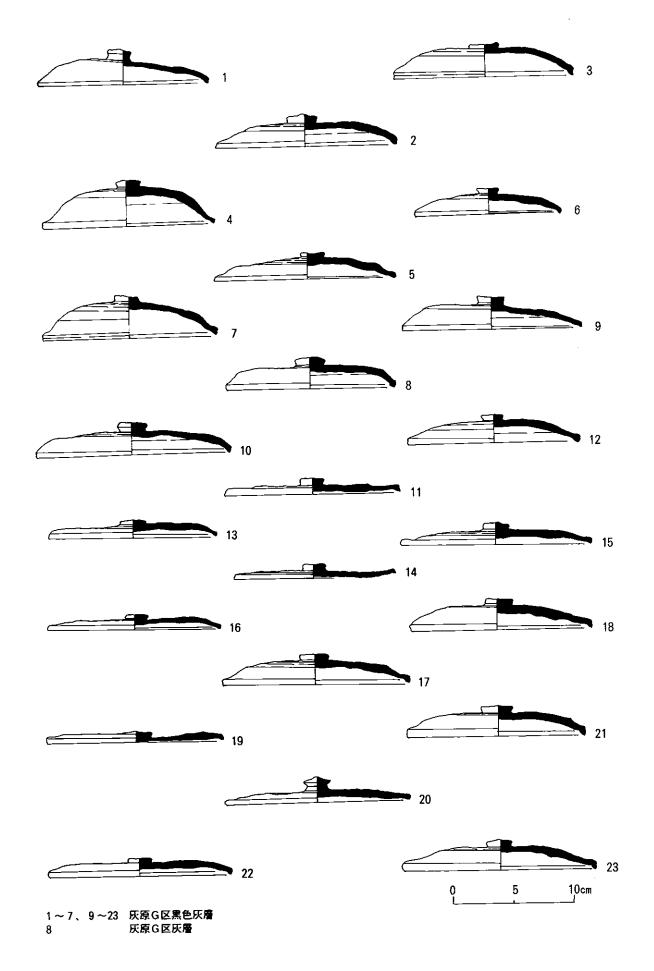
灰原F区(杯、皿)出土遺物実測図



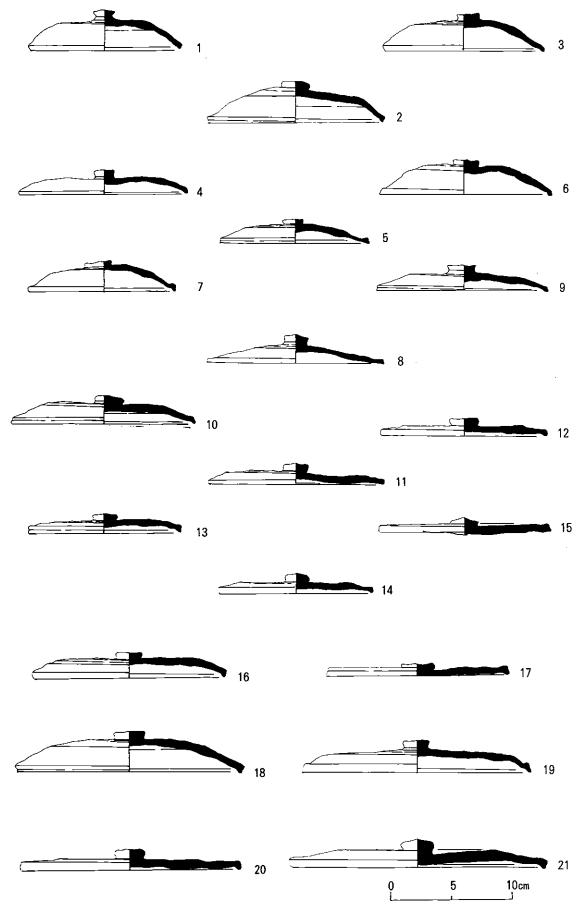
灰原F区(壺、他)出土遺物実測図



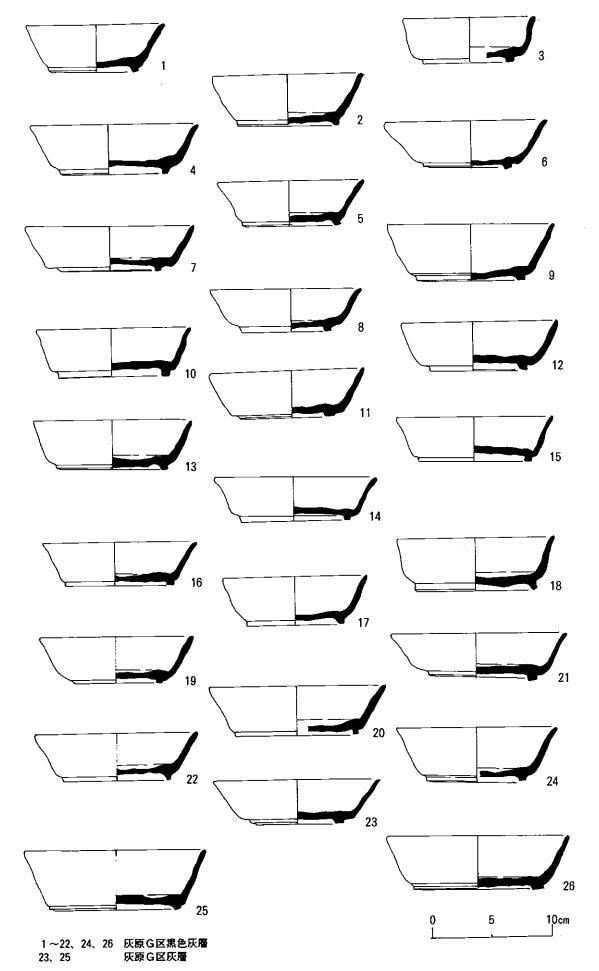
灰原F・G区(瓶、他)出土遺物実測図



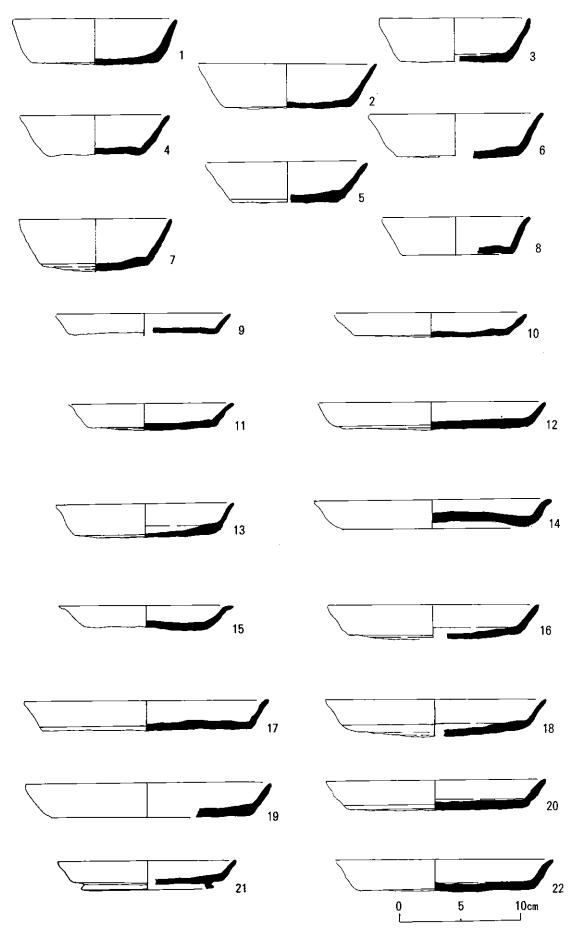
灰原G区(蓋)出土遺物実測図



灰原G区(蓋)出土遺物実測図

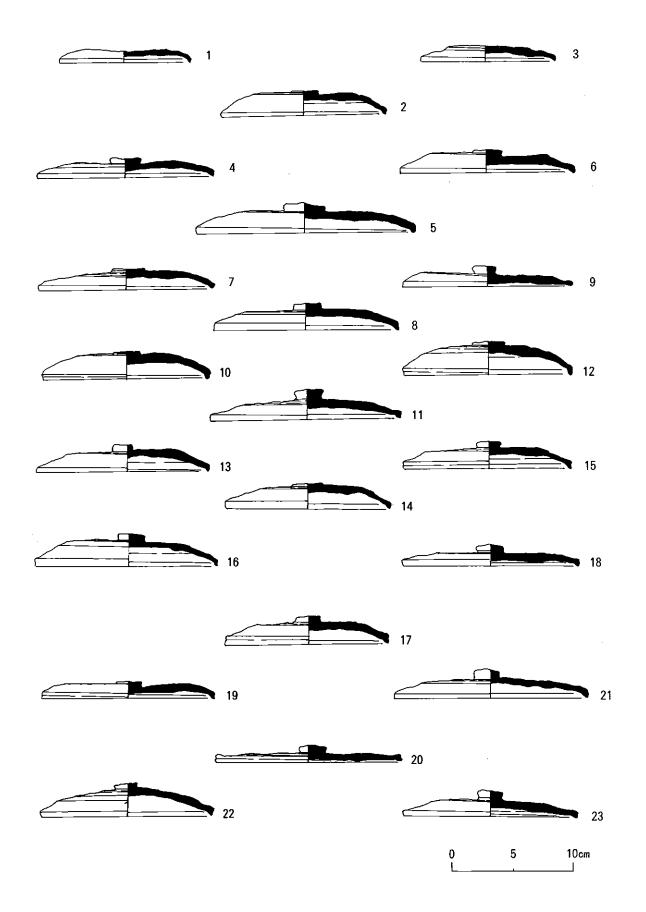


灰原G区(杯身)出土遺物実測図

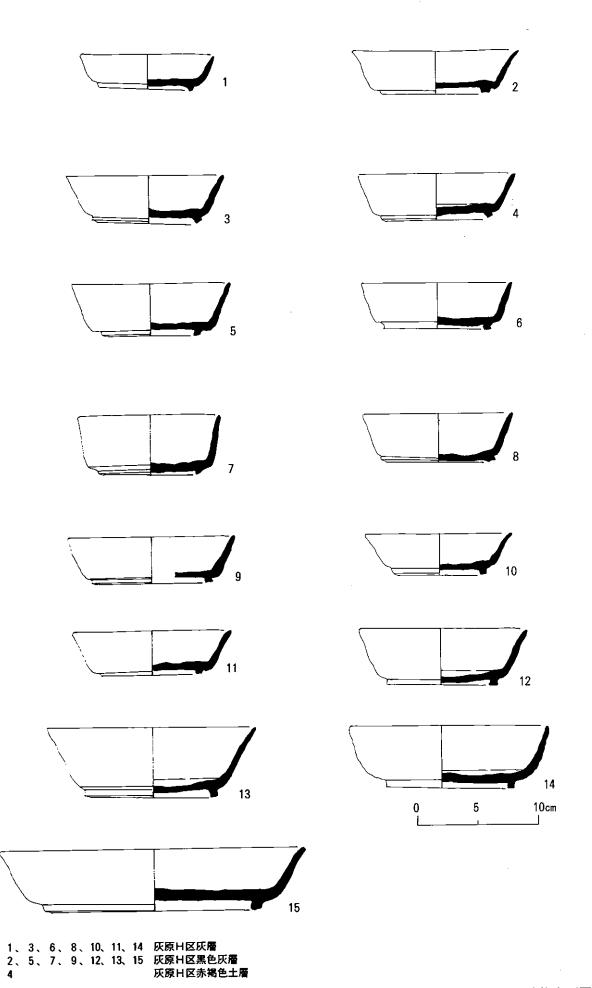


1~22 灰原G区黑色灰層

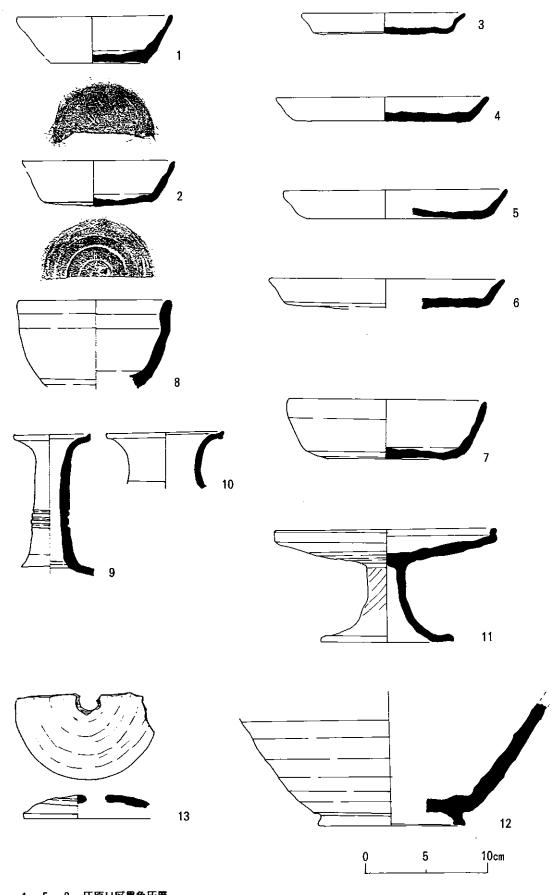
灰原G区(杯、皿)出土遺物実測図



1、2、4、7、12~18 灰原H区灰層 3、5、6、9、22 灰原H区黒色灰層 8、10、11、19~21、23 灰原H区赤褐色土層

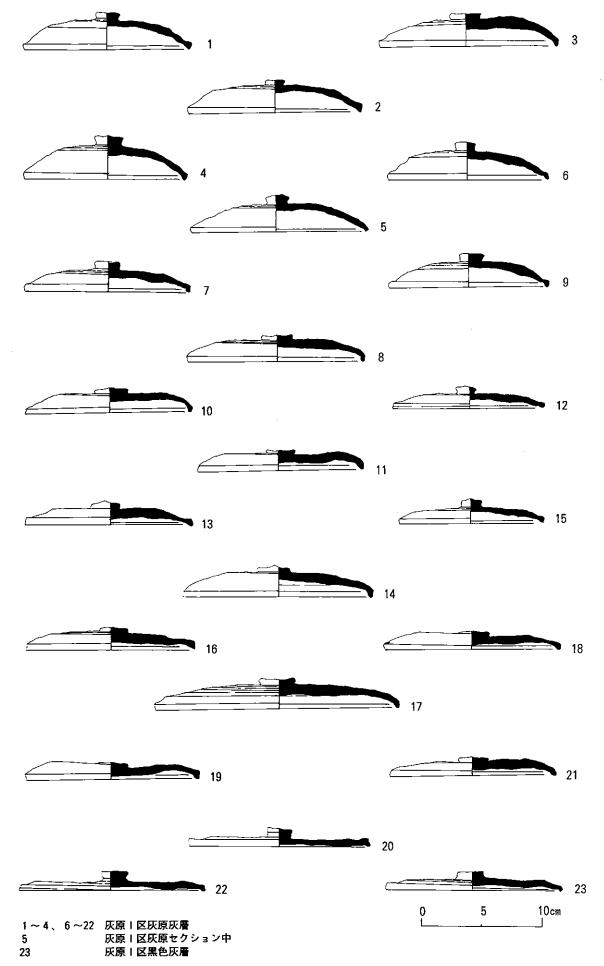


灰原H区(杯身)出土遺物実測図

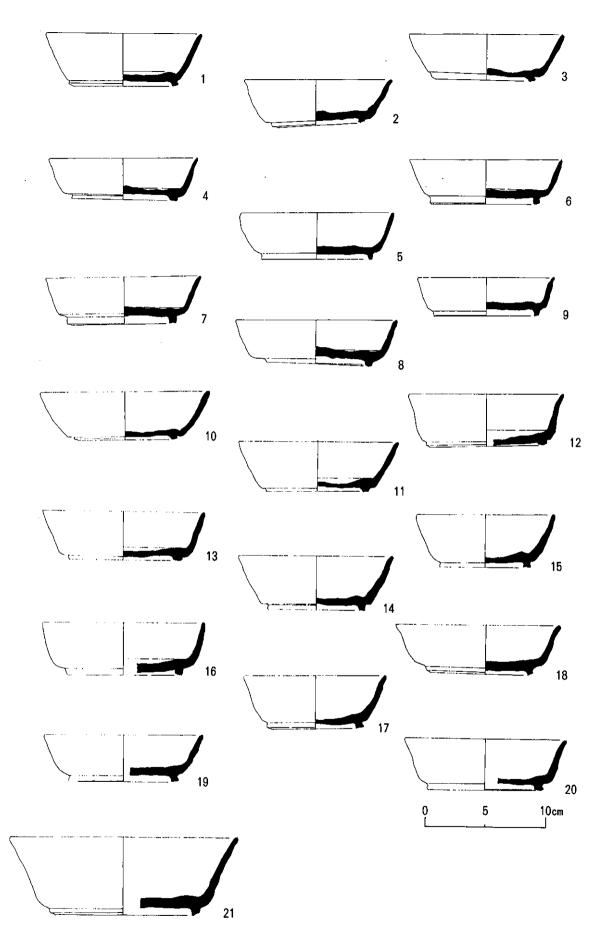


1~5、8 灰原H区黑色灰層 6 灰原H区赤褐色土層 7、10~13 灰原I区灰層 9 灰原H区灰層

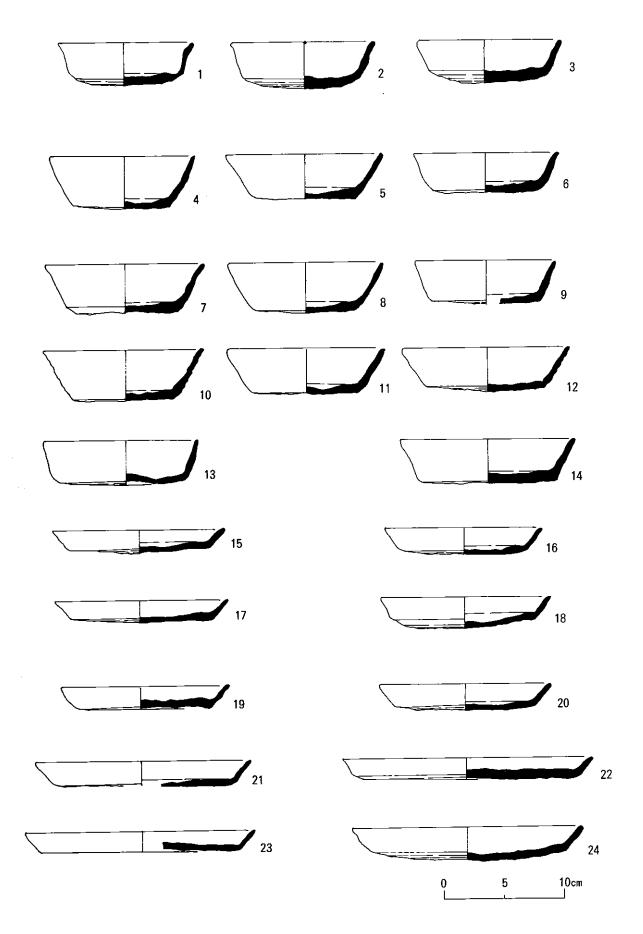
灰原H• I 区(杯、皿、瓶、高杯、他)出土遺物実測図

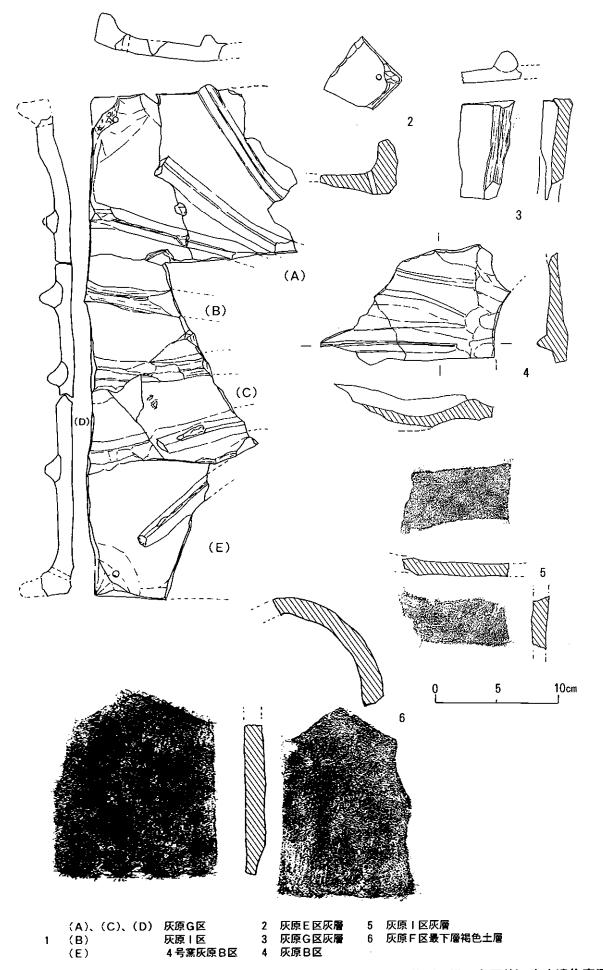


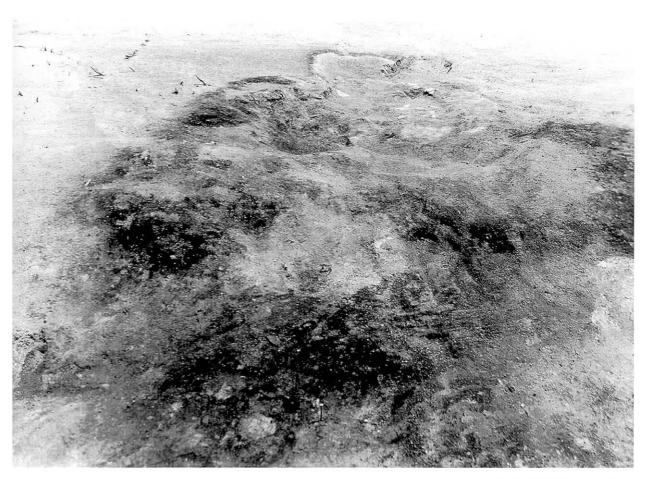
灰原 | 区 (蓋) 出土遺物実測図



1~21 灰原 | 区灰原灰層







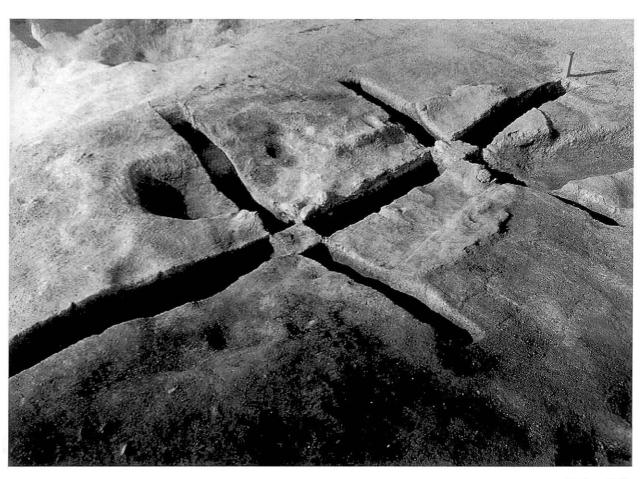
2号窯調査着手後まもなく



同上 窯体検出状況 (東から)



2号窯たちわり設定後



同上 近景



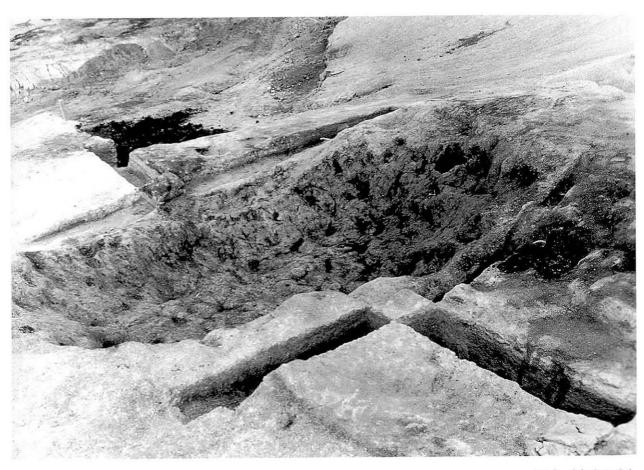
3号窯全景(北から)



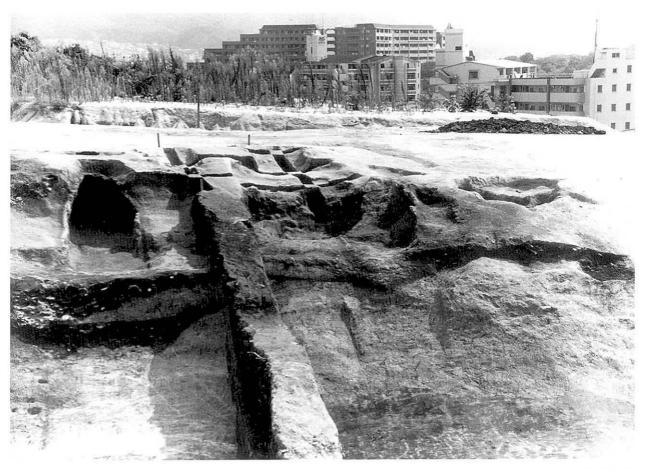
同上(西から)



3号窯前庭部ピット(南から)



同上 (南東から)



3 • 4 • 5 • 5 − Ⅱ 号窯全景



5-Ⅱ号窯全景(北から)



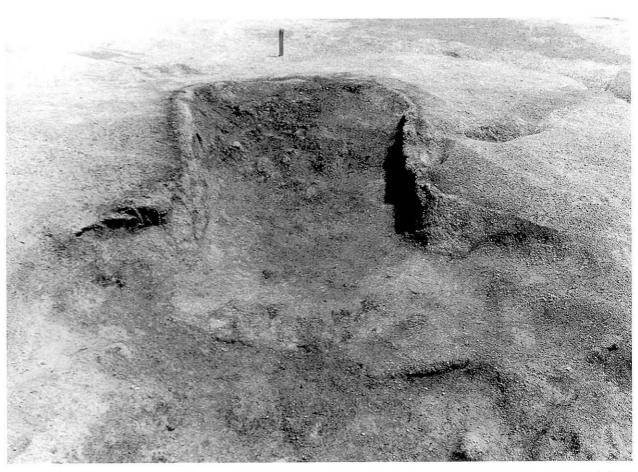
3・4・5号窯の状況



同上 近景



4 号窯全景



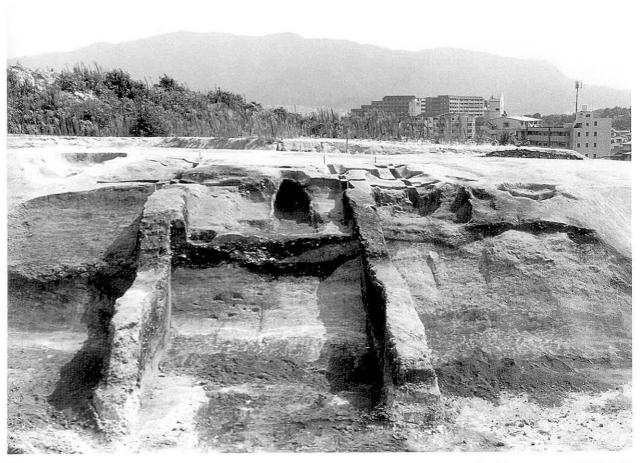
5号窯全景



S X 13・5・4 号窯たちわり後



5号窯たちわり後



本堂5次2~5-Ⅱ号窯全景



同上 灰原全景



灰原G区横断セクション



同上 H区・I区縦断セクション



灰原H・I・D・E区



灰原H区横断セクション



灰原 | 区縦断セクション



灰原I区横断セクション



S X 14全景(南から)



同上(西から)



SX14全景(南東から)



同上 細部



SX14遺物除去後



同上



SX15 (南から)



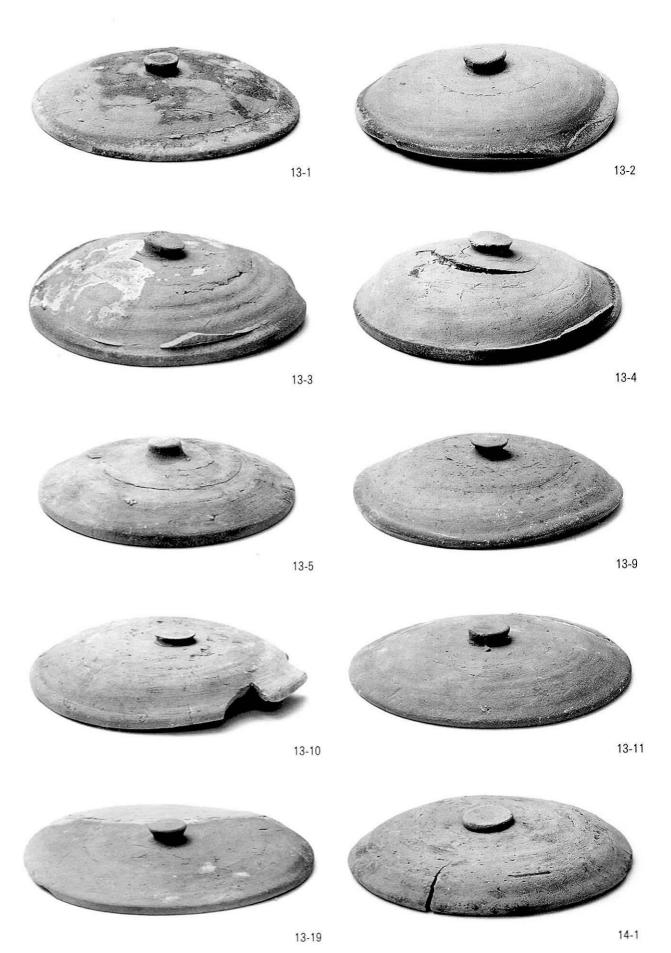
同上(西から)



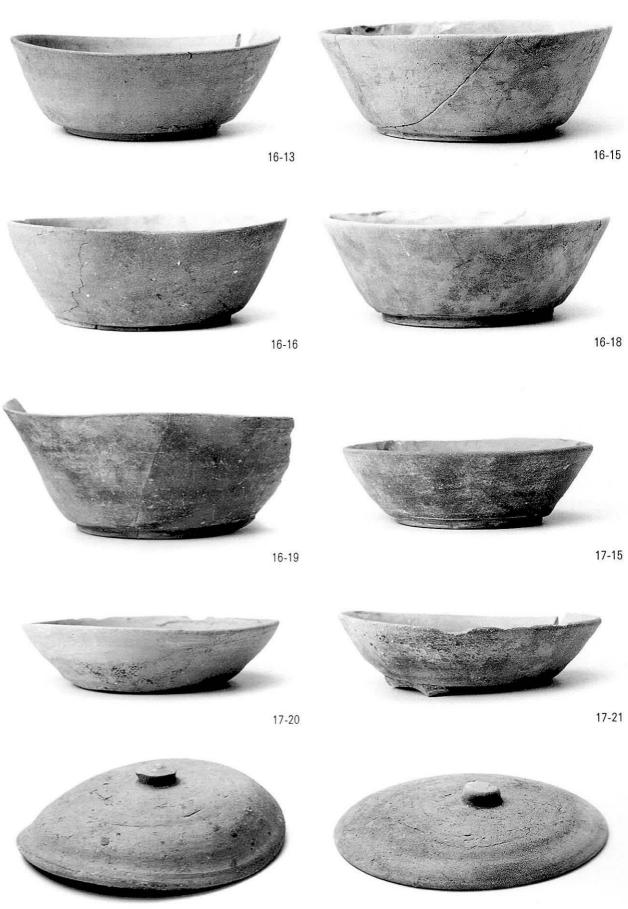
S X 15 (遺物除去後)



3号窯の煙道部とSX16



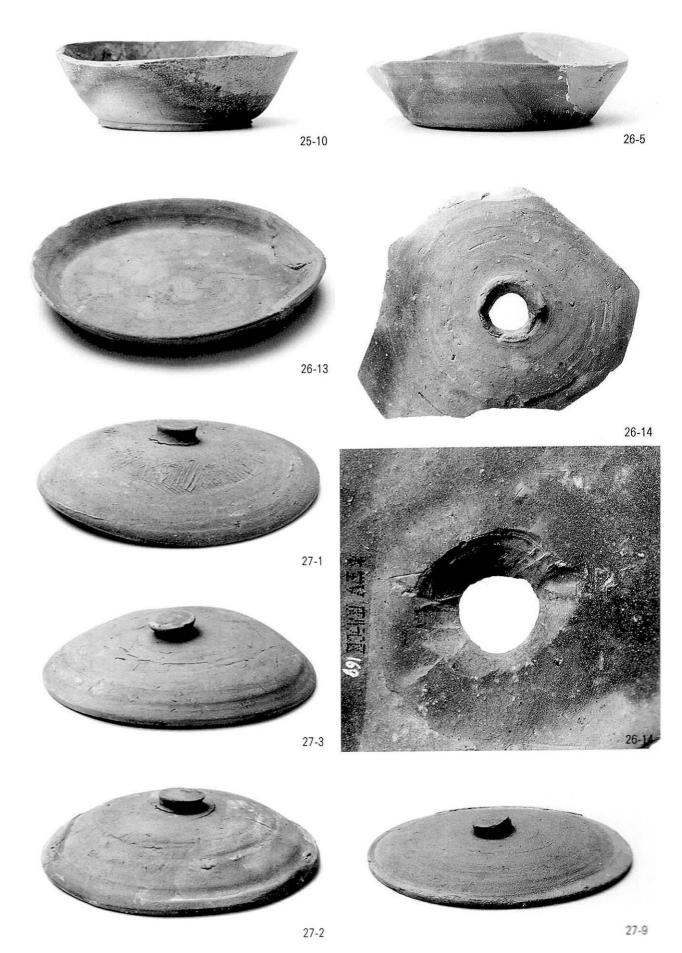




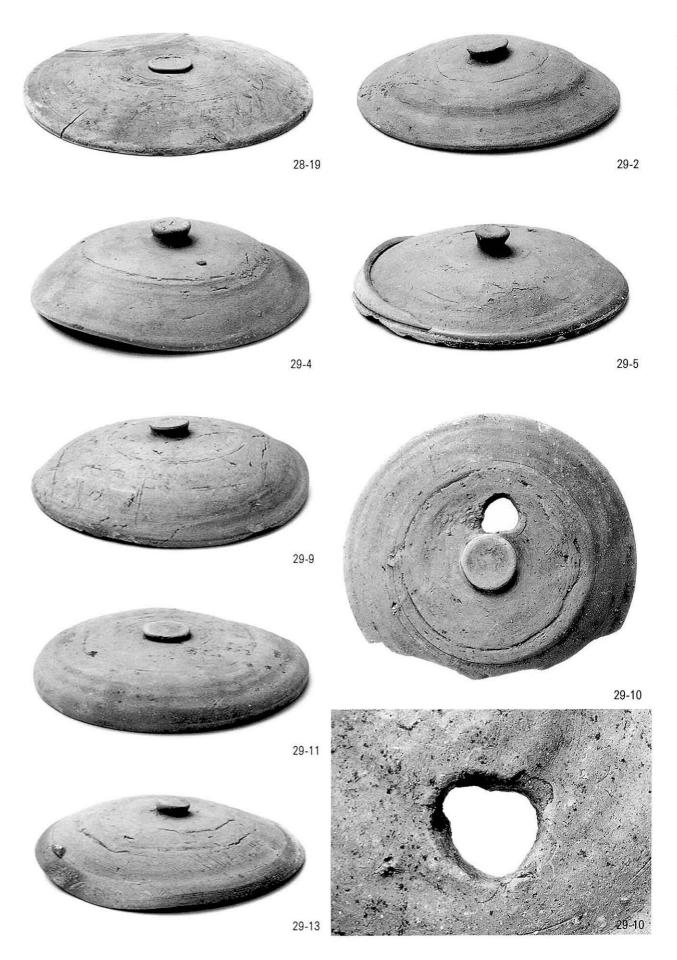




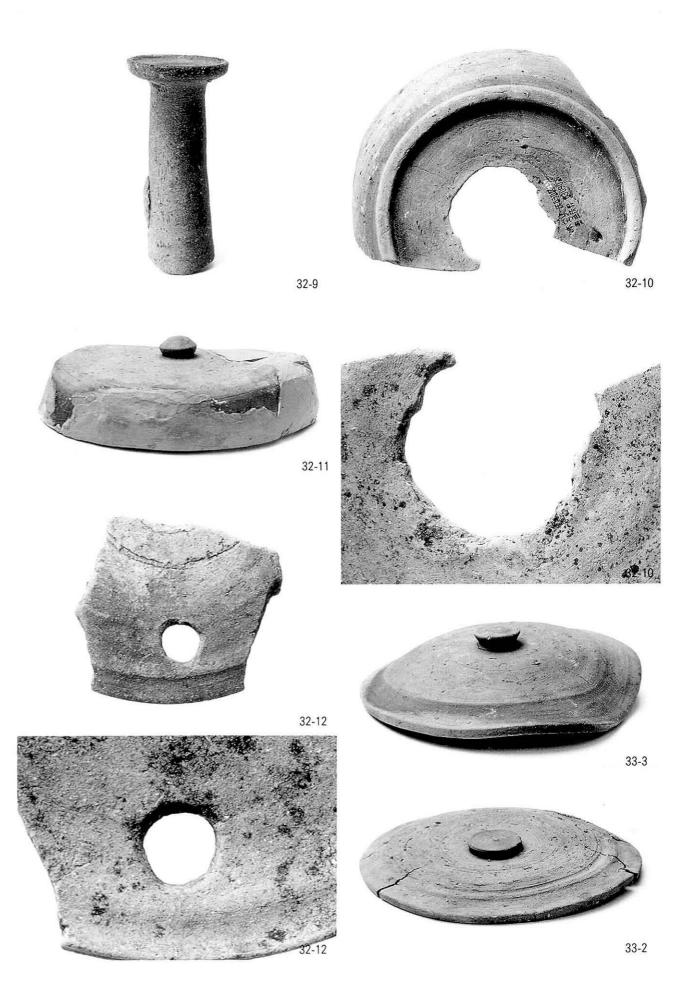


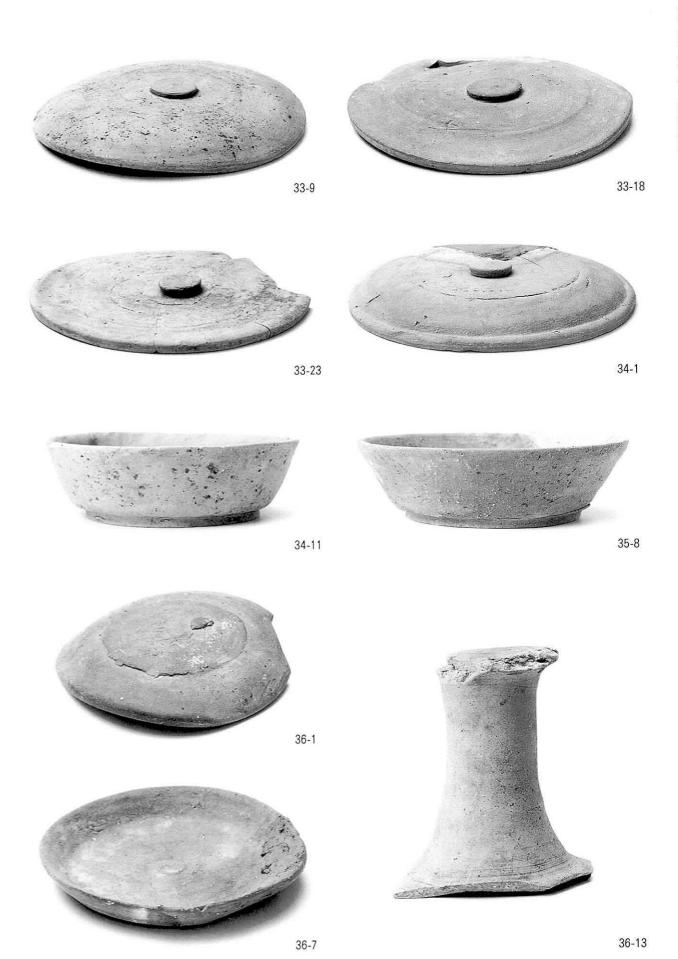


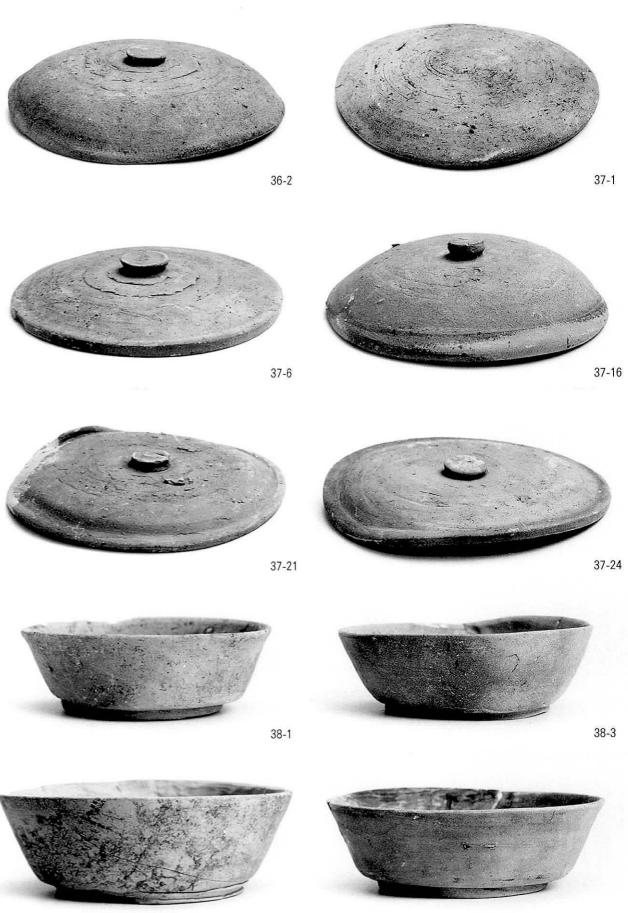


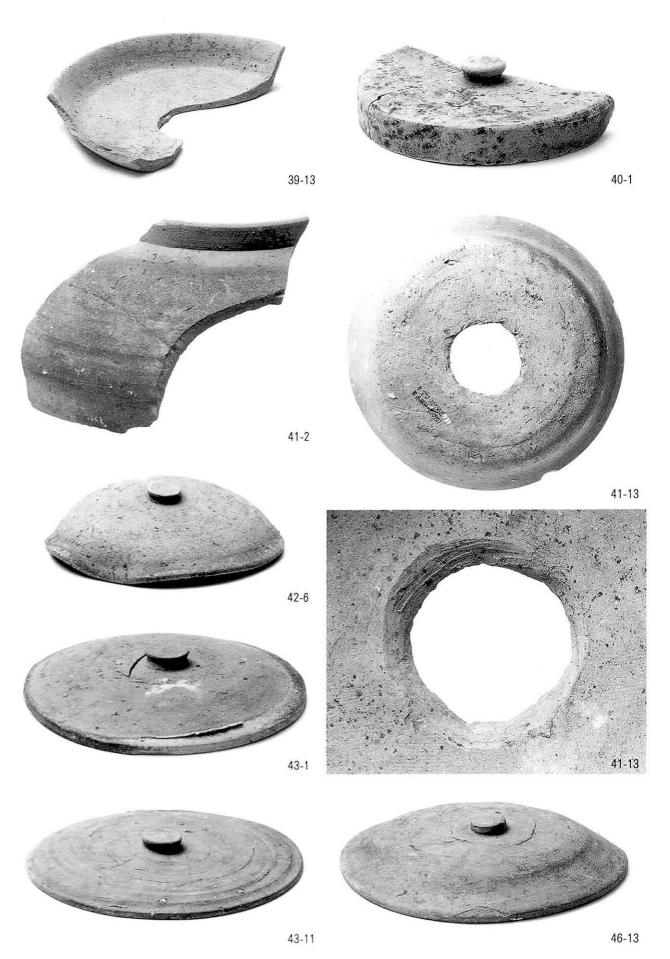


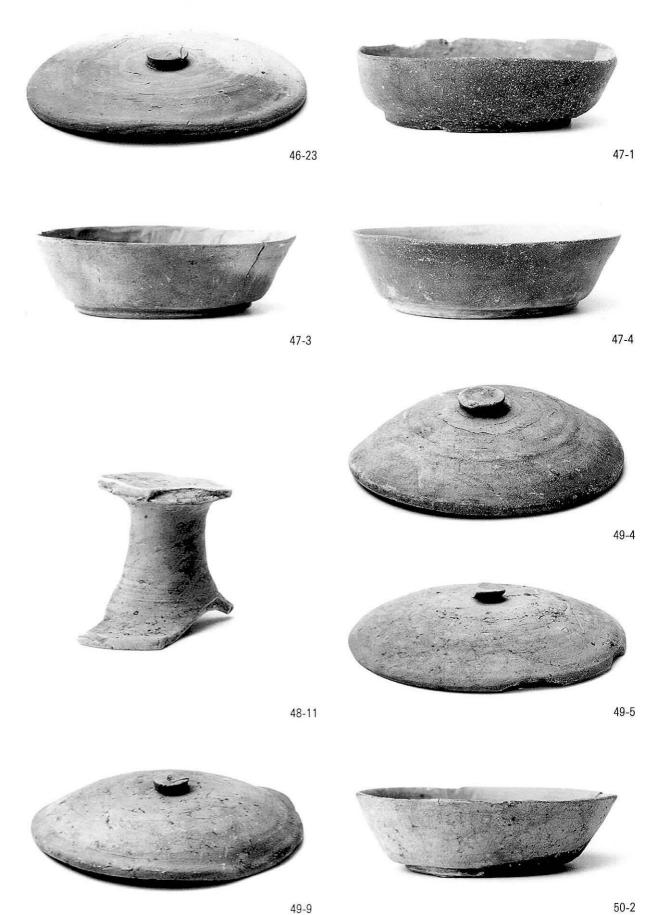




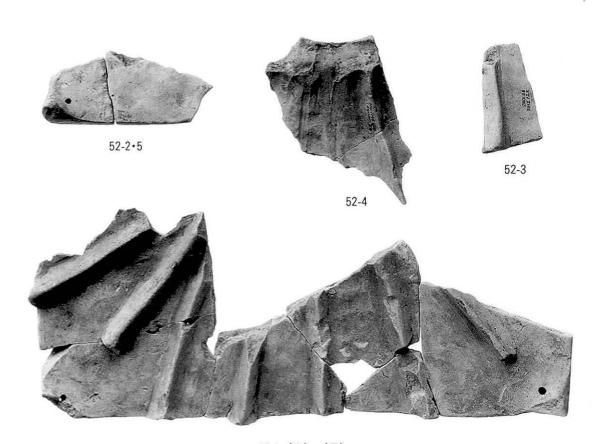












52-1·(A)~(E)

## 大野城市文化財調査報告書 第64集

平成16年3月

発 行 大野城市教育委員会 福岡県大野城市曜町2丁目2番1号

印刷サンキ印刷株式会社